

---

---

# 日本地球化学会ニュース

No .183

2005 .12 .1

---

---

## 主な記事

### ●学会記事

- 「柴田賞・学会賞・奨励賞・功労賞」2006年度受賞候補者推薦の募集
- 2006年度第1回鳥居基金助成の募集
- ゴールドシュミット国際会議 (Goldschmidt 2006メルボルン) 開催のお知らせ
- 地球化学講座第6巻訂正のお知らせ
- 地球化学講座よりどりまとめて2割引
- 高等学校「理科」における全員必修科目の創設とその内容に関する提言
- 日本地球化学会2005年度学会賞・奨励賞受賞者のプロフィール
- 鳥居基金実施報告
- 2005年度総会報告
- 評議員会，研連議事録
- その他のシンポジウム，人事公募等の各種情報のお知らせ
  - 第二回 SOLAS Summer School 参加報告

日本地球化学会のホームページをリニューアルする予定です

URL アドレスは，<http://www.geochem.jp/>です。

より見やすく分かりやすくを目指しております。

研究助成，シンポジウム，人事公募等の各種情報は随時更新しておりますのでそちらもご覧ください。

会員の皆さまのご意見をお待ちしております。

**日本地球化学会**  
**「柴田賞・学会賞・奨励賞・功労賞」**  
**2006年度受賞候補者推薦の募集**

応募期限 2006年1月31日(月)

日本地球化学会規定により、柴田賞・学会賞・奨励賞・功労賞受賞候補者の推薦を募集いたします。つきましては、下記ご参照の上、会員各位のご関係で適当と思われる受賞候補者を自薦他薦を問わずご推薦下さいますようお願いいたします。

**候補者の資格**

- (柴田賞) 地球化学の発展に関し、学術上顕著な功績のあった者。
- (学会賞) 地球化学の分野で特に優秀な業績を収めた本会会員。
- (奨励賞) 地球化学の進歩に寄与するすぐれた研究をなし、なお将来の発展を期待しうる本会会員。受賞者の年齢は2006年4月1日において満35才未満である(誕生日が1971年4月2日以降である)ことを要する。
- (功労賞) 我が国の地球化学あるいは本会の発展に関し特に寄与のあった者または団体。

募集の方法：本会会員の推薦による。

推薦の方法：所定用紙に記載した推薦者を2006年1月31日(火)まで庶務幹事へ提出する(当日消印有効)。

提出先：植田千秋

〒560 0043 大阪府豊中市待兼山町1 1  
大阪大学大学院理学研究科宇宙地球科学専攻  
Tel : 06 6850 5798 , Fax : 06 6850 5480  
E-mail : shomu@geochem.jp

推薦の書式は、会員名簿(2005年度版)のハンドブック部(71ページ)に記載されています。これをコピーして使用するか、同様の書式をワープロ等で作成して使用して下さい。なお、書式のわからない場合や、この件についてのお問い合わせは、本会庶務担当幹事(上記)までお願いします。

**2006年度第1回鳥居基金助成の募集について**

2006年度第1回鳥居基金助成の応募の締め切りは2006年1月末日となります。本学会ホームページに応

募要項がありますので、ご参照の上、応募書類を提出して下さい。なお今回の助成の対象は、2006年4月から2007年3月までの1年間に実施される海外渡航及び国内研究集会となりますのでご注意ください。

**申請手続**

応募者は、Vol. 39特別号89, 90ページに掲載されている申請書(①-Aまたは①-B)を所定の期日までに日本地球化学会に提出してください。参考となる資料(海外派遣については業績リストおよび学会参加の場合は学会概要等、国内研究集会については集会の案内・概要等)があれば添付してください。

提出先：植田千秋

〒560 0043 大阪府豊中市待兼山町1 1  
大阪大学大学院理学研究科宇宙地球科学専攻  
Tel : 06 6850 5798 , Fax : 06 6850 5480  
E-mail : shomu@geochem.jp

**<ゴールドシュミット国際会議2006のお知らせ>**

16th Annual V. M. Goldschmidt Conference 2006  
27 August-1 September 2006  
Melbourne Exhibition and Convention Centre,  
Melbourne, Australia

The 16th Annual V. M. Goldschmidt conference in 2006 is being hosted for the first time in the southern hemisphere. Australia's unique, plate-scale natural laboratory will form the backdrop for the presentation of new ideas on a diverse range of geochemical topics. Housed under one roof in the state of the art facilities of the Melbourne Convention Centre, we have an unparalleled opportunity to enjoy stimulating science, some of the finest wines and dining opportunities as well as a gateway to the wealth of Australia's geological record.

Please join us in Melbourne for what promises to be a landmark conference for the global geochemical community.

Sponsored by:

European Association for Geochemistry  
Geochemical Society  
Geological Society of Australia

Expression of Interest:

If you are interested in attending the Goldschmidt 2006 Conference and would like further information, please register your interest on-line at:

<http://www.goldschmidt2006.org>

Abstract Submission:

Abstract submission is now open. For more info:

<http://www.goldschmidt2006.org/program.asp>

Contact Details:

Goldschmidt 2006 Conference Managers

GPO Box 128

Sydney NSW 2001

Australia

Phone: +61292650700

Fax: +61292675443

E-mail: [goldschmidt2006@tourhosts.com.au](mailto:goldschmidt2006@tourhosts.com.au)

CRITICAL DATES

Deadline for receipt of abstracts: 13 April 2006

Speaker Registration Deadline: 30 June 2006

### 地球化学講座第6巻の読者の皆様へ 訂正のお知らせ

本年4月に日本地球化学会監修にて培風館より出版いたしました「地球化学講座6 大気・水圏の地球化学」に重大な掲載漏れがありました。ここに、関係各位ならびに読者の皆様にご迷惑をおかけしたことをお詫びするとともに、記載漏れ箇所を冊子として印刷いたしましたのでご報告いたします。訂正箇所はファイルとして、日本地球化学会のホームページに掲載しダウンロードできるようにいたしました。なお、冊子をご希望の方は日本地球化学会の事務局（国際文献印刷株）Tel: 03 5389 6304, E-mail: [gsj-post@bunken.co.jp](mailto:gsj-post@bunken.co.jp) まで連絡をいただければ冊子をお送りいたします。

今後このようなことのないよう十分注意してまいりますので、今回の件につきましてはご許容くださいますようお願い申し上げます。

敬具

地球化学講座第6巻 編集委員 河村公隆

地球化学講座編集委員会委員長 松久幸敬

日本地球化学会会長 田中 剛

培風館編集部第二課 課長 山本 新

2005年9月22日

### 地球化学講座よりどりまとめて 2割引（会員による申し込み限定）

地球化学講座に下記の第1巻と第5巻が新しく刊行されました。会員による申し込み限定ですべて2割引です。別に送料（着払い）がかかりますが、既刊の3巻（第3巻、第4巻、第6巻）と合わせて、2冊以上注文すると送料を入れても生協より割安です。お近くの方々の（非会員も）希望も取りまとめてご注文ください。

新刊

第1巻 地球化学概説（松久幸敬・赤木 右共著）：  
（11月発行）

序章 地球化学研究の歩み

1章 宇宙の成り立ちと元素の起源

2章 太陽と太陽系

3章 地球内部の構造と組成

4章 地球の誕生と進化

5章 火成岩と多様性とマグマの地球化学

6章 鉱化作用と微量元素の濃縮

7章 生命の誕生と進化

8章 大気の組成と物質循環

9章 海洋の組成と物質循環

10章 生物と物質循環

11章 河川水、地下水、土壌の地球化学

12章 地球の環境変化

終章 人類の未来と地球化学

第5巻 生物地球化学（南川雅男・吉岡崇仁共編）：  
（2006年1月発行）

1章 生物地球化学とはどんな学問か

2章 生物の元素組成

3章 物質循環に果たす生物の役割

4章 生物圏における安定同位体の挙動

5章 安定同位体による生物環境の理解

6章 生物地球化学の今後の課題

既刊

第3巻 マントル・地殻の地球化学（野津憲治・清水

- 洋共編)
- 1章 固体地球の内部構造と構成物質(入船徹男)
  - 2章 固体地球物質の化学と同位体組成(鍵 裕之)
  - 3章 元素の分配(川邊岩夫)
  - 4章 地球の誕生と形成直後の分化(平田岳史)
  - 5章 マントル 地殻系45億年の進化(中井俊一)
  - 6章 大気・海洋の形成と進化(佐野有司)
  - 7章 マントル・地殻における物質循環(岩森 光)
  - 8章 堆積作用と地球表層環境の変遷(清水 洋)
  - 9章 地殻内流体の関与する化学現象(篠原宏志)
- 第4巻 「有機地球化学」(石渡良志・山本正伸共編)
- 1章 地球と有機物：概観(下山 晃・石渡良志)
  - 2章 生体有機物(半田暢彦)
  - 3章 有機物の生産と堆積(田上英一郎)
  - 4章 堆積物中の有機物の分布と初期変化  
(福島和夫)
  - 5章 腐植物質およびケロジェン(石渡良志)
  - 6章 堆積有機物の熱化学変化(坂田 將)
  - 7章 有機分子の同位体組成(奈良岡 浩)
  - 8章 有機分子による地球表層環境の解析と復元  
(鈴木徳行・山本正伸)
- 第6巻 「大気・水圏の地球化学」(河村公隆・野崎義行共編) = 訂正表付 =
- 1章 大気構造(岩上直幹)
  - 2章 大気組成とグローバル変化  
(河村公隆・植松光夫)
  - 3章 成層圏の光化学(今村隆史)
  - 4章 対流圏の光化学(梶井克純・河村公隆)
  - 5章 大気成分のグローバル循環  
(植松光夫・沼口 敦・河村公隆)
  - 6章 陸水の地球化学(小倉紀雄)
  - 7章 海水の元素組成(乗木新一郎・中山英一郎・田上英一郎・小畑 元・野崎義行)
  - 8章 海洋における元素の分布を支配する要因  
(野崎義行)
  - 9章 海洋境界を通しての物質のフラックス  
(増澤敏行・吉川久幸・谷口真人)
  - 10章 海底堆積物の地球化学(加藤義久)

送付は受取人払い冊子小包およびゆうパック受取人払いのみとする。

・実際にかかる送料は5冊までは冊子小包で下記の通

りです。それ以上はゆうパックを利用しますので送付先住所によって異なりますが、より割安になります。ただし実際にかかる料金は郵便局に直接持ち込む場合の割引100円 - 着払い手数料20円 = 80円を引いた金額になります。

(例)名古屋の田中が10冊購入した場合は  
80サイズ 愛知県

900円 - 持込割引100円 + 着払手数料20円 = 820円

勤務先に配達をされる時は、着払いの郵便物が来る事を、担当事務にあらかじめ話されておくと万全です。

注文冊数が1冊まで 360円

2～3冊まで 470円

4～5冊まで 610円

6～10冊まで ゆうパック 80サイズ, 料金は地域により変わる

11～20冊まで ゆうパック 120サイズ, 料金は地域により変わる

21冊以上は培風館の山本さんにご相談ください。

以下の申込書を印刷し、必要事項を記入の上、電子メール、ファックス、郵送で2006年1月11日までに培風館(山本さん宛)にお送りください。本と一緒に送られた請求書の金額を指定の銀行口座に払い込んでください。また、校費購入等で代表者印入りの請求書等の発行は行いませんので、ご了承ください。

注文書送り先: 電子メール [bfk-2hen@mx6.mesh.ne.jp](mailto:bfk-2hen@mx6.mesh.ne.jp) (件名を「地球化学講座購入申込」としてごください。)

ファックス03 3262 5357 培風館(山本新 様宛)  
または、〒102 8260 東京都千代田区九段南4 3 12  
培風館編集部 山本新 様宛

#### 注 文 書

「地球化学講座」を日本地球化学会会員割引価格で注文します。

注文巻号と注文部数

第1巻「地球化学概説」(税込2,940円)

冊(新刊)

第3巻「マントル・地殻の地球化学」(税込3,192円)

冊

第4巻「有機地球化学」(税込3,108円) 冊  
第5巻「生物地球化学」(税込2,940円) 冊(新刊)

第6巻「大気・水圏の地球化学」(税込3,528円) 冊  
合計 冊

氏名  
送本先住所(〒 )  
電話  
ファックス

### 「すべての高校生が学ぶべき地球人の科学リテラシー 高等学校「理科」における全員必修科目の創設とその内容に関する提言」について

すでにご存知の方もいらっしゃると思いますが、日本地球化学会も加入している日本地球惑星科学連合は、2005年7月29日に次期学習指導要領の改訂に向けた提言書を文部科学省へ提出しました。提言書のタイトルは、「すべての高校生が学ぶべき地球人としての科学リテラシー 高等学校「理科」における全員必修科目の創設とその内容に関する提言」です。本提言は、後期中等教育(高等学校)段階において全員必修とする新科目の創設およびその内容から構成されています。創設を提案する新科目は、理系・文系を問わず地球人として全ての人が身に付けるべき必要最小限の科学リテラシーを学べる内容から構成されています。

同連合の教育問題検討委員会の教育課程小委員会では、この提言に基づく小学校と中学校の理科および高等学校地学の内容の検討を始めました。

つきましては、この提言に関連するご意見や、日本の理科教育や高地学において地球化学の面からのご意見をいただくと、学会代表で検討する委員としては大変助かります。よろしくお願いたします。

なお、提言の内容をメールの後半につけますが、提言の内容や提出時の記者会見の様などは連合のホームページ(<http://www.jpogu.org/>)でもご覧いただけます。

日本地球惑星科学連合教育問題検討委員  
(日本地球化学会代表)  
瀧上 豊(関東学園大学)  
ytakigam@kanto-gakuen.ac.jp

平成17年7月29日

中央教育審議会 会長 鳥居泰彦様

すべての高校生が学ぶべき地球人の科学リテラシー 高等学校「理科」における全員必修科目の創設とその内容に関する提言

日本地球惑星科学連合 代表 浜野洋三

#### 提言

すべての高校生が地球人として必要な科学リテラシーを学べるようにするため、表1に示す内容の教科理科科目「教養理科(仮称)」(4単位分以上)を創設し、これを全員必修の科目にすることを提言します。

#### 提言の趣意

21世紀を生きる私たちは、地球温暖化や環境ホルモン等の様々な地球環境問題、地震・火山・台風等の自然災害の問題、資源の枯渇やエネルギー問題など人類にとって重要な数多くの課題に直面しており、これらの問題を解決していかなければなりません。そのためには、一部の専門家だけではなく、私たち皆が必要最低限の科学的知識と科学リテラシーを学び、豊かな自然観を身につけ、地球との共生のために自ら考え行動できるようになることが必要です。ところが現代は、むしろ、人々の自然からの乖離が強く懸念される時代です。

日本地球惑星科学連合(別紙)は、我々人類と地球の未来のために、このような現状の改善方策として、後期中等教育段階において、地球人として全ての人が身に付けるべき必要最小限の科学リテラシーを選定した新科目の創設を提言します。

また、このような基本的科学リテラシーを身に付けた上で、さらなる理科の選択科目を履修することが、卒業後に職業に就く者、理系進学者、文系進学者、いずれを問わず重要です。なお、本科目の目標を達成するためには、少なくとも4単位が必要であると考えます。

表1 高等学校教科「理科」で全員必修とすべき新設科目(4単位)にて取り扱う項目に関する提案内容

(提案する)科目名:教養理科

大項目;

中項目;

中項目に含まれる小項目もしくはキーワード

自然の探求；  
地球人としての科学リテラシー

宇宙の構成；  
宇宙の誕生と進化；  
時間と空間のスケール，構造と進化，太陽系，核融合，など

元素の誕生；  
原子の構造，周期表，原子・分子とイオン，放射性元素，など

力とエネルギー；  
運動のあらわし方，仕事とエネルギー，重力と万有引力，運動方程式，など

地球と生命；  
地球の誕生；  
内部構造，構成物質，大気，海，など

地球と生命の共進化；  
生命の誕生，生物の進化と絶滅，光合成とオゾン層，人類の誕生，など

生命のしくみ；  
細胞の働きとエネルギー，遺伝子とDNA，生殖，個体発生と系統発生，など

物質の変化と循環；  
物質の変化；  
電子配置と化学結合，化学反応式，中和反応，酸化還元，など

物質の循環；  
状態変化，水の循環，炭素循環，窒素循環，など

地球の資源；  
物質の濃集，エネルギー資源，鉱床，非金属資源，など

活動する地球；  
変動の記録；  
地形の形成，地層の形成，気候変動，自然景観，など

プレートと地震・火山；  
プレートテクトニクス，日本列島，火山活動，地震活動，など

海洋と大気の役割；  
太陽放射，地球の熱収支，海洋と大気の相互作用，気象，など

自然との共生；  
生物の多様性と環境；  
生態系，環境と生物分布，極限環境の生物，絶滅危惧種，など

環境問題；  
地球温暖化，環境ホルモン，環境汚染，オゾン層破壊，など

自然の恵みと災害；  
自然災害，ハザードマップ，洪水と平野の形成，火山と資源，など

科学と社会の関わり；  
科学と技術，自然と社会のバランス，循環型社会，科学リテラシーと防災，など

課題研究課題の選び方

探求の方法

まとめと発表

「教養理科（仮称）」作成にあたり目標とした点  
私たちは次のような教育目標に則り，提案する「教養理科（仮称）」の学習項目案（表1）の作成を行いました。

- 1．宇宙，地球，生命は長い時間をかけて現在の姿になっている事を知り，時間的・空間的広がりの中における人類の位置付けを考えることができる人になること。
- 2．物質，生命，エネルギーといった自然科学の基礎的な概念についての理解を通して，全ての自然現象は相互に密接に関連していることを知る人になること。
- 3．自然との共生について，科学的な判断および総合的な考察ができる人になること。

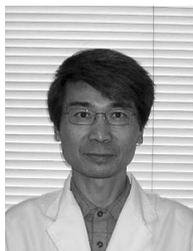
#### 期待される成果

本科目を履修した生徒には，次のような科学リテラシーの学習効果を期待することができます。

- 1．生命と地球環境のかかわりを時間的かつ空間的に学習することで，人類の生存基盤である地球環境の現在の有様を理解することができるようになる。
- 2．科学の基礎的な概念を学習することで，人類が直面している地球環境問題などを自ら分析し，総合的に解決策を考える態度と能力を身につけることができる。
- 3．自然災害についての科学的な知識，考え方を身につけることで，様々な局面での危機管理能力を持つことができる。
- 4．科学と技術とのかかわり，およびそれらと社会との関係についての，より深い洞察が可能になる。

## 日本地球化学会2005年度学会賞・奨励賞 受賞者のプロフィール

学会賞：河村公隆会員（北海道大学低温科学研究所）  
受賞題目：「有機エアロゾルの組成，大気輸送，変質  
に関する地球化学的研究」



河村公隆氏は、1981年に東京都立大学大学院にて「現世堆積物中の脂肪酸と関連化合物の地球化学的研究」で理学博士の学位を取得されました。日本学術振興会の特別研究員に採用された後、同年10月よりカリフォルニア大学

(UCLA)にて未開拓であった降水中の極性有機物の研究を開始されました。1985年よりウッズホール海洋研究所にて、海洋エアロゾル中の有機物の研究に従事された後、1987年に都立大学の助教授に採用され、都市、海洋、極域大気中およびアイスコア中の有機物の研究へと研究対象を広げられました。1996年に北海道大学低温科学研究所に教授として着任された後、地球化学の新たな研究室を組織されて現在に至っています。北海道大学では、大気エアロゾル、アイスコア、深海堆積物の研究を進展させるとともに、大気中の有機エアロゾルの組成解析を中軸に有機物の長距離大気輸送、光化学的変質および現在・過去の大気環境変動を明らかにする研究を実施されています。これらの研究成果は、130報を超える原著論文として発表され、その総被引用回数は2,300回を超えており、エアロゾルを中心とした有機物研究の分野で多大な貢献をされてきました。

河村氏の研究業績は以下のようにまとめることができます。

### 1．有機物分析法の開発と新化合物の発見

大気中の有機物に関する知見が限られていた1980年代前半に、都市降水およびエアロゾル中の極性有機物に着目しその先駆的研究を行いました。低分子モノカルボン酸 ( $C_1-C_{10}$ ) およびジカルボン酸 ( $C_2-C_{10}$ ) の測定法を開発し、気相中ではギ酸・酢酸など低分子モノカルボン酸が、エアロゾル粒子ではシュウ酸・コハク酸など低分子ジカルボン酸が、また、降水・雪試料ではモノカルボン酸とともにジカルボン酸が主要な有機成分であることを明らかにし、水溶性有機物の大気科学的な重要性を指摘しました。この一連の研究は、大

気微粒子の化学像に新たな知見を提供するとともに、大気化学(科学)・気候変動研究分野で現在最も注目されている課題の一つとなっている有機エアロゾルの組成・吸湿特性と凝結核・雲形成能・放射気候影響の研究に大きな影響を与えました。また、質量分析計による未知化合物の構造解析により海洋エアロゾル試料中にケトカルボン酸・ヒドロキシカルボン酸・ハロゲンを含むジカルボン酸を発見し、生物起源の不飽和脂肪酸の光化学的酸化のメカニズムを提案し、有機エアロゾルが光化学的変質を受ける結果、より水溶性になるという有機エアロゾルの化学像の確立につながりました。

### 2．水溶性有機エアロゾルの光化学的生成と変質

都市における有機エアロゾル組成の季節変化の研究から、低分子ジカルボン酸など水溶性有機物は夏に最大濃度を示すことを明らかにしました。高頻度の経時観測によって、水溶性成分の濃度は早朝から昼にかけて大きく増大し、夕方にかけて減少することを見いだしました。このようなジカルボン酸など水溶性有機物の光化学的生成と分解は、北極ではよりダイナミックに起こっていることをポーラーサンライズ観測実験などで明らかにし、有機エアロゾルの二次的な生成が地球規模で広くおこっている実体を明らかにしました。また、赤道太平洋域で海洋エアロゾル炭素に占めるジカルボン酸の割合が増大することを発見し、有機エアロゾルの光化学的生成と水溶性特性の増大を明らかにしました。更に森林大気における観測を実施し、植生からの揮発性有機物の放出と極性有機物の二次的生成を確認し、生物起源の二次有機エアロゾルの生成の重要性を明らかにしました。

### 3．陸起源物質の長距離大気輸送

陸上を起源とする様々な有機物(植物または土壌起源のアルカン・脂肪酸など、化石燃料燃焼起源の炭化水素、光化学酸化生成物など)の分布を海洋および極域エアロゾル中で明らかにし、陸起源物質のアジアから西部北太平洋や北極への長距離大気輸送のメカニズムを議論しました。国際共同研究 ACE-Asia (Aerosol Characterization Experiment in Asian Pacific Region) では、父島・済州島での観測、船舶・航空機を使った観測を実施または観測に参加し、東アジアからの汚染・自然起源物質の大気輸送と変質を明らかにしました。また、北極や南極の氷床コア中に海洋生物、陸上植物、光化学反応起源の有機物を検索するという当時報告例のなかった研究を開始し、過去450年間に

わたる大気環境の変化を明らかにし、雪氷学・アイスコア研究における有機地球化学的展開という新しい分野を開拓しました。

#### 4. エアロゾル有機物の炭素同位体研究

分子レベル同位体比測定法をエアロゾル中の脂肪酸に適用することによって、西部北太平洋父島におけるC3およびC4植物からの寄与の季節変動を明らかにし、陸起源物質の濃度と起源域の違いを偏西風と貿易風という風系の季節的な違いによって説明しました。また、大気中の脂肪酸の放射性炭素を分子レベルで測定する方法を確立し、大気中の脂肪酸の<sup>14</sup>C年代を最大五千年であると見積もりました。この結果は、中国内陸の黄土高原などのリザーバーに長期にわたって保存された古い年代の有機物が風によって舞い上がり北太平洋まで大気輸送される可能性を指摘しました。更に、低分子ジカルボン酸の安定炭素同位体比を測定する手法を開発し、シュウ酸などの安定炭素同位体比を光化学反応の履歴トレーサーとして提案しました。

以上のように、河村公隆会員は陸上、海洋、極域大気中で有機エアロゾルの組成を解明するとともに、光化学的生成と変質、長距離大気輸送の重要性を明らかにしてきました。こうした研究は、大気中の有機物研究を国際的にもリードし、いくつかの国際共同研究へと発展しました。特に、ACE-Asia計画では、同会員は計画の立案から実施に至るまで国際委員会の一員としてまた国内委員会の責任者として活動しました。また、同会員はGoldschmidt会議の国際プログラム委員としても活動し、過去3回のGS会議においてコンピナーを務めるなど国際会議の運営にも貢献しています。また、IGBP/IGAC/PASC (Polar Atmospheric and Snow Chemistry), IAMAS/CACGP (Commission of Atmospheric Chemistry and Global Pollution)の委員としても活動しています。さらに、同会員は大気・水圏の地球化学関連の教科書を編集・執筆するなど地球化学分野の普及・教育活動にも貢献しています。これらの業績が栄えある地球化学会賞の受賞対象になりました。

横内陽子 (国立環境研究所化学環境研究領域)

#### 奨励賞：太田充恒会員

(産総研，地質調査総合センター)

受賞題目：「鉄・マンガン水酸化物と海水間の希土類元素の分配に関する研究」



太田充恒会員は、名古屋大学理学部地球科学科を1995年に卒業、同大学院に進学、博士課程を2000年3月に修了(理学博士)されました。その後、半年間の東大海洋研・研究生を経て、2000年10月に工業技術院地質調査所に入所、地質調査所の改組を経て、現在に至っております。

私が名古屋大学に転勤となったのが1993年4月で、それは、ちょうど太田氏らの学年が学部3年生となった時でもありました。この年度の3年生向け授業については、今も鮮明に思い出すことがあります。長い板書の合間には、時々、受講生の方を振り向き、その反応をスキャンするのですが、三十名程度の受講生の全てが刺すような鋭い視線を私に送っているのです。その中で赤いhair bandをした学生が太田氏でした。全受講生の真剣で刺すような視線に出会うことは、教師としての喜びです。学生諸君の並々ならぬ意欲をそこに感じるからです。しかし、毎年同じような講義をやっているにもかかわらず、そのようなcoherentな鋭い視線を毎年感じる訳ではありません。結局、赤いhair bandの太田氏は、学部・大学院の6年間を通じて私の研究室で、受賞対象となった研究テーマを追求することになりました。

太田氏は、卒業研究と修士課程の研究で、太平洋、南極海で採取された深海底マンガンノジュールについて、REE存在度パターン、Ce異常、Co(Ni+Cu)比から検討を加え、これまでの文献データも総合し、深海マンガンノジュールの新しい成因的解釈を提案しました。太平洋深海ノジュールは、ほぼ例外なく、Ce異常とCo(Ni+Cu)比の間に強い正の相関を示し、各分類タイプはこの相関プロットでそれぞれ特徴的な領域を占め、全体としても単一の関係を示す。一方、南極海深海マンガンノジュールは、どのタイプの太平洋深海マンガンノジュールよりも大きなCe異常と高いCo(Ni+Cu)比を持ち、酸化的な環境で生成した典型的マンガンノジュールであることを示します。Ce異常とCo(Ni+Cu)比は、海洋における“栄養塩型”元素に対する“scavenged型”元素の相対濃度比を表現する指標であり、両者の単一の正相関関係は、深海

マンガンノジュールには共通した起源物質が存在することを示唆します。新解釈の論拠となりました。

太田氏はさらに、修士課程後半と博士課程での研究で、海水における主要 REE 化学種が炭酸錯体であることに注目し、水酸化鉄(III)あるいは $\delta\text{-MnO}_2$ と NaCl 溶液間の REE 分配実験を行い、深海マンガンノジュールが REE に富む事実を、海水と鉄・マンガン酸化物水酸化物粒子との REE 分配反応の観点から考察しました。この中で、1) 分配係数の炭酸イオン濃度依存性を明かにした実験結果から、深海マンガンノジュールに濃縮する REE は、海水に溶存する REE 炭酸錯体と鉄・マンガン酸化物水酸化物粒子との平衡分配反応で説明出来ること、2) マンガンノジュールに認められる著しい正の Ce 異常は、溶存する Ce(III)が、溶存酸素ではなく、 $\delta\text{-MnO}_2$ 粒子により酸化され、粒子表面に沈着することが原因であること、3) 分配係数の炭酸イオン濃度依存性を定量的に解析することによって、REE(III)炭酸錯体生成定数を決定出来ること、4) この新しく求められた REE(III)炭酸錯体生成定数は、溶媒抽出法による従来の生成定数に比べ、分配実験系と深海マンガンノジュール/海水の天然系をより統一的に説明できること、など重要な事実を明確にしました。

さらに、太田氏は、鉄水酸化物沈殿と水溶液間の REE 分配係数や REE 炭酸錯体生成定数のシリーズ変化には、四組効果が認められることを確認し、4f 電子系の Refined spin-pairing energy theory を用いて、その定量的解析を行いました。その結果、REE(III)イオン 4f 電子の電子反発エネルギー (Racah パラメーター) は、



の順に系統的に減少することを示しました。また、 $\delta\text{-MnO}_2$ /NaCl 溶液系の REE 分配係数に見られる四組効果は、NaCl 溶液の pH 値が 4.8 から 6.8 に上昇するに伴い著しく増大することも見出しました。類似の結果は、FeOOH/NaCl 溶液系でも認められ、 $\delta\text{-MnO}_2$ や FeOOH に吸着した REE(III) に配位する  $\text{H}_2\text{O}$  と  $\text{OH}^-$  の相互割合の変化として説明可能であることを指摘しました。

今年(2005年)の春、フランスのグループが、 $\delta\text{-MnO}_2$ /NaCl 溶液系 REE 分配係数の四組効果と正の Ce 異常について追試実験を行い、太田氏の学位論文での結果と全く同一の結果を得たと報告していること

を知りました。5年後ではあれ、我々の実験結果が肯定されるのは嬉しいものです。太田氏と共著で書いた論文が、“国際誌”に何度も reject されたことを思い出します。REE(III)イオンが、4f 電子、スピン、核電荷などに規定される量子論的実在であることは自明です。私どもが四組効果に注目するのは、これが基底 LS 項 4f 電子が示す量子効果そのものであり、熱力学データに内在するからです。しかし、REE(III)イオンがサイズと価数だけで指定される“古典的荷電粒子”であるかのように思い込む地球化学者が、依然として“国際誌”の主流派であるのは残念なことです。太田氏が、我々の研究室の切り込み隊長として、この共同幻想の不条理に立ち向かった意義は何年か後にもっと理解されることでしょう。

内殻 3d 電子の XPS データの取得を契機に、田辺菅野ダイヤグラムの 3d 電子系配位子場理論も、その提唱から半世紀を経て、ようやく再考されることになりました。このように、ある小さな事実の発見により、長年にわたって受け入れられて来た考え方が否定され、より一般性を獲得する形に変貌する。四組効果も、パラダイム変換を誘起するに足るそのような小さな事実だと思えます。太田氏の控え目なタイトル「鉄・マンガン水酸化物と海水間の希土類元素の分配に関する研究」は、既成概念への攻撃性を巧みに偽装する意味も込められていると私は理解します。

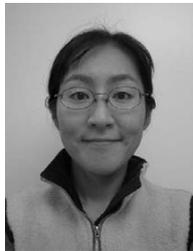
産総研・地質調査総合センターでの太田氏の最近の研究は、環境試料データを扱うことが主体ですが、東大・地殻化学の鍵先生らの指導・助言を得て、X線吸収微細構造(XAFS)から $\delta\text{-MnO}_2$ や FeOOH に吸着した REE(III)や水和 REE(III)の配位クラスター構造を決める研究にも取り組んでおられます。太田氏の今後の研究活動にも期待したいと思います。

川邊岩夫(名古屋大学)

## 奨励賞：川合（山本）美千代会員

(Institute of Ocean Sciences, Canada)

受賞題目：「酸素同位体や CFCs などをトレーサーとする寒冷域海水の流動に関する研究」



川合（旧姓は山本）美千代さんは、1973年8月に広島県三原市で生まれた。92年に高校卒業とともに北海道大学に入学した。そして、96年3月に水産学部水産化学科を卒業して、学士（水産学）となり、大学院地球環境科学研究科修士課程に入学した。98年3月には同課程を修了して、修士（地球環境科学）となり、そのまま博士課程に進学し、01年10月に博士（地球環境科学）となった。02年4月から地球観測フロンティア研究システムの研究者となり、米国アラスカ大学の国際北極圏研究センターに配属された。04年4月にはその博士研究者となった。そして、05年7月よりカナダ国立海洋研究所（IOS）の博士研究者となった。

彼女が学部3年になった94年、北大は改組し、水産化学科の分析化学講座は、地球環境科学研究科の化学物質循環講座となった。それで、名目上は、研究室が変わった。実質は、札幌キャンパスの同じ場所で、学部4年から博士を取るまでの研究活動を行った。

学部4年になって取り付いたのは、酸素同位体比であった。海面から蒸発しても、逆に直接雨が降っても、間接的に河川水が流れ込んで、わずかな温度効果はあるものの、気液変化の同位体分別作用による海水の同位体比の変動は、塩分に対してほぼ直線的に変わる。ところが、海水ができたり、融けたりした場合、同位体比の変動はほとんどない。つまり、塩分と水の酸素同位体比を連立させれば、陸水による塩分低下と融氷水による塩分低下とが区別できる。

この原理を世界で最も低緯度で海水ができるオホーツク海に応用した。北部北太平洋では低塩分のため深層水はできないが、オホーツク海で北太平洋中層水ができていたといわれていた。その中層水の量、できる機構などを定量的に解明することを目的に96年から研究を始めた。ところが、この海域の多くはロシアの経済水域であり、サンプリングがおもりに任せず、千島列島を境にしての出入りの研究に絞らざるをえなかった。その状況が一変したのは、97年（観測は98年）から始まった、ロシア船による日露米の大規模な共同研究プロジェクトであった。オホーツク海の奥まで入っ

てサンプリングや観測が3年にわたってできるようになった。また、表層にあった水を識別できる CFCs（クロロフルオロ炭素類）も高精度で測定し、トレーサーとした。

得られた結果は、すばらしいものだった。オホーツク海の大陸棚で冬冷やされ、海水ができると、はじき出された低温高塩分の水が一挙に大陸棚海底に沈み、斜面を下り、鉛直混合をしながらオホーツク海中深層水をつくっていた。この水は、大気中の二酸化炭素を高濃度に溶かした表面水を巻き込み、オホーツク海と太平洋をつなぐ千島海峡域において、潮汐等によって上下混合し、北太平洋中層水となって流れ出ていく。この状況を初めて観測結果をもとに定量的に記述した。

その間の99年1月には、ノルウェイの北のバレンツ海、グリーンランド海を観測する極地研の学生中心のチームに加わり、成果は論文にはなっていないが、貴重な体験をした。これが後の北極海研究へと誘うことになった。なお、この航海では夫君も見つけて帰ってきた。

北極海は、大西洋とかなり深いところでつながっているが、大西洋とやりとりする水の影響があまり現れていない。これは、北極海に注ぐ河川からの淡水によって塩分層が発達し、それが大西洋水から運び込まれる熱と海水との接触を妨げているためと考え、その証明に努めた。淡水の水平・鉛直輸送量を定量的に見積もるために酸素同位体比のほか、1920年代から測定されているアルカリ度を化学トレーサーとした。その結果、融氷水とそのほかの淡水とをうまく識別し、それらの分布の状況を北極海全域で示すことに成功した。また、アメリカ大陸起源の河川水とシベリア起源の河川水を海域ごとに分けたり、大気場の変動に伴う淡水の分布の変化を示したり、北極における気候変動を予測する際に重要となる情報を多数引き出した。

現在、国際誌に第1著者として書いた論文が4編、近隣諸国の1級研究者とともに大陸棚の重要性を書いたレビュー論文が1編ある。カナダに移ったとたん砕氷船に乗って、北極海に出るなど、極めて精力的であり（その結果、年会での受賞講演ができなくなってしまったが）、今後の成長が楽しみな若手研究者である。

角皆静男（北海道大学名誉教授）

## 奨励賞：西尾嘉郎会員

(海洋研究開発機構地球内部変動研究センター)  
受賞題目：「リチウム同位体分析手法の確立と地球内部物質循環に関わる同位体地球化学的研究」



地球内部での物質循環では、揮発性元素と揮発性の低い固体元素はお互いの振る舞いに影響を与えています。沈み込み地域でのスラブからマントルへの元素の移動では、塩素などの揮発性元素の存在により、固体元素の動きが変化することが知られています。しかし、両方のグループを同時に目盛りしている研究者はあまり多くありません。

今回、奨励賞を受賞された西尾嘉郎会員は、その数少ない研究者に成長する可能性を持っています。西尾さんは、1994年広島大学理学部地学科を卒業され、その後、東京大学大学院理学系研究科地質学専攻に進学され、1999年に博士の学位を取得されています。この間、当時広島大学の佐野有司先生、東京大学の佐々木晶先生の指導のもとに、表層からマントルへの揮発性元素の物質循環についての研究を進められました。通常の安定同位体比分析用の質量分析計より微量の窒素で同位体比測定を可能にするために、希ガス質量分析計を改造して、窒素同位体比測定用に使用するという新たな実験手法の開発に取り組みられました。新しく開発した手法を、インド洋ロドリゲス三重会合点付近の中央海嶺玄武岩に適用しました。西尾さんが分析された試料は、太平洋や大西洋の一般の中央海嶺玄武岩と化学、同位体組成が異なることが、Sr や Pb の同位体比などから指摘されていたものです。その結果、 $N_2/Ar$  比、 $C/N$  比、 $CO_2/He$  比などが他の地域の中央海嶺玄武岩と異なり、その差は脱ガスの度合いや大気成分の汚染によっては説明できず、揮発性元素でもマントルの不均質性が存在していることがわかりました。

私が西尾さんの学位論文審査のメンバーに加わったことが縁で、1999年4月～2002年3月の期間、東京大学地震研の私の研究室で、日本学術振興会特別研究員として研究を続けられました。西尾さんはそれまでの揮発性元素の物質循環が非揮発性元素の振る舞いとどうかかわっているかに興味を持っていました。1999年に、私の研究室にマルチコレクタータイプの ICP 質量分析計が設置されました。西尾さんの希望と新しい装置で可能な面白い研究を二人で相談して、リチウムの同位体比の研究を始めました。リチウムは、質量数6と7の二つの同位体があります。二つの同位体の間には相対的な質量差が大きいため、低温での岩石 流体反応でパーミルレベルの同位体比分別が起こりません。たとえば地球表層の岩石に比べて河川水は重い同位体 $^7Li$ が濃縮しています。したがって、地球表層からマントルへの物質循環には有力な同位体トレーサーとなることが期待できます。当時、リチウム同位体比は表面電離型質量分析計で測定されていました。ICP 質量分析計は高感度のため微量リチウムの同位体比の測定が可能であるという利点があります。西尾さんは、ICP 質量分析計のための岩石試料からのリチウムの精製法を開発しました。2002年に精製法の論文を *Analytica Chimica Acta* 誌に発表しましたが、そこへ辿り着くまで試行錯誤の連続でした。不純物を可能な限り取り除き、同時にリチウムを定量的に回収しないと正確な同位体比測定はできません。納得のゆくデータがでるまで2年くらいの時間を費やしました。西尾さんは、研究員のころは夜行性で、夕方に研究室にでてきて朝方帰宅する生活を送っていました。私が、朝、質量分析計の部屋でログノートを見ると、奮闘むなしく芳しくない結果がでたことが記録してある日が続きました。2年ほどして納得の行くデータが取れ始めるようになると、朝、日が高くなるまで、測定をしている姿をみるようになりました。その頃、取れたデータが今回の受賞に結びついています。

西尾さんは ICP 質量分析計が高感度リチウム同位体比分析が可能な特徴をいかしそれまで分析的に困難だったマントル捕獲岩のなかの単斜輝石にリチウム同位体比を測定して地球のものとしては最も軽いリチウムであることを発見しました。この成果は、2004年に *Earth and Planetary Science Letters* に発表しています。軽いリチウムの成因については、マントルへ沈み込む海洋プレートからの脱水反応が関与していると考えられますが、決定版といえるモデルはまだ無いと私は思います。西尾さんは沈み込んだ海洋プレートの残骸と成因関係があると考えられている火山島の試料の分析を行うなど、リチウムの地球内部での循環を説明できるモデルを構築すべく奮闘しているところです。2002年4月から海洋研究開発機構の横須賀の研究所で研究を続けてこられました。今年10月下旬から高知のコア研究所へ異動されるとのことです。新天地での、一層の活躍を祈ります。

中井俊一（東大地震研究所）

## 2005年度第1回鳥居基金 助成報告 (TE 44)

氏名：高野淑識（北海道大学大学院理学研究科地球惑  
星科学専攻）

助成：海外渡航（スペイン）

課題：22nd International Meeting on Organic Geo-  
chemistry (IMOG)

提出日：2005年9月30日

### 1. 会議の概要

今回参加した国際会議は、2年毎に European Association of Organic Geochemists (EAOG: 欧州有機地球化学連合) の主催により行われる International Meeting on Organic Geochemistry (国際有機地球化学会議: 略称 IMOG) である。第22回目の開催となる今回は、スペイン国セビリア市で2005年9月11日～9月16日の会期で開催された。実行委員長は、F. J. Gonzalez-Villa (Instituto de Recursos Naturales y Agrobiologia de Sevilla: IRNAS) が務めた。主に有機地球化学に関連する研究者が集い、口頭発表92件とポスター発表494件（合計586件）の研究発表が行われた。本学会賞である Geochemical Society's Alfred Treibs Award の受賞者は、J. S. Sinningh-Damsté 教授 (Royal Netherlands Institute for Sea Research: NIOZ) が選出され、会期中に受賞講演が行われた。

セッションでは、Biogeochemistry, Paleoclimate, Biomarkers, Microbial Processes, Forensic Archeology, Reservoir Geochemistry, Petroleum Geochemistry, Environmental Biogeochemistry, Gas & Coal Geochemistry, Biodegradation, Soil Biogeochemistry, Methods & New Trends などに関する最新の成果発表と活発な意見交換が行われた。

### 2. 研究成果の発表内容

私は、2件の成果発表を行なった。1つは、「島弧海底熱水系の活性有機物と立体異性比からみた地下生物圏」である。【要旨】海洋底の拡大軸や島弧に存在する海底熱水系は、地球上で特殊な極限環境で地球物理学、地球化学、生態学、微生物学など多くの分野から注目を集めている。これまで熱水系を直接掘削することが出来なかったため、熱水孔下の生命活動の存在や分布は、未知であった。そこで本研究は、島弧マグマの発散物に支えられた熱水系の浅層掘削をピンポ

ントで行い、熱水孔下に存在する地下生物圏の証拠を示した。活性有機物や立体異性を有する分子の立体異性比の解析から、熱水流路の至適な温度勾配領域や酸化還元境界付近に好熱性微生物などの地下生命活動が発達する傾向があることを明らかにした。極限環境の微生物ポテンシャルを記載可能にした本実績は、「統合国際深海掘削計画 (IODP)」などの深層掘削にも将来貢献できる。

2つめは、「凍土深部の地下生命活動に関連した生物指標化合物と親生元素同位体比」である。【要旨】微生物活動の成育限界温度は、 $-10 \sim 121 \text{ }^{\circ}\text{C}$  と言われている。本研究では、過去2万年における凍土環境でのバイオマーカーと生命活動の相関を調べた。全菌数密度は、蛍光色素により実体顕微鏡でカウントした。微生物活動は、全有機炭素量、全窒素量、全硫黄量、全アミノ酸量などと正の相関を示した。反対に微生物活動の減衰と共に初期続成作用によるアミノ酸の脱炭酸反応やラセミ化反応の進行が見られた。見掛け上の全菌数の減衰速度定数と全有機炭素量の分解速度定数は、ある年代を境界にして大きく変化した。また、安定炭素・窒素同位体の分別もそれと同一の年代を境界に収束することが分かった。従来の研究では、バイオマーカーと微生物活動が切り離されて議論されることが多かった。しかし本研究では、両者の共変関係を数値化し、地質学的時間スケールで定量的に議論することが可能であることを示した。このような検証を行なうことで、未知の環境で生命活動の直接的観察（微生物の単離や培養）ができなかったとしても化学分析による有機物情報から過去の生命活動を評価することが可能となる。

### 3. おわりに

今回、本会議に参加したことで世界の有機地球化学の動向を探ることができ、また多くの海外研究者らと議論を交わすことができた。ご支援を頂きました日本地球化学会と審査・庶務・会計に携わって頂いた関係者各位に深く感謝申し上げます。

参考までに IMOG と EAOG のホームページを記載した。

22nd International Meeting on Organic Geochemistry (IMOG) のホームページ

<http://imog05.org/>

European Association of Organic Geochemists (EAOG) のホームページ

<http://www.eaog.org/>

## 2005年度第1回鳥居基金 助成報告 (TE 46)

氏名：川口慎介（北海道大学大学院理学研究科地球惑  
星科学専攻）

助成：国内研究集会

課題：2005年度日本地球化学会若手シンポジウム

提出日：9月9日

地球化学若手会（地球化学に興味のある自称若手研究者の集まり）主催の「2005年度地球化学若手シンポジウム」が2005年9月3日(土)から三日間にわたって北海道有珠郡大滝村の北海道地区国立大学大滝セミナーハウスを主会場として開催されました。今年度は北海道での開催ということで参加者にかかる旅費の負担が大きくなってしまったため参加人数が37名と昨年に比べ減少してしまいました。参加者の内訳では修士課程および学部学生の積極的な参加が見受けられ（全体の60%）、参加研究室数は地元である北海道大学から7研究室のほか全国16研究室におよびました。講演内容は地球化学の各分野のみならず、地球化学と密接に関係する安定同位体理論、物質循環モデリングなど非常に多岐にわたりました。

3名の講師をお招きして行った「招待講演」では研究内容に加え、現在に至るまでの経歴およびその時々感じていたことなどもお話いただき、これから研究の道に進まんとする若手研究者へのメッセージとしていただきました。(財)環境科学技術研究所研究員の石川義朗氏による「サンゴ白化・ミニ地球・海藻」の三部で構成されたご講演では生命の宿る地球についての興味深いお話をいただき、北大院理の渡邊剛博士にはサンゴ骨格に保存された情報の優位性と分析技術の向上が明らかにした不均質性についてわかりやすく伝えていただきました。また、北大低温研の中塚武博士には「地球環境科学の要としての地球化学」と題し、境界領域として、包括的知見を必要とする地球化学の醍醐味をお話いただきました。

一般口頭発表では、若手会としての独自色をより鮮明に打ち出すため、発表者には15分の研究分野に関するレビューストリークを用意していただき、一度質問の時間を設けた後、さらに15分の研究発表をしていただくというスタイルをとりました。1件につき45分と長い時間を用意したおかげで、より深い理解を得ることができたという感想がよせられています。2日目の早

朝には有珠山2000年噴火火口でのフィールド散策もを行い、「生きている地球」のパワーを改めて実感しました。

若手の集まりに欠かすことができない懇親会ですが、1日目は東工大・吉田研の有志が企画してくれたクイズ大会などを行い、互いの顔と名前を一致させる良い機会となったようです。2日目は15畳ほどの部屋に参加者全員が集まり、研究観・研究者観などの激論を繰り広げました。

最終日には2006年度シンポジウムについてのミーティングを行い、来年度の幹事に大塚高弘さん（大阪大）が立候補し、満場一致の承認を得ました。また最終日に行ったアンケートではほとんどの参加者から大変満足したという感想をいただきました。アンケートの詳細やシンポジウムの様子の写真、プログラムなどを地球化学若手会のウェブサイトに掲載しておりますのでご覧ください。

<http://wakatekai.hp.infoseek.co.jp/>

最後になりましたが学生である私がシンポジウムの幹事をする中で本分である研究の時間を削ることについて理解を示していただいた指導教官の角皆潤先生にこの場をかりてお礼申し上げます。

本シンポジウム開催のための助成を決定していただきました日本地球化学会に深く感謝いたします。ありがとうございました。

### 2005年度日本地球化学会総会報告

日時：平成17年9月27日 14:00～15:15

場所：琉球大学法学部215室

1. 開会宣言
2. 議長選出
3. 会長挨拶 田中 剛会長
4. 大会委員長挨拶 渡久山章委員長
5. 議事
  - 1) 会則変更
  - 2) 2004年度事業報告および決算報告、監査報告
  - 3) 2005年度事業中間報告および会計中間報告
  - 4) 2006年度事業計画および予算案
  - 5) 2006～2007役員選挙結果
  - 6) 各種報告
    - (6 1) Goldschmidt 2005モスコウ会議の報告と2006メルボルン会議の紹介
    - (6 2) その他

## 6. 会場からの意見・提案など

## 7. 2004年度日本地球化学会賞ならびに日本地球化学会奨励賞授賞式

### 1) 日本地球化学会奨励賞

太田充恒会員「鉄・マンガン水酸化物と海水間の希土類元素の分配に関する研究」

西尾嘉朗会員「リチウム同位体分析手法の確立と地球内部物質循環に関する同位体地球化学」

川合美千代会員「酸素同位体やCFCsなどをトレーサーとする寒冷海水の流動に関する研究」

### 2) 日本地球化学会賞

河村公隆会員「有機エアロゾルの組成と変質に関する地球化学的研究」

## 8. 閉会宣言

会則の変更(太字部分が改正箇所)

第4条 .....

(1) 正会員：地球化学またはこれに関連する諸科学について学識または経験あるもの。海外に在住する正会員(海外会員)は、日本地球化学会役員選挙の選挙権を有しないが、希望する場合はこれを認める

第6条 .....

正会員 年額10,000円。ただし(1)(正会員のうち学生またはこれに準ずる者は、年額5,000円とする。ただし、年度ごとに在学を証明する書類所属の学部長またはこれと同等と認められる者の在学証明書等を添付すること)。また、修士課程(あるいは博士課程前期)の学生会員を2カ年一括で7,000円とする。(2)会員歴20年以上であり、60歳以上かつ常勤の職を退職し、申告のあった正会員(シニア会員)は、年額5,000円とする。

第10条 会長、副会長、評議員および監事は、別に定める選出細則により、正会員(海外会員は除く)の中から選ぶ。

## 2004年度事業報告

2005年9月27日

### 1. 会員状況(2004.1~2004.12)

	正会員(一般正会員)	(学生)	(シニア)	賛助会員	名誉会員	計	(在外)
2004.1	988	(856)	(123)	(9)	13	13	1014 (39)
入会		(13)	(13)				26 (2)
退会		(42)	(4)	(1)	1		48 (2)
除名		(17)	(8)				25 (9)
変更		(+6)	(-9)	(+3)			0 (+3)
2004.12	942	(816)	(115)	(11)	12	13	967 (33)

旧事務局(学会事務センター)では、入会申込書を受け取った時点で正会員として認めていたが、新事務局(国際文献印刷)では入金確認時に正会員として登録している。この受付の仕方の違いにより、引き継ぎ時に正会員数に誤差が生じたため修正を行った。

### 2. 年会、委員会等開催

2004年度地球惑星科学関連学会合同大会(5/9~13;千葉,幕張メッセ国際会議場),年会(9/20~22;静岡大学),総会(9/21;静岡大学),日本地球化学公開講演会「駿河湾から地球が見える」(9/19;静岡グランシップ),ゴールドシュミット2004(6/5~11;デンマーク,コペンハーゲン),評議員会3回(2/14,5/29,9/19),幹事会3回(2/7,5/22,9/11),GJ編集委員会6回,地球化学編集委員会2回,学会賞等受賞者選考委員会1回,鳥居基金委員会2回,将来計画委員会2回,地球化学講座編集委員会3回

### 3. 会誌発行

Geochemical Journal: Vol. 38(1~6)

地球化学: Vol 38(1~4)

4. ニュース発行: No.176(3/1),177(5/15),178(8/15),179(12/15)(「地球化学」と合本)

5. GJバックナンバーのテキスト化(14巻から33巻,HPへのサーチ機能の追加)

6. 日本地球化学会賞等の授与(学会賞2件,奨励賞3件)

7. GJ賞授与(コペンハーゲン)

8. 鳥居基金助成:第1回(海外渡航1件(辞退),国内研究集会2件),第2回(海外渡航3件)

9. 学会などの共催4件,協賛5件,後援1件:

・「第14回大気化学シンポジウム」(1/7~9;愛知県豊川市民プラザ)協賛

・「日本地熱学会平成16年学術講演会」(2/1~3;つ

くば産総研) 協賛

- ・「第42回原子力総合シンポジウム」(5/27~28; 千代田区立内幸町ホール) 共催
- ・「第10回大気化学討論会」(6/23~25; 東京大学) 協賛
- ・「第41回理工学における同位元素・放射線研究発表会」(7/7~9; 東京・日本青年館) 共催
- ・「Chemical Abstracts 利用法講習会」(7/8, 9/1; 大阪・東京) 共催
- ・「第48回粘土科学討論会」(9/16~18; 新潟大学) 共催
- ・「International Science Symposium on Sample Returns from Solar System Minor Bodies」(10/20~23; 相模原) 後援
- ・「第7回メスパウアー分光研究会講演会」(11/1; 上智大学) 協賛
- ・「Rare Earth '04 in Nara, Japan」(11/7~12; 奈良県新公会堂) 協賛

## 2005年度事業中間報告

2005年9月27日

### 1. 会員状況(2004年6月30日現在)

	正会員 (一般正会員)	(学生)	(シニア)	賛助会員	名誉会員	計	(在外)
2005.1	942	(816)	(115)	(11)	12	13	967 (33)
入会		(11)	(18)				29 (2)
退会		(16)	(8)	(1)			25 (2)
除名							0
変更		(7)	(20)	(+13)			(2)
2004.12	946	(818)	(105)	(23)	12	13	971 (35)

### 2. 年会, 委員会などの開催

2005年度地球惑星科学関連学会合同大会(5/22~26; 千葉, 幕張メッセ国際会議場), ゴールドシュミット2005(5/20~25; 米国アイダホ州), 年会(9/26~28; 琉球大学), 総会(9/27; 琉球大学), 日本地球化学会公開講座「サンゴ礁の海が語る地球環境」(10/1; 那覇市, 自治会館), 評議員会3回(2/12, 6/11, 9/25), 幹事会3回(2/5, 6/4, 9/17), GJ編集委員会4回, 地球化学編集委員会1回, 学会賞等受賞者選考委員会1回, 鳥居基金委員会2回, 名誉会員推薦委員会1回, 将来計画委員会2回, 地球化学講座編集委員会2回, 役員選挙管理委員会1回

### 3. 会誌発行

Geochemical Journal : Vol. 39 (1~4)

地球化学 : Vol. 39 (1~3, 特別号)

- 4. ニュース発行: No.180(3/15), 181(5/15), 182(8/15)(「地球化学」と合本)
- 5. 地球化学講座「第4巻 有機地球化学」「第6巻 大気・水圏の地球化学」発行
- 6. 日本地球化学会賞等の授与(学会賞1件, 奨励賞3件)
- 7. GJ賞の授与(アイダホ州モスコー)
- 8. 鳥居基金助成: 第1回(海外渡航2件(うち1件辞退), 国内研究集会1件), 第2回(海外渡航2件)
- 9. 2006~2007年度学会役員選挙の実施
- 10. GJ, 地球化学, ニュースならびに会員名簿バックナンバー(2003まで)の製本・保管
- 11. 学会などの共催3件, 協賛2件, 後援3件
  - ・「第53回質量分析総合討論会」(5/25~27; さいたま市大宮ソニックシティ) 共催
  - ・「第43回原子力総合シンポジウム」(5/26~27; 東京・日本学術会議講堂) 共催
  - ・「第11回地下水・土壌汚染とその防止対策に関する研究集会」(6/16~18; 千葉・市川市文化会館) 後援
  - ・「第42回アイソトープ・放射線研究発表会」(7/6~8; 東京・日本青年館) 共催
  - ・「第13回国際粘土学会」(8/21~27; 東京・早稲田大学) 協賛
  - ・「トレーサーを用いた水循環研究の現状と将来」(9/9; 東京・日本学術会議会議室) 後援
  - ・「日韓合同陸水シンポジウム」(9/16~18; 大阪国際交流センター) 後援
  - ・「日本地熱学会平成17年学術講演会(11/18~20; 東北大学) 協賛

## 2006年度事業計画

2005年9月27日

- 1. 年会(日本大学, H 18/9/13~20日の間の3日間)
- 2. 総会(日本大学, H 18/9/13~20日の間)
- 3. 地球惑星科学関連学会2006年合同大会(5/14~18; 幕張メッセ)
- 4. ゴールドシュミット2006(8/27~9/1; Melbourne, Australia)
- 5. 評議員会3回
- 6. 幹事会3回
- 7. 会誌発行

2004年度日本地球化学会決算報告（2004年1月1日～12月31日）

収入の部

科目	収入額（円）		予算額（円）	
1. 会費収入	8,891,250		9,255,000	
(内訳) 一般正会員		7,645,000		7,952,000
学生正会員		570,000		579,000
シニア正会員		45,000		45,000
賛助会員		380,000		375,000
海外会員		251,250		304,000
2. 刊行物売上	4,363,800		4,480,000	
3. 広告料	940,000		940,000	
(内訳) 地球化学 会員名簿		940,000 0		
4. 出版助成	5,900,000		4,900,000	
5. データベース助成	2,500,000		0	
6. 公開発表助成	1,040,000		0	
7. 雑収入	1,411,110		50,000	
8. 前年度名簿積立金	0		0	
9. 前年度基本財産引当金	3,400,000		3,400,000	
10. 前年度繰越金	18,843,466		12,818,000	
11. ゴールドシュミット倉敷	3,712,849			
収入計	51,002,475		35,843,000	

支出の部

科目	支出額 (円)		予算額 (円)	
1. 事業費	22,692,448		16,010,000	
1.1 出版費	18,201,171		12,750,000	
1.1.1 印刷費	12,438,901		9,850,000	
1.1.2 編集費	2,273,000		2,250,000	
1.1.3 発送費	989,270		650,000	
1.1.4 データベース編集	2,500,000		0	
1.2 行事費	308,000		450,000	
1.3 公開発表助成	1,040,000		0	
1.4 学会賞経費	55,434		40,000	
1.5 委員会活動費	138,330		300,000	
1.6 名簿積立金	500,000		500,000	
1.7 名簿作成費	0		0	
1.8 会員業務委託費	2,363,487		1,850,000	
1.9 会員業務郵税	86,026		120,000	
2. 管理費	1,737,852		1,750,000	
2.1 庶務費	150,000		150,000	
2.2 会議費	72,099		100,000	
2.3 通信費	141,598		150,000	
2.4 旅費	1,054,000		1,000,000	
2.5 選挙費	0		0	
2.6 会計費	100,000		100,000	
2.7 雑費	78,930		50,000	
2.8 雑誌保管費	141,225		200,000	
3. 予備費	127,470		400,000	
4. 基本財産引当金	3,400,000		3,400,000	
5. ゴールドシュミット基金	3,712,849			
6. 次年度繰越金	17,121,544		14,283,000	
7. 損失金	2,210,312			
支出計	51,002,475		35,843,000	

11. 出版費明細

事項	英文誌	和文誌	ニュース	その他	支出計
1.1.1 印刷	9,445,089	2,993,812		0	12,438,901
1.1.2 編集	1,750,000	350,000	150,000	23,000	2,273,000
1.1.3 発送	989,270			0	989,270
出版費計	12,184,359	3,343,812	150,000	23,000	15,701,171

英文誌：Geochemical Journal Vol 38, No. 1 ~ 6。

和文誌：地球化学 Vol 38, 1 ~ 4 (ニュース No. 176 ~ 179, 連絡会ニュース No. 30, 31を合本発行)。

ニュース印刷費は和文誌に含まれる。

和文誌4号は、全て英文誌と同時に発送し、発送費は英文誌に含まれる。

貸借対照表 (2004年12月31日現在)

資産の部		負債・正味財産の部	
現金	374	前受会費	1,040,000
普通預金(会計)	10,510,713	名簿積立金	500,000
定額貯金	7,600,000	基本財産充当引当金	3,400,000
普通貯金	3,009,207	正味財産(繰越金)	17,121,544
国際文献印刷	983,250	未払金	42,000
計	22,103,544	計	22,103,544

2004年度鳥居基金決算報告 (2004年1月1日~12月31日)

収入の部		支出の部	
科目	金額(円)	科目	金額(円)
1. 前年度繰越金	4,576,825	1. 助成	500,000
2. 普通貯金利息	118	内訳 助成100,000円5件	
3. その他		2. その他	
収入計	4,576,943	3. 次年度繰越金	4,076,943
		支出計	4,576,943

資産状況	
科目	金額(円)
普通貯金	2,076,943
定額貯金	2,000,000
資産計	4,076,943

2004年度ゴールドシュミット国際会議基金決算報告 (2004年1月1日~12月31日)

収入の部		支出の部	
科目	金額(円)	科目	金額(円)
1. 当初資金	3,712,849	1. Goldschmidt 2004共催金	330,498
2. その他	0	2. その他	0
収入計	3,712,849	3. 次年度繰越金	3,382,351
		支出計	3,712,849

2005年度日本地球化学会中間決算（2005年1月1日～8月31日）

収入の部

科目	収入額（円）		予算額（円）	
1. 会費収入	7,415,000		9,049,000	
(内訳) 一般正会員		6,730,000		7,942,000
学生正会員		345,000		565,250
シニア正会員		80,000		50,000
賛助会員		260,000		260,000
			海外会員	231,750
2. 刊行物売上	0		4,363,800	
3. 広告料	0		1,150,000	
(内訳) 地球化学 会員名簿	0 0			
4. 出版助成	5,400,000		5,900,000	
5. 成果公開(B)	1,300,000			
6. 成果公開(C)	0			
7. 雑収入	88,023		50,000	
8. 前年度名簿積立金	500,000		500,000	
9. 前年度基本財産引当金	3,400,000		3,400,000	
10. 前年度繰越金	17,121,554		14,283,000	
収入計	35,224,577		38,695,800	

支出の部

科目	支出額 (円)		予算額 (円)	
1. 事業費	7,800,913		17,460,000	
1.1 出版費	3,887,596		13,050,000	
1.1.1 印刷費	1,115,625		9,850,000	
1.1.2 編集費	2,270,000		2,250,000	
1.1.3 発送費	501,971		650,000	
1.1.4 電子化経費	0		300,000	
1.2 行事費	1,635,000		1,600,000	
1.2.1 年会など	335,000		300,000	
1.2.2 成果公開(B)	1,300,000		1,300,000	
1.2.3 成果公開(C)	0		0	
1.3 学会賞経費	84,378		40,000	
1.4 委員会活動費	358,817		300,000	
1.5 名簿積立金	0		0	
1.6 名簿作成費	705,075		900,000	
1.7 会員業務委託費	1,098,332		1,450,000	
1.8 会員業務郵税	31,715		120,000	
2. 管理費	1,469,456		2,000,000	
2.1 庶務費	150,000		150,000	
2.2 会議費	89,509		100,000	
2.3 通信費	89,509		150,000	
2.4 旅費	544,000		1,000,000	
2.5 選挙費	119,198		250,000	
2.6 会計費	100,000		100,000	
2.7 雑費	377,240		50,000	
2.8 雑誌保管費	0		200,000	
3. 予備費	0		400,000	
4. 基本財産引当金	3,400,000		3,400,000	
5. 次年度繰越金	0		14,283,000	
支出計	12,670,369		38,695,800	

11. 出版費明細

	英文誌	和文誌	ニュース	その他	支出計
1.1.1 印刷	0	1,326,937		0	1,326,937
1.1.2 編集	1,750,000	350,000	150,000	0	2,250,000
1.1.3 発送	361,115			0	361,115
出版費計	2,111,115	1,676,937	150,000	0	3,938,052

ニュース印刷費は和文誌に含まれる。

和文誌4号は、全て英文誌と同時発送し、発送費は英文誌に含まれる。

2006年度日本地球化学会予算 (2006年1月1日～12月31日)

収入の部

科目	2006年予算額 (円)		2005年予算額 (円)	
1. 会費収入	9,016,000		9,049,000	
1.1 一般正会員		7,771,000		7,942,000
1.2 学生正会員		498,750		565,250
1.3 シニア正会員		115,000		50,000
1.4 賛助会員		380,000		260,000
1.5 海外会員		251,250		231,750
2. 刊行物売上	3,981,900		4,363,800	
3. 広告料	940,000		1,550,000	
3.1 地球化学		940,000		1,145,000
3.2 会員名簿		0		405,000
4. 出版助成	5,400,000		5,900,000	
5. 雑収入	50,000		50,000	
6. 前年度名簿積立金	0		500,000	
7. 前年度基本財産充当金	3,400,000		3,400,000	
8. 前年度繰越金	14,343,091		11,720,291	
収入合計	37,130,991		36,533,091	

支出の部

科目	2006年予算額 (円)		2005年予算額 (円)	
1. 事業費小計	17,860,000		16,310,000	
1.1 出版費	15,000,000		13,050,000	
1.1.1 印刷費	10,850,000		9,850,000	
(GJ)	8,000,000		7,000,000	
(地化)	2,850,000		2,850,000	
1.1.2 編集費	2,250,000		2,250,000	
(GJ)	1,750,000		1,750,000	
(地化)	350,000		350,000	
(ニュース/HP)	150,000		150,000	
1.1.3 発送費	1,000,000		650,000	
1.1.4 電子化経費(GJ)	900,000		300,000	
1.2 行事費	450,000		450,000	
1.3 学会賞経費	40,000		40,000	
1.4 委員会活動費	300,000		300,000	
1.5 名簿積立金	500,000		0	
1.6 名簿作成費	0		900,000	
1.7 会員業務委託費	1,450,000		1,450,000	
1.8 会員業務郵税	120,000		120,000	
2. 管理費小計	2,950,000		2,000,000	
2.1 庶務費	150,000		150,000	
2.2 会議費	100,000		100,000	
2.3 通信費	50,000		150,000	
2.4 旅費	1,000,000		1,000,000	
2.5 選挙費	0		250,000	
2.6 会計費	100,000		100,000	
2.7 雑費	50,000		50,000	
2.8 ホームページ費用	1,300,000			
2.9 雑誌保管費	200,000		200,000	
3. 予備費	400,000		400,000	
4. 基本財産引当金	3,400,000		3,400,000	
5. 次年度繰越	12,520,991		14,343,091	
支出計	37,130,991		36,453,091	
実収入*	19,387,900		20,912,800	
実支出**	20,710,000		18,710,000	
差引	-1,322,100		2,202,800	

\* 実収入：収入計から繰越金，基本財産引当金，名簿積立金を除いたもの。

\*\* 実支出：支出計から繰越金，基本財産引当金，名簿積立金を除いたもの。

Geochemical Journal : Vol. 40 ( 1 ~ 6 )

地球化学 : Vol 40 ( 1 ~ 4 )

- 8 . ニュース発行 : No .184 ~ 187
- 9 . ホームページのリニューアル ( 国際文献印刷へのサーバー移動 )
- 10 . GJ バックナンバーのテキスト化 ( 1 巻 ~ 13 巻 )
- 11 . 「地球化学講座」の出版
- 12 . 日本地球化学会賞等の授与
- 13 . 鳥居基金助成 2 回
- 14 . 学会などの共催等

#### 2006 ~ 2007 年年度学会役員選挙結果

会長 : 松田准一 , 副会長 : 蒲生敏敬 , 監査 : 松久幸敬 , 評議員 : ( 北海道 ) 角皆潤 , 河村公隆 , ( 東北 ) 柳沢文孝 , ( 関東 ) 平田岳史 , 赤木右 , 中井俊一 , 海老原充 , 岩森光 , 天川裕史 , 村松康行 , 小畑元 , ( 中部 ) 山本鋼志 , 南雅代 , 田上英一郎 , 張勁 , ( 近畿 ) 益田晴恵 , 植田千秋 , ( 中国四国 ) 千葉仁 , 日高洋 , ( 九州 ) 石橋純一郎 , ( 次点 ) 鈴木勝彦

### 日本地球化学会2005年度 第 2 回評議員会議事録

日時 : 2005 年 6 月 12 日 ( 土 ) 13 : 00 ~ 17 : 50

場所 : 東京大学・山上会館

出席者 : 田中剛会長 , 松田准一副会長 , 赤木右 , 鍵裕之 , 川幡穂高 , 中井俊一山本鋼志 ( 以上幹事 ) , 植田千秋 , 海老原充 , 河村公隆 , 北逸郎 , 清水洋 , 長尾敬介 , 奈良岡浩 , 村江達士 , 塚本尚義 , 横内陽子 , 和田秀樹 , 渡久山章 ( 以上評議員 )

- 1 . 2005 年度第 1 回評議員会議事録を承認した。
- 2 . 報告事項
- 2 1 庶務 ( 山本幹事 ) : 【科学研究費補助金】 ( 文部科学省 ) 平成 17 年度科学研究費補助金研究成果促進費研究成果公開促進費「研究成果公開発表 ( B ) 」 ( 地球化学公開講演会・サンゴ礁の海が語る地球環境 ) 交付内定・交付申請 ( 1,300 千円 ; 4 . 1 , 4 . 18 ) ; 平成 16 年度科学研究費補助金特別研究促進費「データベース」 ( 日本地球化学会英文誌 Geochemical Journal データベース ) 報告書提出 ( 4 5 ) ( 日本学術振興会 ) 平成 17 年度科学研究費補助金研究成果公開促進費「定期刊行物」 ( GJ ) 交付内定・交付申請 ( 5,400 千円 ; 4 . 15 , 5 . 10 ) 。 【研究助成等】 2005 年

第 1 回鳥居基金助成 , 高野淑識 ( TE 44 ) ・ 田副博文 ( TE 45 ; 辞退 ) ・ 川口慎介 ( TE 46 ) 各会員に交付手続 ( 3 . 17 ) ; 文部科学省若手研究者賞に三村耕一会員を推薦 ( 3 3 ) 。 【庶務その他】 科研費審査員候補者情報を学術振興会に登録 ( 2 23 ) , 学会事務センター破産に伴う和解交渉について報告があり , 日本地球化学会には 65,204 円の返金があることが報告された。 【幹事会】 2005 年 6 月 4 日 13 : 00 ~ 17 : 30 第 2 回評議員会の議事内容について整理した。 ( 出席 : 田中・松田・鍵・中井・川幡・蒲生・米田・山本の各幹事 )

2 2 会計 ( 鍵幹事 ) : 2004 年決算のうち , 収入・支出 , 鳥居基金 , ゴールドシュミット基金の中間報告を行った。 事務センター破産と国際文献印刷への事務局移転に伴い , 会計決算が遅れており , 第 3 回評議員会で審議・承認を行う。

2 3 会員 ( 中井幹事 ) : 地球化学 Vol 39 特別号 ( 会員名簿号 ) の発行準備状況が説明された。 5 月 19 日に住所調査の発送 , 6 月 15 日に調査を閉め , 7 月末に名簿号の発送の予定である。 個人情報保護法の施行のため , データ保護シートを本年より採用した。 2 年以上の滞納会員のリストが回され , 身近な方への督促の依頼があった。

#### 2 4 編集

2 4 1 GJ ( 赤木幹事 ) : Geochemical Journal の出版状況 ( Vol 39 No . 1 と No . 2 を 3 月上旬に地球化学と同時発送 , No . 3 を地球化学と同時に 6 月上旬発送された。 No . 5 は火山ガス関係の特集号となる予定 ) が説明された。 なお , 平成 16 年度には , 95 件の投稿があり , そのうち 26 件受理 , 39 件却下 , 30 件が審査中であること , 今年度今日までに 50 件弱の投稿があった旨報告された。

2 4 2 地球化学 ( 代理山本幹事 ) : 地球化学の出版状況 ( Vol 39 No . 1 を 3 月 30 日に発行 , No . 2 を 6 月上旬に発行した。 No . 3 「沿岸海底湧水の地球科学」特集号は 8 月発行予定 ) 2005 年度は , これまでに 5 編の投稿があった。

2 4 3 ニュース・HP ( 代理山本幹事 ) : ニュースの出版状況 ( No . 180 は地球化学 Vol 39 No . 1 , No . 181 ( 年会のお知らせ その 2 , 選挙公示 ) は No . 2 に綴じ込みで発送済み , No . 182 ( 年会プログラム ) は 6 月末原稿締切 , 8 月発行の予定 ) が説明された。

ニュース電子メール版は , 4 月より会員情報に基

づいた新しいリストにより配信を開始した。また、旧リストによる配信は4月末で停止した。

2003年会の講演要旨(PDF形式)をJ-STAGEで公開した(5/15)。2004年会の講演要旨については、サーバ上での編集作業を行っている。ホームページの英文化について、古川委員に「鳥居基金応募要項」の英訳をお願いした。

2005年会も昨年と同様にJ-STAGEを利用して講演申込・要旨受付を行えるよう申請し、準備中である(6/15;講演受付開始)。参加申込は琉球大学生協が請け負うとのことで、学会HPでは受付を行わない。

- 2.5 行事(川幡幹事):【学会について】2005年年会の日程について説明された。2006年は日本大学文学部(永井準備委員長)で行い、東京大学海洋研究所が事務局として全面的にバックアップする予定である。2007年は岡山大学理学部(千葉仁・奈良岡浩評議員が中心)にて開催予定。【日本地球惑星科学連合】日本地球惑星科学連合が5月25日に正式に発足したことが報告された。組織は、評議会(学協会長など)(年に2回開催)の下に運営会議(会議議長+副議長+委員会の委員長と副委員長から構成される)(常設)、その下に委員会(委員)がある。委員会は、総務(清水洋会員)、財務(川幡穂高会員)、企画(海老原充会員)、広報・アウトリーチ、大会運営(石橋純一郎会員)、教育問題検討(高江洲瑩・瀧上豊両会員)、国際等がある。それぞれの委員会の任務は未定で、夏頃までに「何が仕事で、どこまで担うか」を検討することになる。

## 2.6 各種委員会

【鳥居基金選考委員会】2005年第1回鳥居基金助成、高野淑識(TE 45)・田副博文(TE 45)・川口慎介(TE 46)各会員に交付決定した。しかし、田副会員は他機関からの海外渡航費用援助の採用が決定したため、辞退の申し出を受けた。

【地球化学講座編集委員会】進捗状況について報告・審議を行った。現在までにNo.3,4,6が既に発行されている。No.1,5は9月末に発行予定。No.2は残り3名の原稿待ち、No.8は20名余の原稿が集まっている、No.7も今年中に目処を付ける、との報告があった。No.6ではいくつかの問題があり1)一人の著者の名前が落とされている、2)8章分の参考文献が抜けている、3)図の引用が抜けている、といった問題が発生していることが

説明された。8割以上が培風館側のミスと編集側は認識している。編集委員会ではその対策として回収廃棄も含めて議論を行ったが、経費が伴う可能性もあり、本評議会で更なる審議をお願いしたい。

## 2.7 研連報告

【第19期第5・6回地球化学・宇宙科学研連報告】(清水評議員)19期としては、「アジア地域における地球化学・宇宙化学の連携」および「地球化学における環境学」に関するアンケートを集計中であり、地球化学誌に報告の予定。20期は全く新しい組織となり10月にスタートの予定、連携会員も10月末に発足予定。今後は、学協会を統合する方向性を学術会議が打ち出してくる可能性がある。

【第19期第5回海洋科学研連報告】配付資料参照  
【第19期第4回大気・水圏科学研究連絡委員会報告】配付資料参照

## 2.8 その他

### 2.8.1 2005年年会について

渡久山準備委員長より、配付資料に従って、公開講演会ならびに年会について説明があった。スケジュールは例年に倣っている。課題講演は「海底熱水系と熱水ブルームの地球化学」「縁辺海の大気・河川・海洋間の物質循環」「炭酸塩の地球化学」「地殻 マントル 核の物質循環と固体地球の化学進化」と4本立てとなったことが説明された。

### 2.8.2 惑星科学連合における地学教育委員会報告

田中会長から瀧上委員からの資料に基づいて説明がなされた。センター入試への提言を行うこと、また、新課程の教育内容に対して提言を行うことを検討していること、合同大会で教育関連のセッションを開いたこと、などが報告された。

### 2.8.3 Goldschmidt 2005報告

プレナリーセッションにおいて、松田副会長がGJ賞の授与を行った。また、日本地球化学会のブースを設置し、地球化学会パンフレット(約210部)とGeochemical Journalのバックナンバーの配布(105部持参し、79部を配布)を行った。来年のメルボルン大会も、これまで通り3,000ドルの負担で共催学会として参加する。

## 3. 審議事項

### 3.1 会員異動(中井会員幹事)

平成17年1~4月の会員の以下の異動を承認した。

【入会】

(1月)

一般会員  
 9282338 関谷 実 セキヤ ミノル  
 九州大学大学院理学研究院地球惑星科学部  
 門  
 9282339 安本守宏 ヤスモト モリヒロ  
 北海道宗谷家畜保健衛生所  
 ( 2月 )  
 学生会員  
 9282340 川口慎介 カワグチ シンスケ  
 北海道大学大学院理学研究科  
 2282330 小松大祐 コマツ ダイスケ  
 北海道大学大学院理学研究科地球惑星科学  
 専攻  
 ( 3月 )  
 一般会員  
 9282341 森本真紀 モリモト マキ  
 名古屋大学環境学研究科  
 学生会員  
 9282342 大場康弘 オオバ ヤスヒロ  
 岡山大学  
 ( 4月 )  
 一般会員  
 9282343 長久保定雄 ナガクボ サダオ  
 日本海洋掘削株式会社  
 在外一般会員  
 9282346 古川容子 フルカワ ヨウコ  
 Naval Research Laboratory  
 学生会員  
 9282347 松中哲也 マツナカ テツヤ  
 東海大学連合大学院  
 【退会】  
 ( 1月 )  
 一般会員  
 4282239 合原 真 6280787 寺田信之  
 7280393 野田徹郎 6281452 岡村正紀  
 1281145 石川正道 5281200 猪股律子  
 在外一般会員  
 3281895 TIETZE, KLAUS  
 学生会員  
 7281875 圓入敦仁 3282247 西谷啓伸  
 シニア会員  
 1280704 山口 勝  
 ( 2月 )

一般会員  
 1281640 岩崎 廉 7280650 富野孝生  
 学生会員  
 3282281 渡慶次亮子  
 ( 3月 )  
 一般会員  
 8281005 篠原亮太 282099 深尾典男  
 学生会員  
 3282203 伊藤正義 1282241 長谷川 潤  
 ( 4月 )  
 一般会員  
 4281876 島岡晶子 5281590 澤田 淳  
 7280616 武田洋一 7282261 松村美奈子  
 学生会員  
 9282267 遠藤真紀  
 海外学生会員  
 282077 JOSE MIGUEL, LORENZO S.  
 【変更】  
 ( 1月 )  

会員番号	会員名	変更前	変更後
1280373	長沢 宏	一般会員	シニア会員
4280468	佐藤幸二	一般会員	シニア会員
5280513	柴田 賢	一般会員	シニア会員
5280148	石原舜三	一般会員	シニア会員
2282181	浅海竜司	学生会員	一般会員

( 2月 )  
 8280040 不破敬一郎 一般会員 シニア会員  
 3280636 坪田博行 一般会員 シニア会員  
 ( 3月 )  
 2282200 武邊勝道 学生会員 一般会員  
 8280727 吉田 稔 一般会員 シニア会員  
 ( 4月 )  
 1282188 力石嘉人 学生会員 一般会員  
 1282199 田中万也 学生会員 一般会員  
 4282110 大澤崇人 学生会員 一般会員  
 4282206 山岸洋明 学生会員 一般会員  
 6282268 中村篤博 学生会員 一般会員  
 7282108 福田 聡 学生会員 一般会員  
 9282182 藪崎志穂 学生会員 一般会員  
 5280524 清水照夫 一般会員 シニア会員  
 6280312 水谷義彦 一般会員 シニア会員

## 2005年4月30日現在の会員数

	正会員 (一般正会員)	(学生)	(シニア)	賛助会員	名誉会員	計	(在外)
2004.12.31	942	(816)	(115)	(11)	12	13	967 (33)
入会	(5)	(4)					9 1
退会	(-15)	(-7)	(-1)				-23 -2
変更	(0)	(-9)	(9)				(2)
2005.4.30	928	(806)	(103)	(19)	12	13	953 32

2005年第一回評議員会資料の会員データに誤りがあった。正会員の数が931になっていたが、これはシニア会員を含んでおらず正しくは942である。在外会員の数が35になっていたが正しくは33である。

### 3.2 学会賞等受賞者の選考について(清水評議員)

#### 3.2.1 2005年度学会賞, 奨励賞

清水学会賞等選考委員から、学会賞に河村公隆会員, 奨励賞に太田充恒会員, 川合美千代会員, 西尾嘉朗会員を候補者とする受賞者選考委員会報告を受け, 評議員会で承認した。

#### 3.2.2 功労賞対象者について

2005年度功労賞には団体が推薦されたが, 日本地球化学会受賞規定には「寄与のあった者に授与する」とあり, 「者」に団体が含まれるかの議論を行い, より明確にするために規定の改定が必要ではないかと提案があった。会員には賛助会員として会社(団体)が含まれている, 日本化学会の功労賞は団体にも与えられる, などの意見があり, 功労賞は, 団体も対象となり得るように規定を変更し, 次回の評議員会に提案することとなった。

### 3.3 将来計画委員会からの提言について

松田副会長から, 将来計画委員会において以下の提言がなされ, 審議を行った。

- 1) 英語版パンフレットに続き中国語版のパンフレットを作成すること, 英語・韓国語・中国語の入会要項をホームページにアップする。
- 2) HPの英文化を進めるとともに海外会員の定義を明確にし, 学会賞等の情報を提供する。
- 3) シニア会員の規定を変え, 「60歳以上, 会員歴10年以上, 常勤の職を退職した人」とする。
- 4) 修士課程の学生向けの「修士課程の学生会員2ヶ年バック」をつくる。
- 5) 年会の会員・非会員の参加費の差を大きくして会員になったメリットを強調する。
- 6) 「アジア地域における地球化学・宇宙化学の連携」の取り組みとして, 他地域の会長クラスを

招待して年会で講演してもらうことから始める。

以上の提言に対し, 色々な議論を行ったが, 第3回評議員会で再度議論することとした。

外部資金・賞への推薦内規については, 提案があったように, 会員歴の長い者, 賞の受賞者を優先する気持ちはわかるが, 若い人を萎縮させないため, “内規”として公にするより引き継ぎ事項として, 執行部内に留めておくのが良いとの意見があり, その意見に従う事にした。

### 3.4 学会ホームページサーバーの移転(代理山本幹事)

地球化学会ホームページは, 米田・小林の両会員の努力で開設され, 維持管理がなされてきたが, 今後の担当者がすべてその技量を持つことは期待出来ない。そこで, より多くの会員が担当できるようにするために, HP維持管理を民間企業に依頼することが幹事会より提案された。(株)国際文献に見積もりをとったところ, 初期経費として130万円ほどが見込まれるが, リニューアル費用の内容を再度確認・検討した上で承認することとした。

### 3.5 J-stage 利用申請について(赤木 GJ 幹事)

赤木 GJ 幹事より J-stage との契約書について報告があり, 承認をした。

### 3.6 その他

#### 3.6.1 地球化学講座第6巻について

報告がなされた地球化学講座第6巻問題への対応策を議論し, 1) 購買者へ早急な対応をすべきである。2) 培風館との今後の交渉の前提になる, 「どちらにどの程度非があるか」について, 専門家(弁護士など)の意見を聞くべきである。等の意見が出された。

### 4. 今後の評議員会・幹事会の予定

- ・2005年度第3回幹事会:  
9月17日(土) 13時から (株)国際文献印刷
- ・2005年度第3回評議員会:  
9月25日(日) 15時から 自治会館(沖縄)
- ・2005年日本地球化学会総会:  
9月27日(火) 14時から 琉球大学
- ・2005年度第4回評議員会(引き継ぎ):  
9月28日(水) 12:00~13:00

## 日本地球化学会2005年度 第3回評議員会議事録

日時：2005年9月25日(日) 15:00~20:45

場所：那覇市・自治会館

出席者：田中剛会長，松田准一副会長，赤木右，鍵裕之，蒲生敏敬，川幡穂高，山本鋼志，米田成一（以上幹事），植田千秋，海老原充，河村公隆，北逸郎，宗林由樹，千葉仁，長尾敬介，村江達士，和田秀樹，渡久山章（以上評議員）

0．評議員会に先立ち，本年6月22日に急逝された増沢敏行評議員を偲び黙禱を捧げた。

1．2005年度第2回評議員会議事録の承認した。

2．報告事項

2.1 庶務（山本幹事）：【庶務一般】J-Stage 利用申請（7/11），GJ・地球化学・ニュースならびに会員名簿バックナンバーの製本（8~9月）【研究助成等】平成2005年第2回鳥居基金海外渡航に2名の申請があり，下田玄会員（TE 47）と宮入陽介会員（TE 48）に助成金交付手続き。報告は各種委員会にて。【後援・共催等】（協賛）日本地熱学会平成17年学術講演会，11/18~20；東北大学，（共催）2006年地球惑星科学連合同大会，5/14~18；幕張メッセ（プログラム委員として鈴木勝彦会員，角皆潤会員，下田玄会員を報告），（後援）トレーサーを用いた水循環研究の現状と将来，9/9；日本学術会議。【幹事会】2005年9月17日 13:00~ 第3回評議員会の議事内容について整理した。

2.2 編集

2.2.1 GJ（赤木幹事）：GJ Vol 39 No .4 を8月上旬に地球化学と同時発送した。Vol 39 No .5 は，「Gas Geochemistry」の特別号とする。本年度の受理論文数は，65編。そのうち5編を受理，16編を却下，44編が審査中である。テラ出版から，別刷り料金の倍増と著者へのpdf販売（5,000円）の申し入れがあったことが報告された。また，J-Stage には3年間アブストラクトのみの公開とする方向で調整を行っている。J-stage の公開ページについては，赤木編集委員長とテラ出版に一任することとした。将来の学会の検討事項として(1)近日中にテラパプのGJのpdf販売に課金制を導入する。(2)着実に冊子体の売り上げが落ちているので，On-lineのみ

の販売を考える。(3)冊子体の要求にはレーザープリンタで対応するシステムを導入する。の3点が提案された。

2.2.2 地球化学（蒲生幹事）：第39巻第3号を，8月20日に発行した。内容は総説1篇，原著論文7篇および速報1篇である。第3号は，特集号「沿岸海底湧水の地球科学」として出版した。第38巻第4号は2005年12月発行予定で，原著論文2篇，受賞記念論文1篇，および審議経過報告2篇（日本学術会議地球化学・宇宙科学研連）の予定である。2005年1月1日より9月15日までに投稿された原稿の総数は12篇で，原著論文4篇，受賞記念論文4篇，総説1篇，審議経過報告2編，および博士論文抄録1篇である。投稿原稿数は過去3年の同時期（18篇，8篇，11篇）の投稿数とほぼ同レベルである。印刷ページ数は，39巻1~3号で172ページで，このまま行くと4号で210ページ前後と予想される。学術単行本「闇を生む光」（仮題）著者：小林公吉（元高校物理教諭）より提出された「地球化学」の図（1件）の転載申請を承認した（2005年6月27日付け）。また，2005年度年会で開催される課題講演3「炭酸塩の地球化学」をもとにした特集号申込（大出茂会員，吉村和久会員）があり，編集委員会が協議の結果，承認することとした。

2.2.3 ニュース・HP（米田幹事）：ニュース No .182 を地球化学 Vol 39 No .3 に綴じ込みで，8月に会員に発送済み，No .183は10月中旬原稿締切，12月上旬発行（合同大会講演申込締切2/10頃）の予定である。ニュース電子メール版は，前回の評議員会後，No .10~28の19回送信した。電算印刷機にデータの残っていたNo .160（2000 .3発行）以降のニュースをPDF化し，ホームページに公開した。今後は毎号，PDFも同時に作成されることになっている。2004年会の講演要旨はJ-STAGEサーバ上の編集をほぼ終え，近日中に公開予定である。2005年会の講演申込・要旨受付をJ-STAGEを利用して行った。J-STAGEでの申込件数は309件で，その後，受賞講演等が4件追加された。いくつかの小さなトラブルはあったが，おおむね順調に受付が行われた。

年会申し込みに関して，渡久山年会実行委員長より，備考欄を見落としていたため発表順を直前に変更したが，来年以降ご注意ください。また，申し込みを留学生等がスムーズに行えるように英語パー

ジョンを準備してもらいたい旨、報告があった。

2 2 4 行事(川幡幹事): 2006年日本地球化学会年会は平成18年9月13日~20日の間の3日間、日本大学文理学部(委員長:永井尚生会員)で開催される予定である。日程の最終的な確定は平成18年3月に行われる。2007年年会は岡山大学理学部で開催(委員長:千葉仁会員または奈良岡浩会員)の予定である。地球惑星科学関連学会2006年合同大会(第17回)は、平成18年5月14日~18日の5日間、幕張メッセで開催。企画委員会より、大会名称を「日本地球惑星科学連合2006年大会(Japan Geoscience Union Meeting 2006)」とする提案がなされ、承認される予定である。また、日本地球惑星科学連合に加盟する学会すべてが主催とする。総務委員は、清水会員から平田会員に交代することが報告された。

### 2 3 各種委員会

2 3 1 鳥居基金(赤木委員長):平成17年度第2回鳥居基金に下田玄会員、宮入陽介会員に助成金の交付決定をした旨報告された。

2 3 2 地球化学講座編集委員会(河村評議員):第6巻「大気・水圏の地球化学」に関する培風館との事後処理についてもたれた会議について報告がされた。要点は、1.無断で使用した図の著者である3名の方々に対して謝罪の手紙を送付する。同時に培風館・山本氏が3名にあって謝罪する。また、その際に訂正の冊子をもてもらう。2.訂正の冊子を今後出荷する第6巻の本に挟み込む。3.冊子には、執筆者一覧から抜けていた石橋純一郎(九州大学)の名前、図表キャプションから抜け落ちた文献、1~10章の参考文献リストを入れる。4.訂正の記事を地球化学会のホームページに掲載し、訂正冊子をダウンロードできるようにする。

しかし、実際には山本氏は3名の著者に会って謝罪することはしていない。手紙・電話での謝罪も部下に指示したのみで、実行されていない模様である。訂正の8ページ小雑誌は印刷されたので、今後の出荷物には挟み込む対応を準備した。また、ホームページからも正誤表をダウンロードできるように手配中である。

図の無断引用が日本人の3名のみでなく、他にも多くの図が使われているようである。執筆依頼文の中に著者が著作権取得すべきか、培風館が取得すべきかの記述があるか? 確認することとした。最終的には、学会長・副会長と培風館の社長とが、対応に

ついて相談するのが適切であるように思われると報告された。

### 2 4

2 4 1 学術会議:1)日本学術会議の新しい体制のあり方(海老原評議員)に関し、現状「地球化学・宇宙化学」が「化学委員会」に含まれているのを「地球惑星科学委員会」へ変更すること、国際地球化学協会(IAGC)が「国際学術団体および国際学術協力事業」から抜けていること、を日本学術会議第4部長へ申し入れ、第4部会長からも要望として出されたことが報告された。また、地球惑星科学委員会委員として、防災科学、固体地球物理、岩石・鉱物、地質、地理から選ばれる5名となったことも報告された。

2 4 2 第19期第6回地球化学・宇宙科学研連(海老原評議員):議事録案に従って、説明がなされた。「アジア地域における地球化学・宇宙化学の連携」と「地球化学における環境学」に関するアンケート結果が、「審議経過」という形で報告され、地球化学誌に掲載予定である。

2 4 3 第19期第7・8回海洋科学研連(蒲生評議員):議事録案に従って、説明がなされた。第20期学術会議では、従来、海洋科学研連が行ってきた業務は、分野別委員会と国際委員会の二つに分かれて運営される見通しであること、本研連が国内対応体であるSCORの新たな大型国際共同研究としてGEOTRACES(海洋の微量元素・同位体の生物地球化学研究)計画が正式に承認されたこと、日本においても本研連の下に「GEOTRACES小委員会」が発足したことなどが報告された。また、海洋研究所からJAMSTECに移管された研究船淡青丸の代船計画について継続審議中であることも併せて報告された。

2 4 4 第19期鉱物学研連(千葉評議員):地球惑星科学委員会の中に「物質科学」をベースとした委員会の設置を要望している。

### 2 5 その他

評議員選挙結果(鍵委員長)より、9月6日に行われた2006~2007年度役員選挙の開票結果が報告された。

会長:松田准一、副会長:蒲生敏敬、監査:松久幸敬、評議員:(北海道)角皆潤、河村公隆、(東北)柳沢文孝、(関東)平田岳史、赤木右、中井俊一、海老原充、岩森光、天川裕史、村松康行、小畑

元,(中部)山本鋼志,南雅代,田上英一郎,張勁,  
(近畿)益田晴恵,植田千秋,(中国四国)千葉仁,  
日高洋,(九州)石橋純一郎,(次点)鈴木勝彦

### 3. 審議事項

3 1 5 ~ 8月の会員の異動について(中井幹事): 以  
下の会員の移動ならびに除名を承認した。

会員異動(2005/5/1~2005/8/31)

#### 【入会退会の承認】

##### 【入会】

(5月)

学生会員

9282344 土肥俊忠 ドイ トシタダ  
学習院大学理学部

9282352 井上 綾 イノウエ アヤ  
上智大学大学院理工学研究科化学専攻

(6月)

一般会員

9282349 神谷奈津美 カミヤ ナツミ  
防衛大学校応用化学科

9282353 Richard John Wysoczanski  
Institute for Research on Earth Evolu-  
tion JAMSTEC IFREE, Japan Agency  
for Marine-Earth Science and Technol-  
ogy

9282354 杉本 健 スギモト タケシ  
京都大学理学研究科附属地球熱学研究施設

9282356 中山典子 ナカヤマ ノリコ  
東京大学海洋研究所海洋無機化学分野

学生会員

9282350 高橋貴文 タカハシ タカフミ  
東京工業大学原子炉工学研究所

9282351 佐野淳子 サノ ジュンコ  
上智大学大学院理工学研究科化学専攻

9282355 野末泰宏 ノズエ ヤスヒロ  
信州大学大学院工学系研究科地球環境シス  
テム科学専攻

9282357 山本和幸 ヤマモト カズユキ  
東北大学大学院理学研究科地学専攻

(7月)

学生

9282359 栗崎弘輔 クリサキ コウスケ  
九州大学大学院理学府凝縮系科学専攻

9282361 織田志保 オダ シホ  
東京大学大学院理学系研究科地球惑星科学

専攻

(8月)

一般会員

9282358 Bhattacharya, Partha  
Foundation for Inovation and Technology  
Transfer (India)

9282362 植村 立 ウエムラ リュウ  
国立極地研究所気水圏グループ

学生会員

9282363 山本征生 ヤマモト ユキオ  
東京大学大学院理学系研究科地殻化学実験  
施設

9282365 藤井彩子 フジイ アヤコ  
東京工業大学大学院総合理工学研究科環境  
理工学創造専攻

9282367 上原倫子 ウエハラ トモコ  
岡山大学大学院自然科学研究科地球科学専  
攻

9282369 上田哲彦 ウエダ テツヒコ  
神戸大学大学院自然科学研究科地球惑星科  
学専攻

9282370 小岩嘉隆 コイワ ヨシタカ  
首都大学東京大学院理学研究科化学専攻

9282371 唐牛 譲 カロウジ ユズル  
東京都立大学大学院理学研究科化学専攻

#### 【退会】

(7月)

正会員

6280282 増澤敏行 逝去

学生会員

3282203 伊藤正義

#### 【変更】

(5月)

会員番号	会員名	変更前	変更後
0282215	西澤 学	学生会員	一般会員
1282274	本郷やよい	学生会員	一般会員
2282330	小松大祐	学生会員	一般会員
4280112	堀部純男	一般会員	シニア会員
6280486	坂巻幸雄	一般会員	シニア会員
6282291	井上麻夕里	学生会員	一般会員

(6月)

会員番号	会員名	変更前	変更後
0282271	大久保綾子	学生会員	一般会員

0282301	山田奈海葉	学生会員	一般会員
1281974	佐藤昌泰	学生会員	一般会員
4282176	土岐知弘	学生会員	一般会員
6280691	綿抜邦彦	一般会員	シニア会員
6282279	森山文基	学生会員	一般会員
7282294	藤本隆之	学生会員	一般会員
(7月)			
2282136	海老澤紀子	学生会員	一般会員
(8月)			
3280272	馬淵久夫	一般会員	シニア会員

#### 2005年8月31日現在の会員数

	正会員 (一般正会員)	(学生)	(シニア)	賛助会員	名誉会員	計	(在外)	
2005.4.30	928	(806)	(103)	(19)	12	13	953	32
入会		(6)	(14)				20	1
退会		(-1)	(-1)				-2	
変更		(7)	(-11)	(4)				2
2005.8.31	946	(818)	(105)	(23)	12	13	971	35

#### 会費滞納会員の除名

4年滞納者；一般12名，学生5名

(一般) 遠藤政彦，三田村緒佐武，武井直子，中野俊夫，中島剛，佐藤雅規，JWA，YONG JOO，根山敦史，白石寛明，三浦典子，池見洋明

(学生) 小牧香織，嶋田光雄，阿蘇敏文，奴賀義隆，工藤新吾

3年滞納者；一般8名，学生2名

(一般) 佐藤修，田中伸幸，佐々木建一，浜原和広，高橋善幸，兎束直昭，忽那一也，岩元和正  
(学生) ACHY, GUILLAUME, 市川豊

32 学会業務委託契約について(山本幹事): クレジット引き落とし手数料，口座引き落とし手数料，年会費過入金等の返金手数料が加えられたこと，ならびにコピー代金の値上げが説明された。料金について問い合わせ中のため，国際文献印刷社からの返事を待って，電子メール審議とする。10月3日に田中会長より前評議員に電子メールによる問い合わせがあり，10月7日に承認された。

33 テラ出版との覚書について(赤木幹事): GJの売り上げが落ちているため販売目標を190部とすること，またドル換算レートを115円/ドルと変更することが報告され，承認された。

34 ホームページおよび年会システムの委託について(米田幹事): (株)国際文献印刷社にホームページ

管理を依頼するに当たり，イニシャルコスト34万円のうち6万円が移行作業費，27万円がHPのリニューアル経費，残りの1万円がサーバー設定費であること等々が説明がされ，承認された。ただし，非会員もホームページのメリットを受けるので，その分の負担をしてもらうような料金体系にするべきなどの意見が出た。

35 将来計画委員会からの提言(松田副会長): 1) 英語版に続き，中国語版の入会用パンフレットの作成，2) 従来の在外会員を海外会員とし定義を明確にし，権利の明確化をはかる，3) シニア会員の資格の見直し，4) 収支会員2カ年パックの新設等の提案があり，これに伴う会則の変更の提案を総会で行うことを承認した。ただし，シニア会員の条件として，会員歴20年以上と変更した。総会で承認を得た時点で，選出細則も一部変更する。

36 2004年事業報告・2005年事業中間報告・2005年事業計画(山本幹事): それぞれの事業内容について説明がなされ承認された。

37 2004年決算報告・2005年会計中間報告・2005年予算(鍵幹事): それぞれの会計内容について説明がなされ，電子化経費の修正等を経た後承認された。

38 2005年度総会議事次第(山本幹事): 総会の議事次第について説明がなされ，承認された。

39 委員の改選: 学会賞選考委員，鳥居基金選考委員の選挙がなされ，学会賞選考委員には田中剛会員，海老原充会員(次点: 日下部実会員)，鳥居基金選考委員には野尻幸広会員(次点: 和田秀樹会員，山本鋼志会員)が選出された。来年度の学会賞選考委員長には海老原充会員，鳥居基金選考委員長には蒲生俊敬会員に委嘱することとした。

310 今後の評議員会・幹事会の予定  
・2005年度第4回評議員会(引き継ぎ): 9月28日  
(水) 12:00~13:00

### 日本地球化学会2005年度 第4回評議員会議事録

日時: 2005年9月28日(水) 12:00~13:00

場所: 琉球大学・化学会議室

出席者: 田中剛会長，松田准一副会長，鍵裕之，川幡穂高，中井俊一，山本鋼志，米田成一(以上現幹事)，植田千秋，河村公隆，北逸郎，佐野有司，宗林由樹，千葉仁，長尾敬介，村江

達士，和田秀樹，渡久山章（以上現評議員）  
石橋純一郎，岩森光，平田岳史，益田晴恵，  
南雅代（次期評議員）

1．2002～2003年度評議員会からの申し送り事項への  
対応

田中会長から，前評議委員会からの申し送り事項  
とそれに対する対応について説明があった。

2．2006～2007年度評議員会への申し送り事項

次期評議委員会への申し送り事項は，以下の8点  
である。1）将来計画の中で，地球化学が主導する  
将来の特定領域研究をめざした学術活動（いくつか  
の分野での科学研究費(C)企画調査の申請など）を  
検討してほしい。2）新体制となる学術会議や新し  
く発足した地球惑星科学連合からの情報収集と対応，  
学術振興会へ科学研究費補助金審査員候補者等  
についての情報提供，等を進めてほしい。3）  
Goldschmidt 会議等との緊密な連絡を考え，GS  
の Council 選挙のときには，日本地球化学会から  
も候補をたてるなどの方策を講じてほしい。4）年  
会開催時のルール（学会として決めてある事項，  
LOC が決めて行う事項，など）を細則として判  
り易く整理してほしい。5）学会国際化を様々  
な面から推進してほしい。たとえば，外国での  
Goldschmidt 会議でのセッションを提案する等  
も検討してほしい。6）GJ 一層のレベルアップ  
策と電子出版化波への対応策を印刷費用の軽減  
もからめて検討してほしい。7）会員の他組織  
（例えば，学術振興会，文部省，財団）の賞  
への応募の促進と学会からの支援。8）地球  
化学講座の全巻完成。

3．その他 特になし

**第19期海洋科学研究連絡委員会  
（第7回）議事録**

日時：平成17年6月13日(月) 14時～17時

出席者：谷口旭，蒲生俊敬，中田薫，山口征矢，伊藤  
絹子，前田明夫，川辺正樹，灘岡和夫，友定  
彰

欠席者：北村佳照，磯部稔，寺崎誠，高橋正征，松田  
治，徐垣，竹内謙介，新野宏，佐藤義夫，池  
田元美，松山優治，植松光夫，古谷研

場所：日本学術会議 第4部会議室

前回議事録について

事前にメールで回覧し，必要な修正を施してあ  
った，第6回海洋科学研究連絡委員会（平成17年2月21  
日開催）の議事録案を承認した。

・報告事項

1．日本学術会議の最近の動向について（谷口委員  
長）

日本学術会議の最近の動向について，以下に示す  
内容の報告があった。

4月に行なわれた総会の概要ならびに日本学術会  
議の新しい体制のあり方に関する懇談会において検  
討されている項目の中間的まとめについての報告が  
あった。内容はこれまでと大きくはかわってあら  
ず，次に示す項目1）政策提言機能発揮のあり方  
について，2）学術団体との連携のあり方について，  
3）国際交流活動のあり方について，4）連携会員  
の職務，任期等，選考方法など，5）常置及び臨時  
の委員会の役割，編成，構成など，6）幹事会への  
権限委任事項，それぞれについて具体的に検討され  
ている段階であることが報告された。

補足説明として以下のことが報告された。

今後，研連はなくなり，課題別委員会が設置され  
る予定であるが，それだけでは不十分であるの  
で，分野別委員会も設けられる予定である。ただ  
し，分野別委員会は研連と対応しているわけでは  
ないので，構成メンバーなどについても検討され  
る予定である。

交際交流のあり方については交際交流常置委員会  
を設けて，傘下に50くらいの交際交流対応委員会  
の設置も検討されている。

国内の科学者との連携強化に関しては，現在  
1,000以上ある学協会のうち一定の基準に達した  
団体を通じて対応しようという検討がなされてい  
る。内容に関する詳細はホームページに掲載さ  
れている。

2．G8サミットに向けた各国学術会議の共同声明に  
ついて（谷口委員長）

平成17年6月8日付で，日本学術会議はG8  
サミット（イギリスのグレンイーグルスで開催予  
定）に向けた各国学術会議の共同声明（「環境問  
題」，「アフリカ開発」）を小泉内閣総理大臣に手交  
した旨の報告があった。また，共同声明に関する黒  
川学術会議会長のコメントも記されていることが紹  
介された。

### 3. 日本の科学技術政策の要諦について(谷口委員長)

日本学術会議の声明として「日本の科学技術政策の要諦」が冊子体としてまとめられたことが報告された。

おもな項目(目次)は、1)20世紀の日本の背景、世界の背景、2)20世紀の特徴、3)21世紀の世界的課題、4)21世紀の日本の課題、5)日本の科学技術政策の「目標ミッション」と戦略、6)科学技術政策の「目標ミッション」、7)日本が目指すべき「国家ビジョンと目標ミッションと科学技術政策～「環境と経済の両立めざす」品格あるモデル国家～である。

### 4. 内外の関連機関組織からの報告について

#### (1) GEOTRACES について(蒲生委員)

GEOTRACES(ジオトレイシス:海洋の微量元素・同位体による生物地球化学研究)計画に関して以下のことが報告された。

SCORの国際大型プログラムとしてスタートし、サイエンスプラン立案の最終段階に至ったことから、国内におけるGEOTRACES計画の進め方と国際連携のあり方を議論するために、本研究連絡委員会の下に「GEOTRACES小委員会」を招集申請することが、前回の研連で提案され、了承されている。研連は9月以降、なくなるが、小委員会は継続してゆく予定である。計画の詳細は「月刊海洋」に掲載されている。

#### (2) 日本科学連合について(川辺委員)

5月22日から26日、幕張メッセにおいて合同科学大会が開催され、地球惑星科学連合が発足した旨の報告があった。

#### ・協議事項

#### (1) SCOR 関連(谷口委員長)

SCOR Working Groupの新提案に関する日本国内委員会の評価が求められており、本研連が対応することとなった旨の報告がなされ、谷口委員長より、6つのプロポーザルにそれぞれ担当委員を決めてコメントすることが提案され、以下のように分担することで了承された。

- 1) Thermodynamics and Equation of State of Sea Water 川辺委員
- 2) Investigate Mesopelagic Fish Populations as Potential Fish Stocks 中田委員

3) Hydrodynamic and Sediment Transport Model Prediction Performance Criteria 瀬岡委員

4) Natural and Human-Induced Hypoxia and Consequences for Coastal Areas 蒲生委員

5) Deep Ocean Exchanges with the Shelf 池田委員

6) Critical Bathymetric Studies 徐委員

#### (2) 第19期海洋科学研究連絡委員会の対外報告について(谷口委員長)

“海洋に関わる学術の統合的推進の必要性 包括的海洋政策の一環として”

標記の対外報告の原案が谷口委員長より提示され、種々議論された。時間的な制限があるので、本原案に対しての意見は2週間以内にメール等で送り、委員長が再度取りまとめることで了承された。

(議事録作成 伊藤絹子)

### 第19期海洋科学研究連絡委員会 (第8回)議事録

日時:平成17年8月19日(金) 14時~17時

出席者:谷口旭,蒲生俊敬,中田薫,伊藤絹子,前田明夫,瀬岡和夫,友定彰,古谷研,松田治,北村佳照,徐垣,新野宏,寺崎誠

欠席者:磯部稔,高橋正征,竹内謙介,佐藤義夫,池田元美,松山優治,植松光夫,川辺正樹,山口征矢

場所:日本学術会議 第5部会議室

#### 前回議事録について

事前にメールで回覧し、必要な修正を施してあった、第7回海洋科学研究連絡委員会(平成17年6月13日開催)の議事録案を承認した。

#### ・報告事項

#### 1. 運営審議会における対外報告の審査結果について(谷口委員長)

第18期から申し送りを受けて検討してきた対外報告については、そのタイトルを「海洋に係わる学術の統合的推進の必要性 包括的海洋政策への提言」として、複合領域研連運営協議会の審査をへて最終承認機関である日本学術会議運営審議会へ提出し、7月21日に口頭説明と質疑応答を行った。その結果、提言の重要度およびその背景に関する調査

検討内容の充実度が高く評価された。これを対外報告ではなく、政府が尊重しなければならないとされている「勧告」として発出すべきであるという意見も付帯された。これを受けて日学会長と副会長が検討した結果、提言内容の国際的な側面を考慮すると、現在の政府が直ちに策を講ずることは難しいと判断されるため、今期は「勧告」とすることを見送ることになった。そこで、本研連としては、この報告をしかるべきスタイルで印刷製本し、関係する機関や団体および個人、また、報道機関等に広く送付することが必要であると判断した。印刷製本の費用等については、委員長が可能性を探ることとした。

## 2. その他

### (1) 第145回総会における活動報告について（谷口委員長）

8月末に開催される第145回総会（臨時総会）に提出する海洋科学研究連絡委員会報告資料が紹介された。この総会は第19期最後の総会となるので、その報告資料には、本日および9月12日に開催する次回研連委員会のことも予め記載してある。

### (2) 「日本学術会議の新しい体制の在り方」について（谷口委員長）

日本学術会議の新しい体制の在り方に関する懇談会による第20期への提案の最終案が配布された。この案によると、今期限りでなくなる本研連に代わるものとして、SCOR に対しては、「国際委員会」の「国際学術団体分科会」に「SCOR 小分科会」を設けて対応することになると予想される。また、海洋学に関する諸課題に関する検討は、関連する13研連の課題に対処するものとして新設される常置の分野別委員会「地球惑星科学委員会」の中で行われると予想される。この委員会には、必要に応じて分科会、さらにその小委員会を設けることができるとされているので、「海洋科学分科会（仮称）」設置の提案を次期の会員に申し送ることが必要であると判断された。

## ・協議事項

### 1. 第19期海洋科学研究連絡委員会の総括と次期への申し送りについて（谷口委員長）

今日まで研連が担ってきた役割のうち SCOR への対応を除く審議機能を次期以降へ継承する体制は、10月以降に第20期が決定することになっている。そのため依然不明ではあるが、大勢は上記 2

(2) のようになると予想されるので、「国際委員会」の「国際学術団体分科会」に「SCOR 小分科会」を設けること、また、分野別委員会である「地球惑星科学委員会」に「海洋科学分科会（仮称）」を設けることを、次期へ申し送ることとした。また、今回の対外報告を骨子にした「勧告」を第20期で作成するよう、併せて申し送ることを承認した。申し送り文書の原案は、委員長が作り、次回委員会に提案することとした。

### 2. 平成19年度時限付科学研究費補助金について（谷口委員長）

日本学術会議から日本学術振興会に対して、平成18年度時限付科学研究費補助金の細目として「海洋環境学」が他の12細目案とともに要望されている。このうち採択されるのは3ないし4件程度と予想されるが、採否の決定まだ明らかではない。そこで、「海洋環境」が平成18年度に採択された場合には平成19年度への要望はしないこと、採択されなかった場合には同じものを19年度に再度要望することとした。

### 3. SCOR Working Group Proposals の順位について（谷口委員長）

標記について、8月末に SCOR 執行理事会に日本代表として出席する蒲生委員に対し、各プロポーザルの担当委員による評価を参考に6件のプロポーザルに順位をつけることを一任した。後に Hypoxia および Equation of State の2件を日本からの推薦とする旨蒲生委員より報告があった。

### 4. 日本学術会議太平洋学術研究連絡委員会畑井メダル授賞者選考委員会委員の推薦について（谷口委員長）

太平洋学術協会（Pacific Science Association: PSA）は4年毎に開催される太平洋学術会議（Pacific Science Congress: PSC）において、太平洋の海洋生物学の発展に顕著な貢献をされた方へ畑井メダルを授与して顕彰しているが、平成19年春に日本で開催される第21回 PSC における受賞者の選考を始めるにあたって、本研連から3名の選考委員を推薦するよう太平洋学術研連から要望があった。因みに、水産学研連から4名と植物学研連、動物学研連、生態・生物環境科学研連および地球環境研連 IGBP 専門委から各1名の委員がでて、世話人である谷口委員長を加えた合計12名の選考委員会が結成される予定である。すでに他研連から推薦されてい

る委員候補者の専門領域および所属機関とのバランスを考慮して、本研連からは西田周平、古谷研、本城凡夫の三氏を推薦することとした。

#### 5. わが国における海洋研究船のありかたについて

最初に本課題について審議することを提案した徐委員から提案趣旨の説明、次いで全国共同利用研究船に関して責任を負っている東京大学海洋研究所の所長である寺崎委員から共同利用に関する現状と課題について説明を受けた。それらの要点は以下のようである。

研究船淡青丸（1982年建造）の船齢が20年に達しようとしていたときから、東大海洋研究所はその代船計画を検討していた。その計画は、平成18年度から白鳳丸とともに淡青丸がJAMSTECへ移管されるときに、JAMSTECおよび文科省研究開発局へ引き継がれた。それを受けてJAMSTECが文科省の担当部署と折衝を開始し始めたところ、海洋研策定の代船計画が財務当局にそのまま承認される可能性は極めて低いことが予測されるようになった。その原因は、JAMSTECには他にも数隻の研究船があり、中には性格が淡青丸と似た船もあるため、財務当局には、重複した船腹数の整理（減船）が必要だと見えていることにある。こうした代船建造要求に対する厳しい見方は、淡青丸だけではなく、今後全ての研究船に対して向けられるので、研究船全体を対象して、わが国における研究船のあり方に関するビジョンを分かりやすく、説得的に呈示する必要がある。

文部科学省は科学技術・学術審議会海洋開発分科会に、わが国における海洋研究船のあり方を検討するよう諮問し、同分科会は、全体の将来構想の中で淡青丸の代船の必要性やその規模・機装等に関して審議することになった。そこでの審議に、研究船ユーザである海洋学の研究者コミュニティの意見や要望を反映させることは、研究者にとっても運航に責任がある両機関にとっても重要であるにとどまらず、同分科会における審議にとっても極めて有益である。同分科会における審議開始は10月であり、今年度内に答申に至るとみられるので、本研連では早急に検討を開始し、第20期において今年度末まで検討が継続されるよう努力しなければならない。

以上の提案と背景の説明を受けて委員全体による自由討議を行った結果、以下の諸項目の指摘があり、これらを今後の検討に活かすこととした。

- 1) わが国における海洋研究調査船の在り方について、ユーザの立場から本研連でも検討する。
- 2) 具体的には、特定機能を有する船と多目的多機能の船の必要度、一元的な全国共同利用運航と機関別ないしプロジェクト別の個別運航の必要度、無人機器や自動測器の開発導入によるシブタイムあるいは船腹数節約の可能性、大学練習船および農水省や運輸省の事業に従事する船舶との関係、などについて検討する必要がある。
- 3) 当面する淡青丸代船問題に関しては、JAMSTECと海洋研の運航委員会が密な協議を行って、同時期に同一海域で類似した複数の研究航海が行われることを極力避けることが求められる。
- 4) 白鳳丸と淡青丸の運航経費は当初から全国共同利用枠として確保されているが、JAMSTECの船舶運航経費は、しんかい16500を除いて、研究プロジェクト経費の一部として配分されている。それゆえ、前二船では研究課題を完全公募することが可能であるが、後者では当該プロジェクトの目的に合致する研究以外にシブタイムを提供することができない。JAMSTECの研究プロジェクトが多様化すればそれだけ多様な研究課題にシブタイムを提供することができるようになる。現時点で足りないと思われるのは生物系のプロジェクトである。その強化を本研連がJAMSTECに要望することもひとつの解決法ではないか。
- 5) 研究船ごとの機能や目的を特定すること、複数船の運航時期と海域の重複を避けること、特定プロジェクトの研究航海へとまとめることなどは、確かに研究船団の経済的な運航には役立つ。しかし、科学の本質である研究の個性や独立性、研究の競争的進歩の機会が失われる危険性も大きくなるので、慎重な配慮が必要である。

以上。次回は9月12日開催の予定

（議事録作成 伊藤絹子）

### 平成18年度研究奨励金 対象研究計画の募集について

社団法人 新化学発展協会

(社)新化学発展協会では、基礎研究の推進と研究者の育成を通じて新化学の発展を図ることを目的に、新化学の発展に資する若手研究者の研究に対して、下記に従って研究奨励金を贈呈いたします。応募される方は、下記の研究課題の中から1つを選び、研究計画を作成し協会事務局まで提出して下さい。課題の説明、応募要項、応募書式は、下記協会ホームページからも入手できます。ご不明の場合は協会事務局までお問い合わせ下さい。

## 記

### 1. 研究課題

- (1) 高機能触媒開発を目指した新規材料の創製に関する研究
- (2) 統計力学・熱力学を応用した、溶液状態における物性推算手法に関する研究
- (3) 環境・エネルギー分野における新素材・新部材創製と新機能創出に関する研究
- (4) 電子情報分野において、自己組織化や特殊な場を利用して構造を構築し、新たなデバイス機能発現を目指した研究
- (5) MEMS 分野において、構造体ならびにプロセス材料として、新たなデバイス機能発現に必要な材料研究および新しい材料を用いた新規デバイスの研究
- (6) 生体高分子を新規な機能性材料として実用化することを目指した研究
- (7) 化学プロセスに用いる次世代型生体触媒の開発と利用に関する研究

### 2. 応募資格

大学またはこれに準ずる研究機関において研究活動に従事する者で、39歳以下(昭和41年4月1日以降に出生)の者。ここでいう「大学」とは、学校教育法に定める大学(大学院、大学に付置される研究所その他の研究施設も含む)をいう。「これに準ずる研究機関」とは、大学共同利用機関、高等専門学校をいう。上述以外の独立行政法人研究機関、公立試験研究機関、特殊法人試験研究機関、公益法人(財団法人、社団法人)試験研究機関は含まない。また、「研究に従事する者であって、39歳以下の者」には学部生、大学院生は含まない。

### 3. 件数および金額

原則として各課題につき1件とし、1件につき100万円を贈呈する。

### 4. 条件

研究奨励金の贈呈より1年経過後2年以内に研究経過を報告することなど。

詳細は応募要項(協会ホームページに掲載)をご覧ください。

### 5. 応募締切

平成18年1月31日(火) 必着のこと。

### 6. 選考・贈呈

有識者を含む協会の審査委員会にて選考し、平成18年6月(予定)に贈呈する。(選にもれた方には特に通知しませんので、ご了承ください。)

### 7. 問い合わせ先・応募申請書掲載先

社団法人 新化学発展協会 研究奨励金係  
〒101 0041 東京都千代田区神田須田町1 12  
(山萬ビル4階)

Tel : 03 5297 8820, Fax : 03 5297 8821

E-mail : [aspronc@aspronc.org](mailto:aspronc@aspronc.org)

URL <http://www.aspronc.org>

## 林女性自然科学者研究助成基金 助成公募(平成18年度)

下記の助成を行うことになりました。

希望者は申請書を事務局にお送り下さい。

- 対象：わが国の大学、国公立又は非営利事業財団等の研究機関において、自然科学(化学及びそれに関連ある物理学・生物学)の基礎研究に従事する若手女性研究者(国籍を問わない)。
- 助成内容： 研究助成：10数件、総額約2千万円。  
林フェロー：博士号を目指す若手研究者(1百万円)数名。2年間助成。 国際研究交流助成(国際研究集会での研究発表、海外での共同研究のための渡航)年10件程度、総額150万円。
- 申込締切日：2006年3月31日(金) は事務局にお問い合わせのこと。
- 申請書：中央三井信託銀行のホームページからダウンロードしてください。  
[http://www.chuomitsui.co.jp/koueki/k\\_topm.html](http://www.chuomitsui.co.jp/koueki/k_topm.html)
- 申込・問合せ先：  
〒105 8574 東京都港区芝3 33 1  
中央三井信託銀行本店法人営業第二部公益信託課内  
林基金事務局  
Tel : 03 5232 8911, Fax : 03 5232 8919

## 公益信託山村富美記念女性自然科学者 研究助成基金助成公募（平成18年度）

下記の助成を行うことになりました。希望者は申請書を事務局にお送り下さい。

- 対象：わが国の大学、国公立又は非営利事業財団等の研究機関において、自然科学（化学及びそれに関連ある物理学・生物学）の基礎研究に従事する若手女性研究者（国籍を問わない）
- 助成の種類：山村フェロー：博士号を取得している若手女性研究員（2百万円）数名。2年間助成。
- 申込締切日：2006年3月31日(金)
- 申請書：中央三井信託銀行のホームページからダウンロードしてください。

[http://www.chuomitsui.co.jp/koueki/k\\_topm.html](http://www.chuomitsui.co.jp/koueki/k_topm.html)

\* 申込・問合せ先：

〒105 8574 東京都港区芝3 33 1

中央三井信託銀行本店法人営業第二部公益信託課内  
山村基金事務局

Tel : 03 5232 8911 , Fax : 03 5232 8919

### 第16回大気化学シンポジウムのご案内

日程：2006年1月11日(水)～13日(金)

場所：豊川市民プラザ（PRIO II ビル3階）

Tel : 0533 80 5122 , Fax : 0533 80 5125

交通は以下の方法のいずれかです。

- 1) 名古屋鉄道豊川線諏訪町駅より徒歩3分
- 2) JR 飯田線豊川駅よりタクシーにて約10分（1,100円程度）
- 3) JR 豊橋駅より「豊川駅行き」または「新城・田口方面行き」バスに乗車して約30分「豊川体育館前」で下車し徒歩0分
- 4) 東名豊川ICより車で10分。クオリティホテル豊川と同じ建物。

参加費：シンポジウムの参加登録費は無料です。

懇親会：1月12日夜に懇親会を予定しております。

（懇親会費有料）

宿泊：クオリティホテル豊川（会場の豊川市民プラザと同じ建物）を割引料金（通常料金6,500円税別の一割引き）にて利用することができます。宿泊ご希望の方は、ホテルへ直接お申し込み下さい。その際必ず「名古屋大学の大气シンポジウムで利用」とお申し出下さい。宿泊者駐車場

あり。

クオリティホテル豊川 <http://www.greens.co.jp>

Tel : 0533 80 5111 , Fax : 0533 80 5115

シンポジウムでの発表希望者は、(1)講演題目、(2)著者名（発表者名の前に 印）および所属略称、(3)申込者氏名、(4)連絡先（所属、住所、電話、Fax、E-mail）、(5)旅費の支給の希望の有無（希望の場合は支給期間）、(6)口頭またはポスターの希望、(7)懇親会の出席希望の有無、以上を書いた電子メールを連絡先電子メールアドレスへお送りください。もしくは、A4紙に記入の上で下記連絡先住所へ郵送でお送りください。

発表申し込み締め切り：2005年11月25日(金)

なお詳細は、ホームページ（<http://www.stelab.nagoya-u.ac.jp/ste-www/1/div/1/taikiken/>）に掲載いたします。

世話人：近藤豊（東大先端研）、松見豊、水野亮（名大太陽研）

プログラム委員：谷本浩志（国立環境研）、竹川暢之（東大先端研）、塩谷雅人（京大生存圏研）、町田敏暢（国立環境研）

連絡先：〒442 8507 豊川市穂ノ原3 13

名古屋大学太陽地球環境研究所

松見研内大気化学シンポジウム係

Tel : 0533 89 5192 , Fax : 0533 89 5593

E-mail : taikiken@stelab.nagoya-u.ac.jp

### International Seminar AASPP-Misasa のお知らせ

岡山大学地球物質科学研究センター（三朝）では、日本学術振興会による Asia-Africa Science Platform Program (AASPP) を進めております。AASPP に関連して、以下のような国際セミナーの開催を企画いたしました。

International Seminar AASPP-Misasa “Magmatic gases, their trip from the mantle to the surface of the Earth”, 27 February, 2006, Misasa, Japan

セミナーの詳細は当センターのウェブサイト

<http://www.misasa.okayama-u.ac.jp/AASPP/index.html>

<http://www.misasa.okayama-u.ac.jp/AASPP/circular01.html>

からご覧いただけます。

International Seminar AASPP-Misasa

“Magmatic gases, their trip from the mantle to the surface of the Earth”

27 February, 2006, Misasa, Japan

First Circular

Dear Colleagues,

We are pleased to announce the first AASPP-Misasa Seminar (Asia-Africa Science Platform Program sponsored by JSPS) on “Magmatic gases, their trip from the mantle to the surface of the Earth”. Emphasis is placed on the geochemistry of the Lake Nyos gas disaster, Cameroon Volcanic Line-Rift Valley volcanoes and the underlying mantle. The seminar will be held in Misasa, Japan, on 27 February, 2006, sponsored by Institute for Study of the Earth's Interior, Okayama University (ISEI) and Japan Society for the Promotion of Science (JSPS).

The oral and poster sessions are organized for the seminar. The oral sessions will be devoted to the invited speakers, who are currently Aka, F. T., Bernard, A., Evans, W. C., Notsu, K., Saito, G., Shinohara, H., Tanyileke, G., Taran, Y., Varekamp, J. C., and Yokoyama, T. At the seminar, a special talk by Minoru Kusakabe, who has been working in geochemistry of crater lakes and magmatic-hydrothermal systems, is planned, for he is retiring from ISEI at the end of March 2006. The banquet which will be held after the seminar in the evening on 27th March contains an element to celebrate Prof. Kusakabe's retirement. If you are interested in the above subject, you are cordially invited and can present your poster at the seminar. Poster presenters should inform the organizers of their wish via e-mail as soon as possible, preferably by 23rd November, for the organizers need to know the number of attendees to secure the cost for the domestic (i.e., in-Japan) trip. It will be covered by ISEI's collaboration fund. Those who wish to participate only in the seminar and banquet (i.e., without presentation) are also requested to inform of their intention to the organizers via e-mail by 23rd November, for they need

to secure the necessary accommodation.

Registration fees will be ¥10,000 and will include refreshments, a lunch and banquet. You are requested to pay the registration fees only in Japanese yen on-site.

The second circular, including registration and abstract submission as well as accommodations information, will be available by the end of November, 2005 in this website. The abstract deadline will be 31 January, 2006.

ISEI is now intensively promoting the establishment of an international research center for solid earth sciences focused on the origin, evolution and dynamics of the Earth according to the 21st Century COE program (COE-21, Program leader: Prof. Eizo Nakamura) sponsored by Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology, Japan (MEXT). The AASPP-Misasa seminar is aimed at achieving a common goal with that of the COE-21 program.

We look forward to seeing you in Misasa.

Minoru Kusakabe (kusakabe@misasa.okayama-u.ac.jp), and Shigeru Yamashita (shigeru@misasa.okayama-u.ac.jp)

Organizers of the Seminar

Institute for Study of the Earth's Interior,  
Okayama University

Misasa, Tottori-ken 682-0193, Japan

Tel:+81-858-43-3737 (M.K.) and-3738 (S.Y.)

Fax:+81-858-43-2184 and-3450

### 第54回質量分析総合討論会

主催団体：日本質量分析学会（会長：平岡賢三，山梨大学教授）

会期：2006年5月17(水)～19日(金)

会場：千里ライフサイエンスセンター（大阪府豊中市新千里東町1 4 2）

実行委員長：戸塚善三郎（JCL バイオアッセイ・西脇ラボ所長）

事業概要：本事業（大会）は学会の年次大会に相当す

る学術集会であり、シンポジウム等を含めた口頭発表が3会場、およびポスター、企業展示が1会場にて実施する予定である。本会会員に加え、例年、質量分析に携わるサイエンティスト、エンジニアが多数集まり、研究発表を通じた活発な意見交換が行われる。

メインテーマ：発展するMSサイエンス The Progressive Science of Mass Spectrometry

#### 特別講演

Prof. Matthias Mann (Max-Planck Institute for Biochemistry, Germany)

Prof. Franz Hillenkamp (University of Munster, Germany)

Prof. Donald Hunt (University of Virginia, VA)

他、シンポジウム、ワークショップ、一般口頭発表、ポスター発表、ランチョンセミナーを開催予定

### 国際鉱物学連合第19回総会学術講演会 (IMA 2006 Kobe)のお知らせ

「Expansion to Nano, Bio, and Planetary Worlds」という標題の下に、来年2006年の7月23日から28日にかけて神戸国際会議場で、国際鉱物学連合の第19回総会学術講演会(IMA 2006 Kobe)が開催されます。貴学会からも後援学会としてこの国際会議を支援していただいております。

Mineral Physics and High Pressure Mineralogy, Structural Sciences of Minerals, Crystal Growth, Hydrothermal Process and Mineralization, Petrologic Processes, Planetary Materials, Environmental and Applied Mineralogy, Mineral Heritage, New Frontiers in Mineral Sciencesと鉱物に関連する幅広い研究分野に渡って37のセッションを設け、口頭発表とポスター発表を募集します。また、9コースの巡検も用意しました。詳細はホームページ：<http://www.congre.co.jp/ima2006/>をご覧ください。セカンドサーキュラーもダウンロードできます。今月より、ホームページを通じて参加登録ができるようになりました。参加登録費が50,000円から40,000円に割引となる事前登録と、講演要旨原稿の締め切りは来年の2月28日です。特に学生の皆さんの活発な参加を促すために学生の登録費を30,000円に設定しております。この特別登録費は事前登録時期にしか適用されませんので

ご留意下さい。

皆様の奮ってのご参加をお願いします。

IMA 2006 Kobe

組織委員長 山中高光

広報委員会 宮脇律郎・青木正博・長瀬敏郎

IMA 2006 KOBE

Expansion to Nano, Bio and Planetary Worlds

Dates: July 23 (Sun.) -28 (Fri.), 2006

Site: International Conference Center Kobe, Kobe, Japan

<http://www.congre.co.jp/ima2006>

参加登録の受け付けが始まりました。

参加登録費

早期登録は割引になっています。

学生登録費は特に配慮しましたので、適用期間中に登録して下さい。

	早期登録	通常・当日登録
一般	40,000円	50,000円
学生*	30,000円	一般と同額
同伴者	8,000円	8,000円

\*詳細はホームページまたはセカンドサーキュラーをご覧ください。

#### 重要期日

要旨提出締切：2006年2月28日

早期登録締切：2006年2月28日

巡検申込締切：2006年4月23日

募集定員に達した時点で締め切ります

宿泊及びオプションツアー申込締切：2006年6月23日

#### 主催

日本学術会議、日本鉱物学会、日本岩石鉱物鉱床学会、資源地質学会

#### 後援

日本地球化学会、日本地質学会、日本惑星科学会、日本高圧力学会、日本地震学会、日本火山学会、日本結晶学会、日本粘土学会、日本結晶成長学会、日本放射光学会

## 第17回国際堆積学会議 (17th International Sedimentological Congress) 開催のお知らせ

国際堆積学会議は、国際堆積学協会 (International Association of Sedimentologists) が中心となって開催される国際会議で、4年に1回世界各地において開催されています。この度、東アジア地域で初めてとなる第17回国際堆積学会議 (ISC 2006) が、2006年に福岡において開催されます。

本会議は、名称の通り「堆積学」に関連する幅広い分野の研究発表・情報交換の場です。会議には、地球化学にも関連した項目・内容がたくさん含まれています。日本地球化学会関係者の研究成果を国際的に発表し、討論するよい機会となります。また、若手研究者の皆様には、世界の堆積学の動向を肌で感じる機会ともなります。多数の方々の参加をお待ちしています。本会議の日程等は以下のとおりです。なお、会議に関する詳細な情報やサーキュラーは、ウェブサイト (<http://www.isc2006.com>) より入手できます。

主催：国際堆積学協会・日本堆積学会・日本地質学会  
開催日程：2006年8月27日(日)～9月1日(金)

場所：福岡国際会議場

メインテーマ：「From the Highest to the Deepest」

ヒマラヤからマリアナ海溝まで、様々な堆積環境・堆積過程が存在する東アジアの地形・堆積学的特徴を表すと共に、堆積学における世界最高レベルでの深い理解と探求、ならびに高い研究成果の追及を意味します。

科学プログラム：

それぞれの分野の第一人者による12の特別シンポジウムと、堆積学と関連する多様な分野をカバーする57のテクニカルセッション、野外巡検(韓国5、台湾2を含む計36コース)、ショートコース(6テーマ)、ワークショップ(2テーマ)が予定されています。是非、セカンドサーキュラーあるいはウェブサイト (<http://www.isc2006.com>) をご覧下さい。

重要日程：

1. 登録・要旨提出開始：2005年10月1日  
申し込み先：<http://www.isc2006.com/>
2. 巡検・ショートコース・ワークショップ登録締切：2006年1月15日

3. 講演要旨提出締切：2006年2月28日
4. 講演要旨受理通知：2006年4月15日
5. ソーシャル・プログラム、宿泊予約、各種支払い締切：2006年5月1日

問合せ先：

〒110 0016 東京都台東区台東4 27 5  
秀和御徒町ビル8F  
近畿日本ツーリスト株式会社 ECハウス内  
第17回国際堆積学会議組織委員会事務局  
E-mail：[isc2006-ec@or.knt.co.jp](mailto:isc2006-ec@or.knt.co.jp)  
Fax：03 5807 3019

参加費用：

- 2006年5月1日以前：  
登録料 一般30,000円、学生10,000円、  
要旨投稿料 12,000円  
2006年5月2日以降：  
登録料 一般40,000円、学生15,000円

### 教授(名古屋大学大学院環境学研究科 地球環境科学専攻) 公募のお知らせ

1. 職種・人員：名古屋大学大学院環境学研究科地球環境科学専攻地球環境変動論講座 教授・1名
2. 応募資格：
  - (1) 大気・水圏にかかわる地球環境変動の研究を行い、この分野に関連する国内外の研究プロジェクトを推進した実績があること。
  - (2) 地球環境科学の広い分野に見識を持ち、当研究科で推進するプロジェクトに参加できること。
  - (3) 大学院教育に熱意を持ち、地球環境変動関連の授業を担当できること。
3. 着任希望時期：2006年4月1日
4. 応募書類：
  - (1) 履歴書
  - (2) これまでの研究と推進した研究プロジェクトの概要
  - (3) 今後の教育・研究の計画と抱負
  - (4) 研究業績リスト(和文のものは和文で表記すること)
    - A. 査読のある原著論文
    - B. 総説、解説、報告(査読の有無を記すこと)
    - C. 著書
    - D. 国内外の学会活動、受賞歴、招待講演、社会との連携、その他特記事項
  - (5) 主な論文の別刷り3編程度(複写可)

- (6) 応募者に関する所見をうかがえる方2名の氏名と連絡先
5. 応募締切: 2005年12月5日(必着)  
封筒の表に「教員応募書類在中」と朱書き, 簡易書留にて郵送すること。
6. 書類の送付先及び問い合わせ先:  
甲斐憲次  
地球環境変動論講座教授選考委員会委員長  
名古屋大学大学院環境学研究科  
〒464 8601 名古屋市千種区不老町  
Tel: 052 789 4257, Fax: 052 789 4257  
E-mail: kai@info.human.nagoya-u.ac.jp
7. その他  
当研究科の概要についてはホームページ  
<http://www.env.nagoya-u.ac.jp/>をご覧ください。

### 九州大学大学院理学研究院 化学部門助教授公募

九州大学大学院理学研究院化学部門では下記の要領で助教授1名を公募いたします。

1. 公募分野: 無機化学(無機化学をベースとして地球化学や環境化学の研究を展開できる方)
2. 授業担当: 大学院教育科目, 専攻教育科目, 全学教育科目
3. 提出書類(A4版で統一してください)
  - (1) 履歴書
  - (2) 研究業績目録
 

(a) 審査を経た論文, (b) 著書・総説, (c) 紀要・その他に分類し, それらをさらに研究内容別に分類して年代順に並べてください。また, 応募者が第1著者あるいは主著者である論文には, 主要論文として別刷等を提出したのものには 印をつけてください。
  - (3) 主要論文10編(別刷あるいはコピー)
  - (4) 研究業績の概要および研究計画(3,000字程度)
  - (5) 教育実績の概要および教育の方針・抱負(2,000字程度)
  - (6) 推薦書(健康に関する所見を含む)。自薦の方は意見を求めうる方2名の氏名をあげ, その連絡先を記入してください。
  - (7) 研究教育等実績調書(様式は <http://www.scc.kyushu-u.ac.jp/Koubo.html> からダウンロードできます)
4. 応募締切日: 平成18年1月26日(木)(消印有効)

5. 着任予定: 決定後, できるだけ早い時期
6. 応募書類提出先および問い合わせ先:  
〒810 8560 福岡市中央区六本松4 2 1  
九州大学大学院理学研究院化学部門  
無機化学系所属助教授候補者選考委員会委員長  
横山拓史  
Tel: 092 726 4750  
E-mail: yokotsec@mbbox.nc.kyushu-u.ac.jp  
応募書類を郵送の場合は, 簡易書留・速達とし, 「無機化学系講座助教授応募書類在中」と朱書きしてください。
7. 付記
- (1) 本公募対象の無機反応化学研究室には横山拓史教授, 岡上吉広助手が在籍中です。  
その他無機化学系講座として無機化学研究室に北川宏教授, 山内美穂助手, 錯体化学研究室に酒井健教授, 高橋和宏助教授, 正岡重行助手が在籍しています。
  - (2) 勤務地は六本松キャンパスとなります(平成20年, 箱崎キャンパスに移転予定)
  - (3) 選考の最終段階において講演をお願いし, 面接を行います。
  - (4) 九州大学では, 男女共同参画社会基本法の精神に則り, 教員の選考を行います。
  - (5) 給与等(初任給・諸手当)についての問い合わせは, 理学部庶務掛(Tel: 092 642 2521)までお願いします。

### 大阪大学大学院理学研究科 宇宙地球科学専攻教員公募

1. 職種・人員: 教授・1名
2. 専門分野等: 物性物理学・物質科学の実験分野  
宇宙地球科学専攻は, 宇宙・惑星・地球の幅広い時間空間に起こる自然現象や生命系までを含むさまざまな物質の極限状態を, 物理学を基礎として解明し, 伝統的な天文学や地球惑星科学とは異なる視点からの宇宙地球科学の構築を目指して研究教育を行っています。この趣旨を踏まえて, 物性物理学・物質科学の実験分野で, 宇宙地球科学への新展開に意欲をもって, 新しい研究グループを立ち上げていく方を募集します。宇宙地球科学専攻および物理学科の教育・運営に責任をもちいただきます。
3. 着任時期: 決定後できるだけ早い時期
4. 応募資格: 博士号を取得していること

## 5. 提出書類:

- (1) 履歴書
- (2) 研究業績リスト(各種研究費の獲得歴, 学会活動歴を含む)
- (3) 主要論文5篇の別刷
- (4) これまでの研究経過(2,000字程度)
- (5) 研究・教育に関する今後の計画と抱負(2,000字程度)
- (6) 照会可能者2名の氏名と連絡先

6. 公募締切:平成18年1月31日(火) 必着

7. 書類送付先および照会先

〒560 0043 大阪府豊中市待兼山町1-1

大阪大学大学院理学研究科宇宙地球科学専攻専攻長  
玉山 明

Tel: 06 6850 5800, Fax: 06 6850 5494

E-mail: akira@ess.sci.osaka-u.ac.jp

当専攻のホームページ:

<http://www.ess.sci.osaka-u.ac.jp/index-jp.html>

封筒に「教員公募書類在中」と朱書き, 簡易書留または書留で送付のこと

## 国立環境研究所大気圏環境研究領域 大気反応研究室リサーチアシスタント公募

国立環境研究所大気圏環境研究領域大気反応研究室では, NIES RA(リサーチアシスタント)を募集しております。NIES RA制度は, 大学院博士課程に在籍する学生を対象とし, 国立環境研究所において行っている研究のアシスタントを通じてスキルアップを図るとともに, 国立環境研究所が有する装置・施設を利用した実験など関連する研究テーマの立案と遂行を行うことで自身の研究を深める機会を提供するものです。

採用者は, 以下のいずれかのテーマのアシスタントを行いながら関連する研究を行います。共同研究者は谷本浩志主任研究員, または猪俣敏主任研究員です。なお, 研究テーマならびに待遇の詳細については随時, お問い合わせください。短期(数ヶ月)の採用など研究計画に応じてフレキシブルに受け入れることが可能です。なお, 詳細は国立環境研究所ホームページ(<http://www.nies.go.jp/osirase/saiyo/index.html>)をご参照ください。

1. 募集人数: 若干名(適任者不在の場合は採用を見合わせる場合もあります)

## 2. 研究テーマ:

- ・化学イオン化 飛行時間型質量分析法を用いた大気中微量気体成分の測定法の開発に関する研究
- ・プロトン移動反応 質量分析計(PTR-MS)を用いた野外観測
- ・有機エアロソルのソフトイオン化質量分析法の開発
- ・化学輸送モデルを用いたアジア地域における対流圏オゾンとエアロソルおよび前駆物質の長期変動の解析
- ・Master Chemical Mechanismを用いた非メタン炭化水素の酸化・変質過程のモデリング

3. 期待される専門分野など(候補者の意欲によっては, この限りではありません)

- (1) 大気化学, 物理化学, 分析化学, 地球物理学, 統計学, 有機化学などの専攻であること。
- (2) 観測機器や実験装置の開発・オペレーションに携わった経験があること。質量分析技術・真空技術, 測定装置の設計・製作を行えることは採用において優遇します。
- (3) プログラミングやそれを用いたデータ解析に携わった経験があること。化学輸送モデル, ボックスモデルなどの製作・使用経験があることは採用において優遇します。

## 4. 応募資格

採用時に大学院博士課程に在籍する者。博士課程に在籍する者が原則ですが, 意欲によって修士課程でも考慮します。また, 国立環境研究所では学位を出すことはできないため, 本制度における採用には大学の指導教官の同意と承諾が必要です。そのため, 応募に際しては指導教官の許可を前提とします。また, 受け入れ開始前に, 採用者 受け入れ研究者 指導教官で綿密な研究計画の立案を行います。

## 5. 選考方法

書類審査及び面接によって行います。面接時に必要な旅費は支給します。

## 6. 提出書類(様式自由)

- (1) 履歴書(写真添付, E-mail アドレス記載) 1部
- (2) 研究業績目録(論文, 口頭発表など) 1部
- (3) これまでの研究概要(A41枚程度) 1部
- (4) 希望する研究テーマと関連するテーマの立案を含んだ抱負(A41枚程度) 1部

- (5) 主要研究論文の別刷り 1部ずつ
- (6) 所見を求め得る方2名の氏名と連絡先 1部封筒等に朱書きで「大気反応研究室リサーチアシスタント応募書類」と明記すること。

7. 応募締切り

平成18年1月31日(火) 必着

8. 待遇

NIES リサーチアシスタント制度の規定に従います。

9. 採用予定時期

平成18年4月1日以降

10. 任用期間

1事業年度内(平成19年3月末まで。)ただし、研究計画と職務評価に応じて翌年度も再任可能。

11. 問合せ先及び書類提出先

[ 研究内容 ]

独立行政法人国立環境研究所

大気圏環境研究領域大気反応研究室

主任研究員 谷本浩志

Tel : 029 850 2930, E-mail : tanimoto@nies.go.jp

大気圏環境研究領域大気反応研究室

主任研究員 猪俣 敏

Tel : 029 850 2403, E-mail: ino@nies.go.jp

[ 書類提出先 ]

独立行政法人国立環境研究所総務部総務課

小島繁雄

〒305 8506 茨城県つくば市小野川16 2

## 第二回 SOLAS Summer School 参加報告

山岸洋明(国立環境研究所  
地球温暖化プロジェクト)

### 概要

2005年8月29日から9月10日の12日間、フランス・コルシカ島において第2回 SOLAS Summer School が開催された。日本からは、笹川基樹氏(北海道大学理学研究科/日本学術振興会、現コトレヒト大学)、吉江直樹氏(北海道大学地球環境科学研究所/学術研究員)、丹野賢二氏(京都大学工学研究科)、山岸洋明(国立環境研究所)の4名が参加した。またアメリカから篠塚陽平氏(ハワイ大学)が参加し、日本人の参加者は計5人となった。SOLASは、Surface Ocean-Lower Atmosphere Study の略であり、海洋表層と大気との間の自然起源物質および人為起源物質の循環過

程の解明を目指した国際的な研究の枠組みである。SCOR, IGBP, CACGP および WCRP の支援を受けた IGBP の重点プロジェクトである。また、大気 海洋間が SOLAS であるのに対して、同様に海洋 陸域間は LOICZ, 陸域 大気間は iLEAPS という枠組みが存在する。2000年2月20~24日、ドイツ、Damp において Open Science Meeting が開催され、その後定期的に Meeting が開催されている。今回は、2007年3月6~9日に中国のアモイ(Xiamen)にて SOLAS Science 2007が開催される予定である。SOLAS の研究目標は、「海洋 大気間において鍵となる生物化学的過程と物理過程との間の相互作用およびフィードバックを定量的に解明すること、またこの複雑な系がどのように気候および環境変動に影響を与え、また影響を受けているのかを定量的に解明すること」である。

今回のサマースクールには約200名の応募があり、その中から選ばれた約70名がスクールに参加した。参加者は、博士課程の学生が中心であり、ポスドクは2~3割程度だと思われた。参加者は、さまざまな国から集まり、中でもアメリカ、フランス、ドイツが最も多かった。一方日本人、中国人がそれぞれ5人参加し、アジアからの参加者も多く感じた。その他、イギリス、スペイン、イタリア、スイス、ベルギー、アイルランド、ノルウェー、カナダ、メキシコ、チリ、アルゼンチン、インド、スリランカ、韓国、モンゴル、クロアチアなど世界中から参加者が集まった。スクールは、コルシカ島西岸の Cargese (カージェース) という小さな町の外れに位置する Institut d'Etudes Scientifiques というセミナー施設で行われた。約2週間の間、学生の大半はアパートで共同生活をするか、あるいはセミナー施設の側でテント生活をし、スクールに通った。典型的な地中海性気候で、毎日からっとした晴天で、学ぶには最適な環境であった。

### 講義

講義は、大気化学、地球温暖化、炭素循環、海洋表層の循環、ガス交換、モデル、海洋化学、海洋生物、沿岸環境、データ同化、鉄サイクル、古環境、エアロゾル、DMS サイクル、リモートセンシングなど、多岐にわたった。前半の3日間は、朝9時から30分の質問時間も含めて1時間半の講義を4本受け、暗くなるまで、お酒を片手にポスターセッションを行った。その後、3日間の実習と1日の休日があり、後半の4日

間は、講義を1日3本行い、参加者全員が4分の口頭発表を行った。したがって、かなり中身の濃い密な内容になっている。

## 実習

実習は、海洋観測、ラボ実験、ガス交換の観測、モデル、口頭発表、論文執筆の6つである。この中から4つを選択し、グループに分かれて実習を行った。海洋観測では、Ajaccio (アジャクシオ) から海洋観測船に乗り、栄養塩および塩分濃度用の海水試料の採取、クロロフィル測定用のろ過作業、プランクトンネットによる植物および動物プランクトンの捕集を行った。ラボ実験ではこれらの試料を用いて、栄養塩および塩分濃度測定、プランクトンの観察、クロロフィル濃度の測定を行った。海洋観測とラボ実験とはセットになっており、クルーズレポートを共同で作成した。ガス交換の観測では、フラックスの計算に必要な風速を計測した。

モデルの実習では、2つのモデルを扱った。一つは、大気中二酸化炭素濃度の観測から各地域のフラックスを見積もるインバースモデル、もう一つは、Pailarda and Parrenin [2004] のミランコビッチサイクルを再現したボックスモデルであり、実際に Excel を用いて作製した。ミランコビッチサイクルのモデルは、非常に興味深いものであった。氷期から間氷期に切り替わる要因を考察し、南極氷床の広がりや南極海で形成される底層水の密度との関係についての新しい仮説を提唱したものであった。仮説は以下のようなものである。氷期には南極氷床が大きくなり、南極で密度の高い底層水が形成され、海洋が成層化し、大気中の二酸化炭素が海洋深層水中に固定される。さらに寒冷化が進み、南極氷床が大陸棚の縁まで成長すると逆に密度の高い底層水が形成できなくなり、海洋中の無機炭素が二酸化炭素として大気に放出される。この仮説に基づき、日射、南極氷床、二酸化炭素濃度など4つのパラメータを用いて、ボックスモデルを作成し、ミランコビッチサイクルの4.1万年周期から10万年周期への移行をよく再現している。このモデルの現在の値に、625 ppm の人為起源二酸化炭素をパルス状に加えるテスト (“What if” question) を行った。その結果は、二酸化炭素濃度が産業革命以前の濃度に戻るまでの約60万年間は、次の氷期は来ないというものであった。ハリウッド映画の “Day after tomorrow” のように温暖化が進むと氷期に切り替わるという展開に

はならないということが示唆された。大規模な観測やモデル、高価な分析装置が無くても、アイデアと Excel 上の計算だけで論文が書けるということは勇気付けられるものであった。

また、口頭発表および論文執筆の実習の中で Corinne Le Quéré 氏により口頭およびポスター発表についての具体的なアドバイスがあり、非常に役に立つものであった。例えば、ポスター発表では、7秒で通り過ぎる人、30秒で眺める人、2分間立ち止まる人、後で見たい人、それぞれに対して効果的に研究の内容を伝える方法を説いている。私は、これまで論文と同じ構成にするものと考えていたため、まさに「目から鱗」であった。7秒で通り過ぎる人のためには、内容の伝わるタイトルと最も重要な図やイラストを真ん中に置く。30秒で眺める人のためには、結論を上置き、文字は少なく速読できるように段組みする。図はシンプルにする。フォントは、ゴシックや Areal のような飾りの無い文字はタイトルや強調したいところに使用し、Times New Roman のような飾りのある文字は、楽に速く読めるため文章に使用するのが良いそうだ。2分間立ち止まる人のためには、自分の顔写真を入れ、30秒の説明で概要と最も伝えたいこと一つを伝えられるようにしておくこと、Method には詳細な技術的説明を加え、最も重要な結論および参考文献を記載すること、専門的な細かい Method や解析は一番下にすること、一人の人の人を長く捕まえすぎず、発表者も視聴者も多くの人と話す機会が持てるようにすることが大切だそうだ。後で見たい人のためには、ポスターの縮小版のプリントと関連する論文を置いておくのがいい。

口頭発表の実習では、全員が4分間のプレゼンをし、Le Quéré 氏による具体的で時には厳しい指導があり、また学生同士でのアドバイス交換をした。口頭発表の実習に参加した学生は、全体での発表の際にはみな見違えるように良くなっており、Le Quéré 氏の確かな指導には舌を巻くほかなかった。また発表には練習が不可欠であると述べ、Le Quéré 氏自身が発表やスピーチの準備に使っているノートを見せてくれた。例えば、AGU の発表でも3~4回は声を出して練習をし、30~40分のサマースクールの閉会のスピーチのためには、実に9ヶ月も前から原稿を作り、推敲を重ねて、10回は練習をしていたそうだ。彼女ほどの経験を積んだ研究者がそれだけの準備をしているのであれば、研究に携わってからまだ日が浅い自分は、そ

の何倍もの準備をする必要があるのだと反省し、肝に銘じたのであった。

#### 発表

参加した学生全員の発表で私が興味を持ったのは、オンラインで大気を分析する飛行時間型質量分析計 (TOFMS) の開発、高時間分解能なジメチルスルフィド (DMS) の測定法の開発、DMS の全球モデル、海洋垂表層からのメタン生成プロセスなどであった。また現在 SOLAS の研究領域で注目されていると感じたのは、ヨウ素のサイクル、溶存鉄の形態および配位子の役割、鉄の起源、海洋生物起源の微細な有機エアロゾル、泡などの海洋表面の物理過程がガス交換速度に与える影響、マイクロレーヤーのガス交換への役割などである。講演においては、例えば臭素による対流圏オゾンの消滅反応 (Bromine explosion) も興味深かった。

#### スクールの楽しみ

振り返ってみると、サマースクールは、講義や実習、口頭発表の練習、クルーズレポートの作成などに集中して取り組んだ充実した2週間であった。昼や講義の合間の休憩時間は、さまざまな学生や先生方と談笑し、午後の講義が始まる3時までの昼休みにはすぐ近くにあるビーチで海水浴を楽しみ、夜はさまざまな国から来た学生が集い2時間はかけてゆっくりと夕食を取った。そしてさまざまな国で、自分と同じように研究に取り組んでいる同世代の多くの友人ができた。日本人の参加者も、日本人ばなれした積極性でサマースクールをエンジョイしていた。会の様子は、参加者個人のサイト (下記参照) から垣間見ることができるので興味のある方はぜひ閲覧いただきたい。

#### 所感

今回のサマースクールは、2007年に開催される予定である。これまでの2回はコルシカ島で行われてきたが、次回開催される場所については未定である。このような地球環境に関する研究領域では、共同観測や地域的な分担が欠かせないため、国際的な研究の枠組みがさまざま存在している。今後ますます国境は関係なく研究者間の国際的な連携が欠かせないものになると思われる。サマースクールは、次の世代の研究者を育てるという思いを強く感じるものであった。Paul Crutzen氏は講演の際に、「19世紀初頭以降、Holo-

cene (完新世) から Anthropocene (人新生 [第四紀通信, Vol.9, No.4, 2002]) に変わりました。京都議定書 (2005) では対策として不十分であり、今後の気候変動に対する更なる対策が必要です。まず真実をすべて知ることが必要です。そうしなければ、地球温暖化に対して有効な対策は立てられません。」と述べた。Le Quéré氏は、「IPCC 2001の後、温室効果ガスによる地球温暖化が起きていることが科学的に明らかになり、次のIPCC 2007ではそのような証拠が数多く記載されることになります。20世紀後半から現在にかけて世界の人口は急激に増加しており、今、持続的発展が可能な社会に変える必要があります。急激に変わりつつある地球環境を科学的に知ることが、今後の政策の判断基準として不可欠です。君たちが、人類の未来にとって重要な役割を担っていくのです。」と熱く語り、サマースクールは締めくくられた。サマースクールを実施し、講義を行っているのは欧米の研究者であり、日本人はその恩恵にこれまで預かってきていますが、今後日本の研究者が欧米と肩を並べ、国際的に貢献していくことが必要であると感じました。学生の皆さんは、今後国際的に研究活動を展開していくことを目指し、ぜひさまざまなワークショップや国際会議などに積極的に参加し、研究者間の交流を深め、視野を広げていって欲しいと思います。

#### 謝辞

最後に渡航費の大部分を支援していただいた東京大学海洋研究所の植松光夫先生に感謝の意を表します。

#### リンク

SOLAS サマースクール, SOLAS プロジェクト, および日本 SOLAS の詳細は、下記のホームページをご参照ください。

SOLAS Summer School: <http://www.uea.ac.uk/env/solas/summerschool/>

SOLAS Project: <http://www.uea.ac.uk/env/solas/>

SOLAS Japan: <http://solas.jp/jp/>

Achim Falkenroth 氏の個人サイト (SOLAS Summer School 2005の写真を掲載中): <http://falkenroth.uni-hd.de/solasss/>

#### 参考文献

Paillard and Parrenin (2004) Earth and Planetary Science Letters 227, 263–271.

## ニュースへ記事やご意見をお寄せください

次号より，ニュース担当幹事が下記に変わります。今後とも従来と同様，皆様の情報・原稿をお待ちしています。地球化学に関連した研究集会，シンポジウムの案内，人材募集，書評，研究機関の紹介など何でも結構です。編集の都合上，電子メール，フロッピー（マックもしくは Dos/V いずれでも結構です）での原稿を歓迎いたしますので，ご協力の程よろしくお願いいたします。次号の発行は2006年3月頃を予定しています。ニュース原稿は1月中旬までにお送りいただくよう，お願いいたします。また，ホームページに関するご意見もお寄せください。

### 次号からの編集担当者

山本鋼志

〒464 8602 名古屋市千種区不老町  
名古屋大学大学院環境額研究科  
（理学部気付）

Tel/Fax : 052 789 2522

E-mail : news-info@geochem.jp

南 雅代

〒464 8601 名古屋市千種区不老町  
名古屋大学年代測定総合研究センター

Tel : 052 789 3091

E-mail : new-info@geochem.jp

### この号の編集担当者

米田成一

〒169 0073 東京都新宿区百人町3 23 1  
国立科学博物館理工学研究部

Tel : 03 3364 7142 , Fax : 03 3364 7104

E-mail : s-yoneda@kahaku.go.jp

高橋和也

〒351 0198 埼玉県和光市広沢2 1  
理化学研究所加速器基盤研究部

小林貴之（ホームページ）

〒156 8550 東京都世田谷区桜上水3 25 40  
日本大学文理学部

# 日本地球惑星科学 連合ニュース

No. 02

(2005年12月)

- [1] 日本地球惑星科学連合2006年大会のお知らせ
- [2] 文部科学省に提出した提言について
- [3] 日本学術会議の動向
- [4] 日本地球惑星科学連合の体制
- [5] 各議事録など

本号では連合2006年大会の内容とスケジュールについてお知らせします。また、文部科学省への教育提言および日本学術会議の動向についてご報告します。さらに、日本地球惑星科学連合の体制と議事録を掲載致します。

## [1] 日本地球惑星科学連合 2006年大会のお知らせ

日本地球惑星科学連合

今回は日本地球惑星科学連合が主催する最初の大会です。名称も「地球惑星科学関連学会合同大会」から「日本地球惑星科学連合大会」へ改称されます。また、日本地球惑星科学連合への加盟学会が32学会（2005年11月25日現在）にもなったことを反映し、新しい分野のセッションも開催されます。アウトリーチ活動の充実も含め、様々な側面により一層充実した大会を目指します。多くの皆様のご参加をお待ちしております。

\*\*\*\*\*

- 目次 -

- § 1 連合大会の概要（日程、費用、お問い合わせ先など）
- § 2 開催セッションのご案内
- § 3 各種登録について（変更・キャンセル他）
- § 4 その他大会からのお知らせ（展示・会合のお申込等）

\*\*\*\*\*

### § 1 連合大会の概要

- 会期：2006年5月14日（日）-18日（木）  
（5月14日 特別公開セッション）

- 会場：幕張メッセ 国際会議場

- 各種受付開始日・締切日

#### ■予稿集原稿投稿

2006/1/10(火) ~ 最終締切 2/8(水)12:00  
早期締切 2/1(水)17:00

#### ■事前参加登録

2006/1/10(火) ~ 4/10(月)12:00

#### ■公費でのお支払申込（取りまとめ公費払いの場合も）

2006/1/10(火) ~ 4/10(月)12:00

#### ■会合申込

2006/3/6(月) ~ 4/21(金)

\*\* お弁当申込 2006/4/25(火) ~ 4/28(金) 幕張メッセへ

- 各種料金：

予稿集原稿投稿		
早期投稿	2006/2/1 17:00 まで	1,500 円
通常投稿	2006/2/8 12:00 まで	3,000 円
図掲載	Web アップロード	500 円
	郵送	1,000 円

\*\* 投稿料金は、新規投稿を終えた時点でお支払いいただくことになりました。その後内容を変更されても料金は変わりません。

\*\* 図の掲載は希望者のみで、新規投稿料に加算されます。

#### 事前参加登録申込

全日程券	一般 13,000 円	学生 6,500 円
24 時間券	一般 7,000 円	学生 3,000 円

\*\* 最終締切以降の参加登録お申し込みは当日参加登録申込となります。事前申込は4月10日12:00までにお済ませ下さい。

#### 当日参加登録申込

全日程券	一般 15,000 円	学生 8,000 円
24 時間券	一般 8,000 円	学生 5,000 円

\*\* 学部生および70歳以上の方は、投稿の有無に関わらず参加登録が無料となります。

- 個人でのお支払方法：

個人によるお支払は、予稿集原稿投稿・事前参加登録と同時の、オンラインシステムによるクレジットカードでのお支払いです。（銀行振込・郵便振替はございません）

- 指定機関払：

「公費払」など登録者以外の方が支払う場合は、投稿・登録時の「決済方法登録画面」で「指定機関払登録」で、必要事項の入力を行って下さい。ホームページに入る前に、支払責任者（大会が

らの請求先)名、連絡先の確認をお願いします。ここで、ご入力いただいた内容で、後日請求書を送付します。

さらに、機関毎でまとめてお支払いをご希望の場合は、各会計取りまとめのご担当者に速やかにご連絡いただき、ご担当者より、連合事務局へお申し出下さい。ただしこの場合、手数料としてお一人につき2,000円追加して請求させていただきます。ご了承下さい。

#### ●請求書：

個人への請求書の送付はありません。請求書の必要な方は、4月10日までに事務局へご連絡ください。

請求書は、2月、3月、4月各月末締切、翌月中旬送付になります。

#### ●領収書：

クレジットカードによるお支払い手続きを終了された方へは、大会1週間前までにプログラム等と一緒に送付いたします。領収書の日付は、大会開催日になります。

#### ●大会ホームページ：

2006年連合大会に関する情報および各種登録ページが置かれています。

\*\*\*\*\*  
連合大会ホームページ  
<http://www.jpгу.org/meeting/>  
\*\*\*\*\*

詳しくは上記のホームページを是非ご覧下さい。変更内容の情報は随時更新します。

#### ●お問い合わせ先：

- ①各種登録システムサポート sys2006@jpгу.org  
「登録ページにアクセスできない」「文字入力ができない」  
「確認メールが来ない」etc...
- ②個人情報登録・参加登録 reg@jpгу.org  
「ID&パスワード照会」「ID削除したいとき」  
「参加登録変更、取消(要受付期間確認)」etc...
- ③セッション・予稿集原稿投稿 abs2006@jpгу.org  
(但し、システムサポートは①)
- ④会合の申込 meet2006@jpгу.org

#### ■上記以外大会全般■：

(特別公開セッション、展示、予稿集バックナンバー請求等)

##### 日本地球惑星科学連合 事務局

〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1

東京大学理学部1号館719号室

Email: office@jpгу.org Fax: 03-5841-1364

## §2 開催セッションのご案内

2006年連合大会では、以下のセッション(企画中を含む)が開催されることになりました。各セッションの詳細についてのお問合せは連合大会ホームページ上に掲載している「セッション一覧」をご参照ください。

#### ●ご投稿者の皆様へ -投稿受付期間について-

講演要旨の投稿は2006/1/10~2/8の期間中に大会ホームページ上にて行って下さい。

例年に比べ、投稿受付期間が大変短くなっておりまして、ご注意ください。早期投稿にご協力をお願いするとともに、多くのご投稿をお待ちしております。

#### ●コンピーナの皆様へ -プログラム編集作業について-

大会プログラム編集作業は、投稿受付締切後、全投稿講演要旨の確認を経て、2月中旬から3月初旬に集中的に行われます。セッション開催日程を含めコマの割り当て、セッション内の時間割などを決定する大切な作業をお願いすることになります。この期間中は、代表コンピーナご本人(もしくは代理の方)の連絡先を明確にし、必ず連絡が取れるようにして下さい。なお、代表コンピーナの方以外の代理をたてる場合は、代理の方の連絡先をプログラム委員会(2006pcam@jpгу.org)まで、予めお知らせ下さい。

#### ●インターナショナル・セッションについて

インターナショナルセッションでは、アブストラクト、口頭発表およびポスター資料において原則として英語を使用します。但し、ポスター資料には英文に加えて和文を併記することも可とします。海外からの参加や国内外外国人の参加を歓迎します。(一覧の★印)

#### ●物理・天文・地球惑星 合同プラズマ科学シンポジウムについて

第2回物理学会、天文学会、SGEPSSの3学会が合同で行うプラズマ科学シンポジウムが連合大会にて、ユニオンセッションとして開催されます。連合大会で行う利点を活かし、分野横断的な8テーマを設定し、Inter-Societyな研究交流の場を提供します。上記3学会に限らず、プラズマ科学に興味をお持ち皆様のご参加を歓迎致します。

## ■ 開催セッション一覧 ■

#### ●特別公開セッション：(4セッション)

大会初日の5月14日(日)には、中・高校生、一般の方を対象に、以下のようなセッションを企画しております。詳細は大会ホームページ、プログラムに掲載いたします。また一般向けのポスターを作成し関係機関に広く配布する予定です。ご不明な点などは、事務局までお問合せください。

- ・ 地球・惑星科学トップセミナー
- ・ 高校生によるポスター発表もしくは討論会(仮称)
- ・ 21世紀のフロンティア：宇宙・惑星・生命(仮称)

[テーマ：はやぶさ、火星、月探査、アストロバイオロジー]

- 日本地球惑星科学連合の学校教育への取り組み（仮称）

セッション開催日：2006/5/14（日）

参加費：無料

参加申込・お問合せ：日本地球惑星科学連合事務局

### ●ユニオンセッション：(4セッション)

- 物理探査のフロンティア
- 地上および宇宙での閉鎖生態系生命維持システムの開発
- JAXA(宇宙航空研究開発機構)における宇宙科学
- ★物理・天文・地球惑星 合同プラズマ科学シンポジウム

### ●レギュラー・スペシャルセッション：(104セッション)

#### V 火山学

- 活動的火山
- マグマシステムと噴火・堆積機構
- 火山爆発のダイナミクス

#### K 岩石・鉱物学

- 鉱物の物理・化学
- 岩石・鉱物・資源
- オフィオライトと海洋リソスフェア
- 高強度パルス中性子線による地球惑星科学の新展開

#### O 計測・探査技術

- 物理探査学及びその応用
- 空中地球観測の強化とその応用

#### S 地震学

- 活断層と古地震
- 地震に伴う諸現象
- 地震発生の物理
- 地震活動
- 強震動・地震災害
- 地震の理論・解析法
- 地震計測・処理システム
- 地震予知
- 地震一般
- 地盤構造・地盤震動
- 震源過程・震源機構
- 地殻構造
- 陸域震源断層の深部すべり過程のモデル化
- 震源モデルと強震動
- フロンティア地震学の最前線
- 故安芸敬一博士が拓いた地震学・火山学とその未来像
- 地殻活動のマッピングとモニタリング
- 連動型巨大地震の発生様式と長期予測
- プロセス検証による地震予知 一経験則から物理モデルへ
- 地震波伝播：理論と応用

#### H 水文・陸水・地下水学

- 水循環・水環境
- 同位体水文学 2006
- 都市域の地下水・環境地質

#### W 雪氷学

- 雪氷学
- 雪氷圏と気候
- コア研究が拓く地球環境変動史

#### D 測地学

- 重力・ジオイド
- 測地学一般
- 地殻変動
- GPS

#### Q 第四紀学

- 第四紀
- 沖積層研究の新展開

#### C 地球化学

- 固体地球化学・惑星化学

#### L 地球環境・気候変動学

- 古気候・古海洋変動
- 海と気候一観測とモデルによる過去から現代までの

変動解明へのアプローチ

- 地球温暖化防止のための地球惑星科学
- 生物鉱化作用とその間接指標を利用した低緯度域の環境変動解析

#### B 地球生命科学

- 生命-水-鉱物相互作用の場地的実態
- アストロバイオロジー：宇宙における生命の起源・進化・分布と未来
- 地球生命史
- 地球環境と生物の相互作用
- 地殻内生物圏の化学環境と微生物生態系の多様性

#### E 地球電磁気学

- 太陽圏・惑星間空間
- 宇宙天気
- 宇宙プラズマ理論・シミュレーション
- 地磁気・古地磁気
- 磁気圏-電離圏結合
- 電気伝導度・地殻活動電磁気学
- 電離圏・熱圏
- 磁気圏構造とダイナミクス
- 大気圏・熱圏下部および大気化学
- ★地震・地殻活動に伴う電磁気現象

★地球磁場研究の新展開：ダイナモ、古地磁気、岩石磁気

#### I 地球内部科学

- 地球構成物質のレオロジーと物質移動
- 地球深部ダイナミクス：プレート・マントル・核の相互作用
- ★地球深部スラブ

#### M 地球惑星圏学

- ★隕石・惑星間物質の磁場と太陽系形成過程
- 惑星大気圏・電磁圏

#### T 地球惑星テクトニクス・ダイナミクス

- テクトニクス
- 地下温度構造・熱過程
- フィリピン周辺の地震テクトニクス
- 地震学と構造地質学における応力逆解析手法とその活用

#### G 地質学

- 地域地質と構造発達史
- 長期火成活動と火山発達史
- 堆積物・堆積岩から読みとる地球表層環境情報
- 放射性廃棄物処分と地球科学
- 変形岩・変成岩とテクトニクス
- 地球年代学・年代層序学
- 実験で探る地形と地層のダイナミクス
- 堆積物から紐解く自然災害
- ガスハイドレートとメタンブリュームはどこまで分かったか？

#### Y 防災・応用地球科学

- 地質ハザード
- 応用地質における環境問題への対応

#### P 惑星科学

- 「はやぶさ」の成果と今後の小天体研究
- 我々はディーブインパクト探査から何を学んだか？
- カウントダウン月探査
- 惑星科学
- 宇宙惑星における固体物質の形成と進化
- 火星の科学と将来探査

#### Z その他

- 地形
- 環境リモートセンシング
- GIS
- 対流圏から熱圏までの大気電気現象

#### J ジョイント

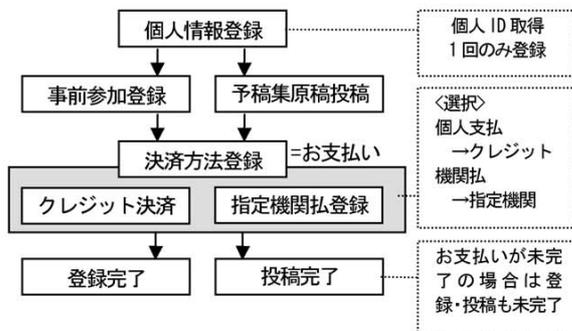
- 地球惑星システム科学
- 海洋底地球科学
- 巨大地震発生帯の科学
- 西太平洋海域の発達過程
- 映像でみる地球惑星科学
- キッチン地球科学

- ・火山活動や沈み込み過程に伴う低周波振動現象
- ・地球流体力学：地球惑星現象への分野横断的アプローチ
- ・情報地球惑星科学
- ・陸域の生物地球化学
- ★断層帯のレオロジーと地震の発生過程
- ・地球惑星科学の教育とアウトリーチ (旧地学教育)
- ★…国際セッション

### § 3 各種登録について (変更・取消他)

連合大会ではまず最初に①『個人情報登録』によって、ID番号を取得していただいております。その後で②～⑤の登録を必要に応じて行って下さい。

- ①個人情報登録
- ②参加登録 (事前申込)
- ③予稿集原稿投稿 (講演申込)
- ④オンラインクレジットカード支払登録 (指定機関払登録)



#### § 3.1 個人情報登録

連合大会への参加するための各種登録や、日本地球惑星科学連合からのお知らせを受取るためには、個人情報登録が必要です。登録は無料ですので、大会ホームページの『個人情報登録』にてご登録下さい。

●ご登録後は、以下が可能になります。

- ・個人情報登録 ID の発行
- ・ニュースレター (JGL) の送付 (年 4 回)
- ・お知らせなどメールによる連絡
- ・連合大会の参加手続きの簡略化

●連合大会において、以下の場合は、個人情報登録によって発行される個人 ID が全員必要です。

- ・発表者
- ・予稿の著者および共著者
- ・参加者
- ・セッションコーディネーター (代表/共同)
- ・セッションの座長

\*\* ただし、既に登録済みで、ID番号をお持ちの方は再度行う必要はありません。

\*\* 転勤・卒業等で住所変更が生じた場合も、ホームページ上

の「個人情報登録」にて、所属・住所変更を行って下さい。

\*\* 今後、ニュースレターJGL、大会プログラム、予稿集 CD-ROM など送付は、送付物お届け先 (〒番号、住所) と氏名になります。送付物お届け先住所は、住所のみでなく、具体的なお届け先機関名、建物名、部屋名など確実に受け取り可能な内容のご入力をお願いいたします。

<< 個人情報登録のために必要な情報 >>

- ・氏名 (漢字、カタカナ、英語) 姓と名別々に
- ・E-mail アドレス
- ・所属学会 (複数選択式)
- ・所属機関名 (漢字、カタカナ、英語)
- ・所属機関名略称 (漢字、英語) (表示用)
- ・送付物お届け先 (〒番号、住所) → そのまま送付ラベル
- ・昼間連絡がとれる連絡先電話番号
- ・身分 (学生、一般 選択式)

#### § 3.2 参加登録 (事前申込：4月10日 12:00 締切)

●当日ご来場される方 (発表者、座長、聴講・見学のみの方) は、②「参加登録」が必要です。大会当日会場へご入場の際には、参加登録後郵送される名札をご着用していただけます。事前申込は当日申込 (当日登録) より料金がお安くなっていますので、お勧めいたします。

ただし、会合のみに出られる方は参加登録の必要はありません。総合受付で会合用の名札を受け取り、ご着用をお願いします。

#### § 3.3 予稿集原稿投稿 (申込：2月8日 12:00 最終締切)

●予稿集原稿投稿される方は①、②に加えて③を行って下さい。共著者も①『個人情報登録』の ID 番号が必要ですのでご注意ください。当日発表のみされる方は②『参加登録』が必要です。

#### § 3.4 オンラインクレジットカード支払登録

●お支払いは、予稿集原稿投稿・事前参加登録と同時にオンラインシステムによるクレジットカード (VISA, MASTER, ダイナース, JCB, AMEX) でお願いしております。

#### § 3.5 変更・キャンセルについて

●予稿集原稿投稿

2006/2/8 (水) 正午 12:00 まで	変更	○	各自 HP より行って下さい
	取消		
上記以降	変更	×	料金の返金はできません
	取消		

●事前参加登録

2006/4/10 (月) 正午 12:00 まで	変更**	○	取消後、再登録して下さい 事務局までご連絡下さい
	取消		
上記以降	変更	×	料金の返金はできません
	取消		

\*\* 変更を希望される場合は事務局へご連絡をお願いします。参

加登録の取消は、WEB 上では出来ません。事務局での取消作業完了の通知がありましたら、再登録をお願い致します。

連絡方法：Email 又はFAX

連絡先： Email:reg@jpgu.org FAX:03-5841-1364

(ご連絡時は個人情報 ID 番号もお知らせ下さい。)

## § 4 大会運営委員会からのお知らせ

### § 4. 1 大会当日の受付時間について

大会期間中の受付時間、場所は以下の通りに開設予定です。

#### ■ 総合受付・当日登録受付 ■

5/14 (日) ~18 (木) AM 8:00~PM 5:00

1F エントランス正面、デスクおよびカウンター

### § 4. 2 会場での名札着用をお願い

健全な財政を維持するために、以下の事をお願い致します。

- (1) 事前お申込の方は、大会前に送付された名札を忘れずに会場へご持参下さい。
- (2) 当日お申込の方は、まず当日登録受付にお立ち寄りになり精算を済ませた上で名札を受け取って参加してください
- (3) 名札を着用せずに会場に入られた方には理由をお伺いします。

### § 4. 3 団体展示・書籍出版・関連商品販売展示

連合大会では、2F中央ロビー及びホワイエにて、研究団体・企業・出版社などによる研究紹介・書籍・機器などの展示ブースを設けております。21世紀COEプログラム拠点大学の展示もごさいます。様々な形でご利用頂き、有効な情報交換の場としてご活用ください。ご利用希望の方は、事務局へご連絡下さい。詳細(申し込み要綱)をご案内します。なお、お申し込みは定員に達し次第締め切ります。スペースに限りがございますので、お早めにお申し込み下さい。詳細は、大会ホームページの「各種おしらせ」をご覧ください。

### § 4. 4 連合大会会場における会合申込み

会合・集会を行う団体の部屋使用希望の申し込みは、プログラム日程決定後下記の通り、先着順で受付しますのでお早めにお申込下さい。会場内の部屋数に限りがございますので、満室になった場合はできる限り会場周辺の会議施設をご紹介させていただきますが、やむを得ずご希望に添えない場合があります。ご了承ください。

なお、部屋使用料、お弁当等の詳細はホームページの「会合のお申込み」をご覧ください。

#### ■ お申し込み受付 ■

2006/3/6 (月) - 4/21 (金)

#### ■ お申し込み先 ■

2006年連合大会会合係(E-mail: meet2006@jpgu.org)

#### ■ お申し込み内容 ■

- 1) 会合名称

- 2) 申込み責任者とそのメールアドレス

- 3) 利用人数

- 4) 希望する時間(開始・終了時刻)

なお、会合時のお弁当のお申込は、会合受付終了後、4/25 (火) ~4/28 (金) 幕張メッセお弁当受付担当へ直接ご発注下さい。

### § 4. 5 保育希望の方へ

合同大会に引き続き、連合大会におきましても、保育をご希望されます方へ、会場に隣接する千葉市認定保育施設をご紹介します。保育室の利用につきましては日本地球惑星科学連合より金銭的補助をいたします。詳しくは大会ホームページ「各種お知らせ」にてご確認ください。

### § 4. 6 日本地球惑星科学連合2006年大会運営組織

大会運営委員長 津田敏隆(京都大学生存圏研究所)

副委員長 高橋幸弘(東北大学)

事務局長 岩上直幹(東京大学)

#### ■ プログラム委員会

委員長 北和之(茨城大学)

副委員長 篠原育(宇宙航空研究開発機構)

〃 古村孝志(東京大学地震研究所)

#### ■ 情報局

局長 武井康子(東京大学地震研究所)

副局長 綿田辰吾(東京大学地震研究所)

〃 中川茂樹(東京大学地震研究所)

#### ■ 大会運営委員会委員

石橋純一郎(九州大学)、岩森光(東京大学)、大野希一(日本大学)、小野高幸(東北大学)、加藤泰浩(東京大学)、竹内希(東京大学地震研究所)、田中智(宇宙航空研究開発機構)、坪井誠司(海洋研究開発機構)、安原正也(産業技術総合研究所)、横川美和(大阪工業大学)、吉田尚弘(東京工業大学)、脇田浩二(産業技術総合研究所)

#### ■ 学会選出プログラム委員 正・副 2006pcom@jpgu.org

##### \* 日本火山学会

大野希一(日本大学)、下司信夫(産業技術総合研究所)

##### \* 日本岩石鉱物鉱床学会

角替敏昭(筑波大学)、榎並正樹(名古屋大学)

##### \* 日本鉱物学会

小暮敏博(東京大学)、三河内岳(東京大学)

##### \* 資源地質学会

加藤泰浩(東京大学)、関 陽児(産業技術総合研究所)

##### \* 日本地震学会

青木 元(仙台管区気象台)、馬場俊孝(海洋研究開発機構)

##### \* 日本水文科学学会

鈴木啓助(信州大学)、安原正也(産業技術総合研究所)

##### \* 日本雪氷学会

西尾文彦(千葉大学)

##### \* 日本測地学会

- 加藤照之（東京大学地震研究所），大坪俊通（情報通信研究機構）
- \* 日本堆積学会
  - 角和善隆（東京大学），七山 太（産業技術総合研究所）
  - \* 日本第四紀学会
  - 奥村晃史（広島大学）
  - \* 日本地下水学会
  - 嶋田 純（熊本大学），山中 勤（筑波大学）
  - \* 日本地球化学会
  - 鈴木勝彦（海洋研究開発機構），角皆 潤（北海道大学），  
下田 玄（産業技術総合研究所）
  - \* 地球電磁気・地球惑星圏学会
  - 河野英昭（九州大学），清水久芳（東京大学地震研究所）
  - \* 日本地質学会
  - 七山 太（産業技術総合研究所），片山 肇（産業技術総合研究所）
  - \* 日本惑星科学会
  - 小高正嗣（北海道大学），生駒大洋（東京工業大学）
- (以上学会五十音順敬称略)

## [2] 文部科学省に提出した提言について

－ 高校必修科目「教養理科(仮称)」の作成趣旨とその後 －  
教育問題検討委員会 委員長 阿部国広，同副委員長 根本泰雄，  
同委員会教育課程小委員会\*

### はじめに

1989年3月告示の高等学校学習指導要領では「理科I」が無く  
なり，高校生が物理・化学・生物・地学の全内容を学ぶ機会がほ  
んど無くなった。また，1999年3月告示の現行の高等学校学習  
指導要領でも，物理・化学・生物・地学の全ての内容を学ばなく  
てよい状況が続いている。現行の学習指導要領の分量・学習内容  
に対して学力低下論争が生じていることは報道等にて周知の通り  
であるが，選択科目の選び方に拠る学習内容の偏りから生じる学  
力低下を論じている論争は少ない（根本，2005）。こうした状況  
を受け，地球惑星科学関連学会合同大会連絡会の下部組織として  
2003年に設けられた「地学教育」委員会では2005年1月から教  
育課程を検討することとなり，その活動は日本地球惑星科学連合  
教育問題検討委員会教育課程小委員会での日本地球惑星科学連合  
から見た初等中等教育におけるあるべき理科教育課程作りへと引  
き継がれている。

### 高等学校学習指導要領における「理科」履修方法

後期中等教育課程（高等学校および中等学校の後半；以下，高  
校と記す）での現在の「理科」履修方法は次の通りである（文部  
省，1999）。必修教科・科目として，「理科」は，

理科のうち「理科基礎」，「理科総合A」，「理科総合B」，「物  
理I」，「化学I」，「生物I」及び「地学I」のうちから2科目  
（「理科基礎」，「理科総合A」及び「理科総合B」のうちから1  
科目以上を含むものとする。）

とされている。

注1：「理科基礎」，「理科総合A」，「理科総合B」は2単位，他の科目は  
3単位であり（高等学校での1単位は，50分×35週），「理科総合A」  
は主としてエネルギーと物質の成り立ちを中心として取り扱う（科  
目名でいうなら，物理，化学が中心），「理科総合B」は主として生  
物とそれを取り巻く環境を中心として取り扱う（科目名でいうなら，  
生物，地学が中心）。必修の最低単位数は4単位である。

注2：Iを学んだ後に学ぶこととして，「物理II」，「化学II」，  
「地学II」がそれぞれ3単位科目として提供されている。

### 提言作成の趣旨と現在の取り組み

この履修方法では，「理科」に関わり教授される内容が偏るこ  
とが危惧され，実際の開設状況調査によっても開設状況に偏りが  
生じていることが裏付けられている（山村・荒牧，2005）。特に，  
「地学I」の開設率は非常に低い（開設率は全校中の約34%であり，  
開設していても開設校の全高校生が履修している訳ではない）。こ  
の現状を憂慮して，高校で必修として科目間の偏りなく「理系・  
文系を問わず地球人として全ての人が身に付けるべき必要最小限  
の科学リテラシーをすべての高校生が身に付けられる」ための科  
目「教養理科(仮称)」(表1)の新設を2005年7月29日に文部  
科学省へ提言として浜野洋三代表，阿部委員長，根本副委員長の  
3名が特参説明の上で提出した。同日夕刻，記者発表も実施し，  
共同通信社のHPに同日記事として掲載された。また，共同通信社  
配信として上毛新聞や河北新報等のいくつかの新聞でも翌日以降  
に取り上げられ，8月16日付け朝日新聞夕刊の科学面でも報じら  
れた。さらに，物理や化学，生物に関係する学協会でも日本地球  
惑星科学連合が出した提言として紹介されるなど，関係各方面へ  
波紋を投げかけている。

表1 高等学校教科「理科」で全員必修とすべき新設科目(4単位)  
にて取り扱う項目に関する提案内容

(提案する) 科目名： 教養理科

大項目	中項目	中項目に含まれる小項目 もしくはキーワードの例
自然の探究	地球人としての科学リテラシー	
宇宙の構成	宇宙の誕生と進化	時間と空間のスケール，構造と進 化，太陽系，核融合，など
	元素の誕生	原子の構造，周期表，原子・分子とイ オン，放射性元素，など
	力とエネルギー	運動の表し方，仕事とエネルギー， 重力と万有引力，運動方程式，など
地球と生命	地球の誕生	内部構造，構成物質，大気，海，など
	地球と生命の共進化	生命の誕生，生物の進化と絶滅，光 合成とオゾン層，人類の誕生，など
物質の変化と循環	生命のしくみ	細胞の働きとエネルギー，遺伝子と DNA，生殖，個体発生と系統発生，な ど
	物質の変化	電子配置と化学結合，化学反応式， 中和反応，酸化還元，など
	物質の循環	状態変化，水の循環，炭素循環，窒 素循環，など
活動する地球	地球の資源	物質の濃集，エネルギー資源，鉱 床，非金属資源，など
	変動の記録	地形の形成，地層の形成，気候変 動，自然景観，など
自然との共生	プレートと地震・火山	プレートテクトニクス，日本列島，火山 活動，地震活動，など
	海洋と大気	太陽放射，地球の熱収支，海洋と大 気の相互作用，気象，など
	生物の多様性と環境	生態系，環境と生物分布，極限環境 の生物，絶滅危惧種，など
	環境問題	地球温暖化，環境ホルモン，環境汚 染，オゾン層破壊，など
課題研究	自然の恵みと災害	自然災害，ハザードマップ，洪水と平 野の形成，火山と資源，など
	科学と社会の関わり	科学と技術，自然と社会のバランス， 循環型社会，科学リテラシーと防災，
	課題の選び方	
	探究の方法	
	まとめと発表	

平成 17 年 12 月現在、教育課程小委員会では、この科目を学ぶため中学校卒業までに学習すべき小学校および中学校「理科」の項目検討と、高校 2 年以降に履修する「理科」の科目のうち、地球惑星科学に関連した内容として相応しい項目は何であるのかの検討を行っている。皆様のさらなるご協力、ご理解を得られれば幸いです。

- 参考文献 -

朝日新聞(2005)「「必修理科」巡り議論」8月16日夕刊 科学面。  
文部省(1999) 高等学校学習指導要領。  
根本泰雄(2005) 第3回大阪市立大学FD研究会講演要旨。  
日本地球惑星科学連合(2005)  
[http://www.jpgu.org/education/20050729\\_doc.html](http://www.jpgu.org/education/20050729_doc.html)。  
山村滋, 荒牧草平(2005) 科研費(基盤(A)(1)課題番号15203031)  
平成16年度中間報告, 1-12。

\* 教育課程小委員会委員  
委員長 宮嶋 敏(地学教育),  
副委員長 瀧上 豊(地球化学), 山下 敏(惑星科学),  
委員 相原延光(顧問・火山), 佐藤毅彦(顧問・惑星科学),  
阿部国広(地質), 芝川明義(地質), 天野和孝(古生物),  
畠山正恒(気象), 坪田幸政(気象), 間々田和彦(海洋),  
鈴木文二(惑星科学), 中井仁(SGEPSS), 大村善治(SGEPSS),  
野坂 徹(SGEPSS), 林 武広(地学教育), 林信太郎(火山),  
吉本充宏(火山), 南島正重(地震), 根本泰雄(地震)

### [3] 日本学術会議の動向

\* 新生日本学術会議についての発足の経緯、及び第20期会員の紹介は、日本地球惑星科学連合ニュースレター(JGL)2005 No.2(11/1付発行)に掲載しております。是非ご参照ください。

#### 学術会議だより(2005年11月30日)

**地球惑星科学委員会 幹事 永原 裕子**  
新しい学術会議が発足して2ヶ月。組織もなく、会員のほとんどはこれまで会員の経験もなく、なにをどうすべきか手探りの中、少しずつその形ができ、またなにをなすべきかがわかり始めている。一方、これまでの研連は廃止され、国際対応や国内研究連絡などをどのように継続するのかなど、依然不明なところも多い。国際対応、分科会、連携会員など、国内の研究者の多くが、学術会議はなにをやるのか、今後どうなるのか、という疑問をもたれていると思われるので、これまでの経過を簡単に紹介しておくのは有効なことと思われる。

#### 新しい日本学術会議の役割

新しい学術会議は、アカデミーとしての役割を果たすことが最大の課題である。その具体的内容は、政策提言、科学者ネットワークの構築、科学者間の認識の共有および合意形成、社会への発信、国際活動といわれている。すなわち、これまでは研連を通じた国際活動およびそれに対応する国内委員会など、研究者間の活動が最も中心的な活動であったが、これからは、むしろ政策提言や社会への発言など、学術会議から外に向けた活動が主な活動であるというこ

とである。

#### 分野別委員会としての地球惑星科学委員会の活動

地球惑星科学委員会では、まず、この委員会の役割を議論することとした。第1回地球惑星科学委員会においては、もっとも大切なことは、今後の地球惑星科学のあり方に関する提言書の作成ではないか、ということ意見の一致をみている。その作成のためには1-2年という時間が必要であろう。提言書の内容は、地球惑星科学の将来展望、学術会議の地球惑星科学委員会の活動の方針、などをふくむべきであろう。

#### 地球惑星科学委員会の下の分科会

地球惑星科学委員会の下にいくつかの分科会を設けることになる。分科会をどのように作るかについては、上記の役割をになうにふさわしい形とすることが必要である。当初、地球惑星科学分野の5人の会員は、国際対応に適切なものとして、従来の研連を近い分野でまとめることができるものとして、地球物理、地質、地理、総合あるいは新規、という区分けを考えたが、活動内容が国際対応中心でないことが判明した以上、再検討が必要であるという認識こいた。今後、それぞれの会員が任務とそれを遂行するにふさわしい分科会のありかた、という形で意見を提出し、議論の上決定することにした。ただし、いつまでにその合意を形成するかについてはまだ明確にはなっていない。

分科会は会員と連携会員から構成される。それぞれの分科会が必要とする場合は、会員、連携会員以外のかたに委員として会議に参加いただけるようにする。その場合連携会員ではない委員とする。→ これについては現在のところ可能性を検討中。

#### 国際対応

国際対応のため、国際委員会(横断的な委員会)の下に、国際学術団体分科会が作られている。全部で47の分科会と、6つの国際共同計画がある。これらのほとんどは、国際委員会にはその枠だけがあり、実際の活動は個々の分野別委員会にまかされている。地球惑星科学の場合、11の国際委員会ならびに5つの国際計画に対応することになる。

地球惑星科学委員会のなかの分科会が設立されるまでの間、当面の窓口として、7名の委員が分担してそれらの分科会に責任をもつこととした(下記参照)。

#### 連携会員

新学術会議は会員210名と連携会員約2000名から構成される。連携会員は科学者コミュニティの代表として学術会議がおこなう活動にふさわしい人であり、幅広い見識の持ち主が望ましい。そのため、連携会員には年齢制限はなく、年齢が高くても、社会に対する影響力を持つようなかたには積極的に関わっていただく(ただし、選出されたときに70歳をこえている場合は、再任はない)。たとえば、ノーベル賞あるいはそれに準ずるような賞の受賞者は連携会員となつていただき、社会から学術会議が見えやすいものとなる役割を果たしていただくことになる。一方、若くアクティブに活躍されて

いるかたは、研究者の間のリーダーシップをとっていただくなどの役割を果たしていただく。このように、連携会員は会員より広い視点で選出される。

連携会員は会員と同等の権利をもち、会員・連携会員の推薦の権利をもつ。

会員は任期が終了したあとは、連携会員として学術会議の活動を支える。

#### 選考方法

今期の連携会員は、おそらく2回の選出により決定される。第1回目の連携会員選出は、年内に推薦、年末一年明けに選出され、2月末、おそくとも3月までに発令される。第1回目に連携会員となったかたは、会員とともに、2回目以降の連携会員推薦の資格をもつ。

第1回目の推薦にあたっては、会員1人が5名までの推薦をおこなう。推薦されたかたのうち、約半数程度が選考委員会で決定される。ただし、今回選出されなかった方も、名簿には6年間残り、引き続きおこなわれる第2回目以降において選出されることは十分考えられる。

当面の活動のため、19期までの国際対応窓口になっておられた方には、事務局からアンケートが配布され、国際委員会の役員をしていることの確認、本人の同意があった場合は、臨時連携会員委嘱願いが送付されている。その任期は来年3月までである。それらのかたを正規の連携会員に推薦するためには、今回改めて推薦が必要である。

#### 当面の対応

地球惑星科学委員会では、当面の対応として、国際対応については、上述のように担当委員を通じて、それ以外のことについては、委員会全体で対応することとした。

もし学会、個人を問わず、学術会議になんらかの協力要請などを求める場合は、国際対応問題であれば担当委員に、そのほかのことであれば、7名の委員のだれかに連絡をいただければ、委員会として相談し、適切な対応をさせていただきます。

#### 地球惑星科学委員会に属する会員連絡先

入倉孝次郎(委員長)([irikura@geor.or.jp](mailto:irikura@geor.or.jp))、碓井照子([usuit@js8.so-net.ne.jp](mailto:usuit@js8.so-net.ne.jp))、海部宣男([kaifu@nao.ac.jp](mailto:kaifu@nao.ac.jp))、河野長([mkono@eskiyolcu.com](mailto:mkono@eskiyolcu.com))、岡部篤行([atsu@ua.tu-tokyo.ac.jp](mailto:atsu@ua.tu-tokyo.ac.jp))、平朝彦([ataira@jamstec.go.jp](mailto:ataira@jamstec.go.jp))、永原裕子([hiroko@eps.s.u-tokyo.ac.jp](mailto:hiroko@eps.s.u-tokyo.ac.jp))(幹事)

#### 国際対応当面の窓口

SCOR	海洋研究科学委員会	平
IUGS	国際地質科学連合	平
IMA	国際鉱物連合	永原
INQUA	国際第四紀学連合	碓井
IGU	国際地理学連合	岡部
ICA	国際地図学協会	岡部
IUGG	国際測地学及び地球物理学連合	河野

SCOSTEP	太陽地球系物理学・科学委員会	河野
COSPAR	宇宙空間研究委員会	海部
SCAR	南極研究科学委員会	入倉
IASC	国際北極科学委員会	入倉
IGBP	地球圏一生物圏国際共同研究計画	碓井
IGCP	地質科学国際研究計画	平
ILP	国際リソスフェア計画	入倉
STPP	太陽地球系物理学国際共同研究計画	河野
WCRP	気候変動国際共同研究計画	平

## [4] 日本地球惑星科学連合の体制

### << 評議会 >>

浅島 誠	(日本宇宙生物科学会 会長)
井上大榮	(日本応用地質学会 会長)
今脇資郎	(日本海洋学会 会長)
渡辺秀文	(日本火山学会 会長)
小畑正明	(日本岩石鉱物鉱床学会 会長)
廣田 勇	(日本気象学会 理事長)
藤野清志	(日本鉱物学会 会長)
中村和郎	(日本国際地図学会 会長)
北里 洋	(日本古生物学会 会長)
鹿園直建	(資源地質学会 会長)
大竹政和	(日本地震学会 会長)
塩野清治	(日本情報地質学会 会長)
森 和紀	(日本水文科学会 会長)
池淵周一	(水文・水資源学会 会長)
前 晋爾	(日本雪氷学会 会長)
竹本修三	(日本測地学会 会長)
松本 良	(日本堆積学会 会長)
町田 洋	(日本第四紀学会 会長)
下野 洋	(日本地学教育学会 会長)
西垣誠	(日本地下水学会 会長)
田中 剛	(日本地球化学会 会長)
本蔵義守	(地球電磁気・地球惑星圏学会 会長)
柏谷健二	(日本地形学連合 会長)
斎藤靖二	(日本地質学会 会長)
岩田修二	(日本地理学会 理事長)
山村悦夫	(地理情報システム学会 会長)
前島郁雄	(東京地学協会 会長)
渡辺 隆	(日本粘土学会 会長)
牛島恵輔	(物理探査学会 会長)
小倉紀雄	(日本陸水学会 会長)
岡本謙一	(日本リモートセンシング学会 会長)
向井 正	(日本惑星科学会 会長)
入倉孝次郎	(日本学術会議会員)
岡部篤行	(日本学術会議会員)
河野 長	(日本学術会議会員)
平 朝彦	(日本学術会議会員)

永原裕子 (日本学術会議会員)  
浜野洋三 (運営会議 議長)  
木村 学 (運営会議 副議長)

〈〈 学会窓口委員 〉〉

日本宇宙生物科学会 小林憲正 (横浜国立大学)  
日本応用地質学会 宮本英昭 (東京大学)  
日本海洋学会 岩坂直人 (東京海洋大学)  
日本火山学会 中川光弘 (北海道大学)  
日本岩石鉱物鉱床学会 大谷栄治 (東北大学)  
日本気象学会 近藤豊 (東京大学)  
日本鉱物学会 小暮敏博 (東京大学)  
日本国際地図学会 森田 喬 (法政大学)  
日本古生物学会 棚部一成 (東京大学)  
資源地質学会 関陽児 (産業技術総合研究所)  
日本地震学会 平原和朗 (京都大学)  
日本情報地質学会 坂本正徳 (国学院大学)  
日本水文科学会 鈴木啓助 (信州大学)  
水文・水資源学会 近藤昭彦 (千葉大学樋口篤志 (千葉大学))  
// 樋口篤志 (千葉大学)  
日本雪氷学会 西尾文彦 (千葉大学)  
日本測地学会 加藤照之 (東京大学)  
// 雨宮秀雄 (国土地理院)  
日本堆積学会 角和善隆 (東京大学)  
日本第四紀学会 奥村晃史 (広島大学)  
日本地学教育学会 南島正重 (都立小石川高等学校)  
日本地下水学会 嶋田純 (熊本大学)  
日本地球化学会 川幡穂高 (東京大学)  
地球電磁気・地球惑星圏学会 石川尚人 (京都大学)  
// 小川康雄 (東京工業大学)  
日本地形学連合 齊藤享治 (埼玉大学)  
日本地質学会 久田健一郎 (筑波大学)  
日本地理学会 小口高 (東京大学)  
地理情報システム学会 村山祐司 (筑波大学)  
東京地学協会 田村俊和 (立正大学)  
日本粘土学会 山崎淳司 (早稲田大学)  
物理探査学会 三ヶ田均 (京都大学)  
日本陸水学会 小寺浩二 (法政大学)  
日本リモートセンシング学会 (仮) 石山隆 (千葉大学)  
日本惑星科学会 田近英一 (東京大学)

〈〈 運営会議 〉〉

運営会議 議長 浜野洋三 (東京大学)  
副議長 木村 学 (東京大学)  
各委員会 委員長及び副委員長 (以下, ★印)

総務委員会

★中村正人 委員長 (宇宙航空研究開発機構)  
★吉田武義 副委員長 (東北大学)

近藤忠 (東北大学), 篠原雅尚 (東京大学地震研究所), 鈴木啓助 (信州大学), 棚部一成 (東京大学), 中島健介 (九州大学), 野村文明 (株式会社開発設計コンサルタント), 平田岳史 (東京工業大), 松浦充宏 (東京大学), 松尾公一 (日鉄鉱山コンサルタント株式会社), 松島健 (九州大学)

財務委員会

★川幡穂高 委員長 (東京大学海洋研究所)  
★小原隆博 副委員長 (情報通信研究機構)  
牛尾収輝 (国立極地研究所), 及川純 (東京大学地震研究所), 木下正高 (海洋研究開発機構), 仲田洋治 (株式会社 CRC ソリューションズ), 七山太 (産業技術総合研究所), 西弘嗣 (北海道大学), 樋口篤志 (千葉大学環境リモートセンシング研究センター), 南島正重 (東京都立小石川高等学校)

広報・アウトリーチ委員会

★田近英一 委員長 (東京大学)  
★原辰彦 副委員長 (建築研究所)  
安藤寿男 (茨城大学), 内山高 (山梨県環境科学研究所), 奥村晃史 (広島大学), 黒石裕樹 (国土地理院), 黒澤正紀 (筑波大学), 佐藤智美 (清水建設), 高橋幸弘 (東北大学), 橘省吾 (東京大学), 辻村真貴 (筑波大学), 東宮昭彦 (産業技術総合研究所), 西尾文彦 (千葉大学), 藤尾伸三 (東京大学海洋研究所), 宮本英昭 (東京大学), 横山央明 (東京大学), 吉永秀一郎 (森林総合研究所), 渡辺俊樹 (名古屋大学)

企画委員会

★大村善治 委員長 (京都大学生存圏研究所)  
★吉田真吾 副委員長 (東京大学地震研究所)  
石川洋二 (大林組), 鶴川元雄 (防災科学技術研究所), 海老原充 (首都大学東京), 大谷栄治 (東北大学), 岡元太郎 (東京工業大学), 木村学 (東京大学), 近藤昭彦 (千葉大学), 齊藤剛士 (シュルンベルジェ株式会社), 高橋富士信 (横浜国立大学), 外田智千 (国立極地研究所), 森島濟 (江戸川大学)

大会運営委員会

★津田敏隆 委員長 (京都大学生存圏研究所)  
★高橋幸弘 副委員長 (東北大学)  
北和之 プログラム委員長 (茨城大学)  
篠原育 プログラム副委員長 (宇宙航空研究開発機構)  
古村孝志 プログラム副委員長 (東京大学地震研究所)  
武井康子 情報局長 (東京大学地震研究所)  
綿田辰吾 情報局副責任者 (東京大学地震研究所)  
中川茂樹 情報局副責任者 (東京大学地震研究所)  
石橋純一郎 (九州大学), 岩森光 (東京大学), 大野希一 (日本大学), 小田義也 (首都大学東京), 小野高幸 (東北大学), 加藤泰浩 (東京大学), 竹内希 (東京大学地震研究所), 田中智 (宇宙航空研究開発機構), 坪井誠司 (海洋研究開発機構), 安原正也 (産業技術総合研究所), 横川美和 (大阪工業大学), 吉田尚弘 (東京工業大学), 脇田浩二 (産業技術総合研究所)

## 教育問題検討委員会

★阿部国広 委員長 (川崎市立西有馬小学校)

★根本泰雄 副委員長 (大阪市立大学)

奥野誠 (東京大学), 武田和久 (株式会社開発設計コンサルタント), 天川 裕史 (東京大学), 吉本充宏 (東京大学), 林信太郎 (秋田大学), 宮嶋敏 (埼玉県立本庄高等学校), 古川武彦 (気象コンパス), 畠山正恒 (聖光学院中・高等学校), 坪田幸政 (桜美林大学), 赤井純治 (新潟大学), 天野和孝 (上越教育大学), 根建心具 (鹿児島大学), 宮下敦 (成蹊中学校・高等学校), 塩野清治 (大阪市立大学), 岡本義雄 (大阪教育大学附属高校), 山野誠 (東京大学), 辻村真貴 (筑波大学), 近藤昭彦 (千葉大学リモートセンシング研究センター), 樋口篤志 (千葉大学リモートセンシング研究センター), 納口恭明 (防災科学技術研究所), 中尾茂 (鹿児島大学), 松本剛 (琉球大学), 牧野泰彦 (茨城大学), 加藤禎夫 (埼玉県立小川高等学校), 南島正重 (都立小石川高等学校), 林慶一 (甲南大学), 山中勤 (筑波大学), 瀧上豊 (関東学園大学), 町田忍 (京都大学), 橋本武志 (北海道大学), 島津弘 (立正大学), 芝川明義 (大阪府立花園高等学校), 中井睦美 (大東文化大学), 滝沢由美子 (帝京大学), 村山祐司 (筑波大学), 山崎淳司 (早稲田大学), 松島潤 (東京大学), 佐々木晶 (国立天文台), 縣秀彦 (国立天文台), 鈴木文二 (春日部女子高校), 大村善治 (世話人・京都大学生存圏研究所), 佐藤毅彦 (世話人・熊本大学)

## 国際委員会

★深尾良夫 委員長 (海洋研究開発機構)

★加藤照之 副委員長 (東京大学)

橋本博文 (筑波大学), 秦野輝儀 (電力中央研究所), 植松光夫 (東京大学海洋研究所), 中田節也 (東京大学地震研究所), 西村太志 (東北大学), 有馬真 (横浜国立大学), 住明正 (東京大学), 赤荻正樹 (学習院大学), 森田喬 (法政大学), 大路樹生 (東京大学), 関陽児 (産業技術総合研究所), 古宇田亮一 (産業技術総合研究所), 平原和朗 (京都大学), 安原正也 (産業技術総合研究所), 近藤昭彦 (千葉大学環境リモートセンシング研究センター), 樋口篤志 (千葉大学リモートセンシング研究センター), 中尾正義 (総合地球環境科学研究所), 武藤鉄司 (長崎大学), 奥村晃史 (広島大学), 五島政一 (教育課程研究センター), 高橋修 (東京学芸大学), 宮越昭暢 (産業技術総合研究所), 佐野有司 (東京大学海洋研究所), 上出洋介 (名古屋大学太陽地球環境研究所), 恩田裕一 (筑波大学), 徐垣 (海洋研究開発機構), 村山祐司 (筑波大学), 福井弘道 (慶應義塾大学), 古宇田亮一 (産業技術総合研究所), 山崎淳司 (早稲田大学), 大久保泰邦 (産業技術総合研究所), 宮本英昭 (東京大学), 大内和夫 (高知工科大学)

事務局 office@jpgu.org

★岩上直幹 事務局長 (東京大学)

谷上美穂子 チーフ

武重朋子, 山口あけみ, 吉田文枝

## [5] 議事録など

◆ 日本地球惑星科学連合第1回評議会(拡大評議会)議事録 ◆

日時:平成17年5月25日(木)12:15-13:45

場所:幕張メッセ国際会議場1階NOA会議室

出席者(敬称略,日本を除く学会名50音順):

井上大榮, 宮本英昭(日本応用地質学会), 岩坂直人(日本海洋学会), 渡辺秀文, 中川光弘(日本火山学会), 大谷栄治(日本岩石鉱物床学会), 廣田勇, 津田敏隆(日本気象学会), 藤野清志, 赤荻正樹(日本鉱物学会), 北里洋(日本古生物学会), 関陽児(資源地質学会), 大竹和政, 平原和朗, 田島文子, 原辰彦(日本地震学会), 塩野清治(日本情報地質学会), 鈴木啓助(日本水文科学学会), 近藤昭彦(水文・水資源学会), 西尾文彦(日本雪水学会), 竹本修三, 加藤照之(日本測地学会), 奥村晃史, 山崎晴雄(日本第四紀学会), 南島正重(日本地学教育学会), 佐倉保夫, 丸井敦尚(日本地下水学会), 田中剛, 川幡穂高(日本地球化学会), 歌田久司(地球電磁気・地球惑星圏学会), 齊藤靖二, 脇田浩二(日本地質学会), 岩田修二(日本地理学会), 向井正(日本惑星科学学会), 山本哲生(惑星科学研連), 松浦充宏(地球物理学研連), 浜野洋三(日本地球惑星科学連合,地球電磁気・地球惑星圏学会), 中村正人(日本地球惑星科学連合,地球電磁気・地球惑星圏学会), 木村学(日本地球惑星科学連合,日本地質学会), 田近英一(日本地球惑星科学連合,日本惑星科学会) 計40名

## 配布資料

1. 日本地球惑星科学連合規約
2. 日本地球惑星科学連合評議会委員(評議員)名簿
3. 日本地球惑星科学連合運営会議議員名簿
4. 日本地球惑星科学連合運営会議各委員会名簿
5. 日本地球惑星科学連合設立準備会議事録(第1回~第5回)
6. 日本地球惑星科学連合組織図

## 議事

### 1. 評議会議長の選出

評議会議長として, 廣田勇日本気象学会理事長が推薦され, 承認選出された。

### 2. 日本地球惑星科学連合規約の承認と設立

連合設立準備会において作成された草案を検討し, 字句の訂正など意見が出され, 修正することで, 規約が承認された。この規約の承認により, 24学会を加盟学会とし, 日本地球惑星科学連合の設立が正式に決定された。

### 3. 運営会議委員の承認

運営会議のメンバーについては, 未定の国際委員会委員長及び教育問題検討委員会委員長をのぞいて, 承認された。

### 4. その他

連合評議会は年2回開催することとした。今回は10月か11月, 次々回は2006年大会の期間中に開催することとした。

◆ 日本地球惑星科学連合 第2回評議会議事録 ◆

日時：平成17年10月18日（火）15:00-18:00

場所：東京大学理学部1号館中央棟3階 336号室

出席者（敬称略，日本を除く学会名50音順）

井上大栄（日本応用地質学会）、今脇資郎（日本海洋学会）、渡辺秀文（日本火山学会）、小畑正明（日本岩石鉱物鉱床学会）、廣田勇（日本気象学会、評議会議長）、藤野清志（日本鉱物学会）、北里洋（日本古生物学会）、鹿園直建（資源地質学会）、塩野清治（日本情報地質学会）、松浦充宏（日本地震学会）、浅沼順（水文・水資源学会）、西尾文彦（日本雪氷学会）、竹本修三（日本測地学会）、松本良（日本堆積学会）、奥村晃史（日本第四紀学会）、南島正重（日本地学教育学会）、丸井敦尚（日本地下水学会）、蒲生俊敬（日本地球化学会）、斎藤靖二（日本地質学会）、野上道男（日本地理学会）、佐藤キエ子（日本陸水学会）、永原裕子（日本惑星科学会、日本学術会議会員）、浜野洋三（運営会議議長）、木村学（運営会議副議長）、河野長（日本学術会議会員）、入倉孝次郎（日本学術会議会員）、岡部篤行（日本学術会議会員）、前島郁雄（東京地学協会）、山下雅道（日本宇宙生物科学会）、村山祐司（地理情報システム学会）、中村和郎（日本国際地図学会）、熊木洋太（日本国際地図学会）、森田喬（日本国際地図学会）、中村正人（連合運営会議総務委員長）、川幡穂高（連合運営会議財務委員長）、田近英一（連合運営会議広報・アウトリーチ委員長） 計36名

配布資料

1. 日本地球惑星科学連合概要
2. 日本地球惑星科学連合規約
3. 評議会 最新名簿・運営会議 最新名簿
4. 新規加盟申請学会 ・ 申請書
5. 学会別登録者数
6. 教育提言
7. 連合ニュース NO.1
8. 学術動向
9. 会計収支報告書・予算表
10. 連合大会案内、日程
11. 男女共同参画委員会関連

議題：

1. 新規加盟学会の承認
2. 連合の運営体制の報告
3. 連合活動報告
4. 2006年地球惑星科学連合大会準備状況
5. 日本学術会議との連携・協力について
6. その他

議事次第：

1. 新規加盟申請学会承認
  - ・ 10/18 現在、新規加盟申請を受けている学会は6学会。  
日本宇宙生物科学会  
日本国際地図学会

地理情報システム学会

東京地学協会

物理探査学会

日本リモートセンシング学会 （日本を除く50音順）

- ・ このうち出席された、東京地学協会（前島郁雄会長）、日本宇宙生物科学学会（山下雅道事務局長）、地理情報システム学会（村山祐司副会長）、日本国際地図学会（中村和郎会長、森田喬事務局長）より、各学会の活動内容について紹介があった。
- ・ 日本地学連合より、10月末に開催される理事会での決定後、正式申請予定との連絡があった。
- ・ 廣田議長より、日本地学連合から今後加盟申請があった場合を含め、申請済みの6学会と合わせて7学会について承認することの提案があり、連合評議会として加盟の正式承認がされた。（意見交換・質疑応答）
- ・ 今後、連合が日本学術会議に対応していくこととなるので、地球惑星科学の関連分野、周辺分野として、もう少し分野が異なる学会（経済地理、人文地理など）を幅広く受け入れる方向で対応していく必要があるとおもわれる。

2. 連合の運営体制整備状況報告

- ・ この新規加盟学会を入れると、32学会、約40,000人を超え、地球惑星科学にかかわる人口（周辺も含め）の大部分をカバーすることになると思われる。
- ・ 組織としては、評議会（学協会代表者）、運営会議（実際の連合の運営機関として7委員会から構成）と、事務局からなるが、前回の評議会の段階で未定だった国際委員会、教育問題検討委員会の委員長・副委員長が決まり、体制はほぼ整理されてきた。
- ・ 教育問題検討委員会、国際委員会については、広い分野の意見を聞く必要があるため、各学会より必ず参加してもらっている。
- ・ 教育問題検討委員会は、現場の方と研究者からなり、各学会2-3名、国際委員会は、各学会ですでに国際対応をされているメンバーからなる。
- ・ 連合を運営するためには、人材が重要であるので、各委員会へ積極的に参加をお願いしたい。

3. 連合活動報告

- ・ 7/5 規約改正（変更点）
- 第1条 連合英語名称を Japan Geoscience Union へ
- 第10条 評議会について、各加盟学協会の長は評議員と称する。
- 第19条 運営会議メンバーへ、各委員会副委員長追加
- 附則4 加盟学会に日本堆積学会を追加、順次新規加盟学会が発生した場合は、改正していく。
- ・ 6/9 第1回運営会議開催、顔合わせ及び今後のスケジュールについて決定、第2回運営会議の開催は11/2 予定。
- ・ 7/18 第1回教育問題検討委員会開催。「地学教育」委員会改組。委員長・副委員長選出。今後は、各学会から、最低1名を選出してもらい、その代表が持つ1票をもって、議決を行う。ただし、さまざまな問題に対しては、ワーキンググループが必要であり、委員会の下に個々の案件に即した小委員会（地学教育小委員

会、教育課程小委員会、新規教員養成及び現職教員研修小委員会)を置くことが決定された。

- ・ 7/29 中央教育審議会への提言提出。地球惑星科学のみでなく、物理、化学、生物をも含め「高校生に何を学んでほしいか」バランスを考えた、「教養理科」必修4単位の履修を提言した。

- ・ 7/29 第1回大会運営委員会開催。2006年大会についてのようにおこなわれるか話し合われた。会期は2006年5月14日(日)から18日(木)、会場は幕張メッセ国際会議場、スケジュールは、例年の合同大会に準ずる形で決められた。

- ・ 9/7 第1回企画委員会開催。企画委員会は、連合大会のみならず、連合全体の企画事項に対応していくものであるが、第1回委員会では、連合大会における後援、団体展示、AOGSとの共催セッションなどについて主に議論された。

- ・ 9/29 第1回総務委員会開催。連合全体の活動について、及び今後のスケジュールを確認。未立ち上げの国際委員会についてサポートし、10月28日に第1回国際委員会を開催する。また、連合のNPO法人化を検討するため、専任弁護士と契約し手続きを進めていく。

- ・ 男女共同参画委員会を立ち上げについて  
呼びかけ人の東北大学吉田武義、京都女子大学前田佐和子、産業総合技術研究所富樫茂子、東京大学日比谷紀之(敬称略)を中心に委員会設立準備会を立ち上げる。後日、委員会設立準備会立ち上げ呼びかけの文書を正式に各学協会へお届けするので、準備会への参加を検討願いたい。将来的には、「男女共同参画学協会連絡会」に参加し、さまざまな角度からの男女共同参画についての検討議論に参加していく。

- ・ 広報・アウトリーチ委員会活動報告  
6/6 第1回広報・アウトリーチ委員会を開催。本委員会では連合内外への広報活動とアウトリーチ活動の両方を担当。アウトリーチ活動については、世界物理学年のイベント「科学の祭典」(7/28-8/2、日本科学館)の「科学者相談コーナー」において、今まで物理・化学・生物分野のみで、地学分野がかけていた企画へ、連合として対応し5人の科学者を派遣し参加した。連合ホームページにおいて、一般向けの啓蒙普及活動のためのページを立ち上げる。連合大会においては、科学未来館と連携して高校生をターゲットとした企画を行う予定。広報活動として、対外活動では、2回の記者会見、AOGSへ広報ブースを出展。対内的には、JGLと連合ニュースの発行。連合ニュースは、加盟学協会の各会員への情報伝達。JGLは、地球惑星科学のコミュニティ内の情報交流を目的とする。

- ・ JGLについて  
連合活動として地球惑星科学コミュニティの共通意識を持つ上で、重要な活動は、連合大会とJGLと認識している。JGL第1号は、個人情報登録者ダイレクトメールと各学協会の協力を得て、18000部配布した。今後20000部発行を確保したいので、各学協会においては、会員に連合への個人情報登録を促すとともに配布のご協力を願いたい。10月末までに、配布可能数をお伺いする予定であるので、ご協力を願います。

- ・ 財務委員会報告

- \* 本委員会開催前に2回の勉強会を開催し、各委員会から、今後の予算について聞き取りを済ませている。財務委員会のキーワードは、「安定的、発展的に財政問題を解決」とし、「顧客(連合大会参加者など)、及び運営側(委員会参加者)の満足度アップ」を目標とする。

- \* 決算報告書については、監査人を決めて詳細をチェックしてもらい、次の評議会へ正式な形で提出し、オーソライズしてほしい。収入¥56,019,212(雑収入IUGGからの寄付金を含む)、支出¥48,468,616、繰越金¥20,944,437。

- \* 連合になったことで、広報アウトリーチJGLで200-300万円、各委員会旅費200-300万円、AOGSなど海外との交流100万円、会則・会計などに関する弁護士・公認会計士費用が追加発生している。

- \* 委員会旅費に関して、1)委員を派遣した学会による負担、2)委員個人の負担、3)連合の負担の順で対処を依頼している。

- \* 連合に伴い、加盟学会は連合大会の主催となることにより、財政的に赤字になった場合の負担について、いくつかの学協会から危惧を寄せられた。現在、連合としては、赤字に転落することはまず考えていないが、一方で万が一の事態に備えての取り決めも重要であるため、以下のとおりの対処としたい。

- 1)日本地球惑星連合の財政が、大幅な赤字に転落した場合は、速やかに評議会に報告。

- 2)加盟学会に財政的負担を求める場合は、評議会で十分に議論され、合意のもとになされるものとする。

(意見交換・質疑応答)

- ・ JGLについて

- \* 冊子体での配布を基本とするが、連合のホームページでも、発行後1ヶ月程度の遅れをもって、公開を行っていく。

- \* 学協会での配布数が多い場合でも、JGLに関係する費用としては、印刷費より、発送費が負担になる。これらの費用の一部は、広告費によってカバーしていく予定である。今後広告費を継続して得るために、各学協会には広告主の確保のために、御協力をお願いしたい。

- \* 発送費軽減のためにも、学術刊行物として認可を得てはどうか。

- ・ 新規加盟学会は、2006年連合大会へセッション提案をしてほしい。

- ・ 連合の運営費は、今のところ全て連合大会での収入でまかなっているため、大会会計を分けることは不可能である。

- ・ 大学の法人化にともない、科研費・校費での支払いが可能になったため、学会参加費値上げに対する抵抗感が減ったという状況に変化した。

#### 4. 2006年連合大会準備状況

- ・ 現在スペシャル・ユニオンセッション提案受付中

#### 5. 日本学術会議との連携協力について

- ・ 河野会員による新体制の説明。

新しい体制の下、10月3-5日に第20期日本学術会議総会が開催

された。

(1) 組織について

- \* 新会長に黒川清氏（前期より再任、任期3年）が選出。
- \* これまでの7部制から3部制（人文科学、生命科学、理学及び工学）へ。
- \* 会長、副会長、各部部长、副部长、幹事からなる幹事会の設置。（地球惑星科学分野では、河野長氏が3部幹事に就任）。幹事会へは、かなりの権限が委譲され、今後は学術会議の執行機動的役割を担っていくことが予想される。
- \* 常置委員会として、機能別委員会と分野別委員会を設置。
- \* 機能別委員会は、企画、科学者、科学と社会、国際委員会がある。
- \* 分野別委員会は、地球惑星科学委員会を含む、30委員会からなる。これまでの研連に相当するが、その数が、研連が200に対し分野別委員会は30程度と縮小された。われわれの分野は、ほぼ「地球惑星科学委員会」として、ひとつにくらわれた。
- \* 分野別委員会の分類案に矛盾も指摘される（地球化学・宇宙化学研連が化学委員会、古生物学研連が応用生物学委員会へ分類）が、これはあくまでも懇談会の最終報告書の案であり、この分類枠を超えて地球惑星科学委員会に各分野が参加することは可能となっている。
- \* 分野別委員会の下には、必要に応じて分科会を設置することになっているが、その数は、予算の関係上、3-4つになることが妥当と思われる。
- \* 臨時委員会として、課題別委員会を設置。「地球温暖化について日本学術会議としてはどう考えるか」など時宜に応じて提言すべき場合、期間を決めて置かれることになっているが、現在はまだない。

(2) 会員とその選出方法について

- \* 学協会からの推薦での選出を廃し、会員は学術会議の中で決めるコオプテーション方式へ。
- \* 20期会員の選考にあたっては、新体制初回のためにまず会員候補者選考委員会を設置され、この委員会の主導により収集した全国の学協会・研究機関から情報提供された名簿をもとに、現210名が決定。
- \* 学術会議は、会員と連携会員をもって組織されると定義される。会員と連携会員は同等である（法律で明文化）。
- \* 連携会員の人数ははっきりとは決められていない（2000人程度）。今後会員は、第一段階として年内に400-500名の連携会員を選ぶ予定。1人の会員が推薦できる人数は、1年に2人まで。
- \* 暫定措置として、現在既に活動している国際学術団体の役員をしている会員と研連委員については、学術会議の国際活動の継続性を担保するために、当該役員在任中は、連携会員とする。

(3) 国際対応について

- \* これまでが学術会議が対応してきた国際学術団体は、47団体。このうち、われわれの分野に関連が深いものは、10-20あるので、地球惑星科学は国際的であるといえる。

- \* 国際対応については、国際委員会が設置されるが、この委員会は主に学術会議全体にかかわる案件に対応し、個々については、できる限り分野別委員会で担当していくように指示されているため、10-20ある地球惑星科学関連の国際会議などの対応は、地球惑星科学委員会が担当していくことになる。

(4) 今後のスケジュール

- \* 11/17 「地球惑星科学」分野別委員会、11/24 第3部会、開催。

(5) その他

- \* 詳細は、日本学術会議ホームページ <http://www.scj.go.jp/> の「新しい体制のあり方懇談会」の最終報告書を参照いただきたい。新体制立ち上げの手続きは、全て日本学術会議法に定められ、「新しい体制のあり方懇談会」の最終報告書に忠実に則っている。
- \* 分野別委員会は、直接学協会とは対応せず、連合と対応する。ただし、学協会とのつながりなしには、学術会議の活動は進まないことには変わりはない。地球惑星科学分野においては、今後学術会議と学協会との情報交換の窓口を連合に依頼したい。
- \* 分科会の数、分類は未定であるが、11/17までに、分類案について意見情報があれば、提供してほしい。
- \* 学術会議からの情報は、可能な限り早く発信したいので、連合及び加盟学会への連絡先を指定してほしい。  
(補足、意見交換・質疑応答)
  - ・ 日本学術会議への地球惑星科学コミュニティの受け皿として、この連合には大きな働きを期待するが、地理学関連についてまだ加盟していない学協会があるということで、今後検討していただきたい。
  - ・ 地理学が地球惑星科学分野別委員会に属することは、最近認知された。分野の発展のために必要と考えられるが、地理学関連は、たくさんの学会が存在するので、まとまるには時間がかかることが予想される。しかし、これから継続的に説明し、参加をよびかけていく。
  - ・ 19期から、20期へ、研連の申し送り事項は、かなりの学協会からの意見を集約しているので、活用してほしい。
  - ・ 連合規約においては、第10条を改正し、学術会員会員の連合評議会への参加を明文化し、本日の評議会の日付（平成17年10月18日）で承認されたこととする。また、学術会議情報を連合ホームページに掲載していく。

6. その他

- ・ 次回評議会は、2006年連合大会会期中に開催する。

◆ 日本地球惑星科学連合 第1回運営会議事録 ◆

日時：平成17年6月9日（木）10:00-15:30

場所：東京大学理学部1号館中央棟8階851号室

出席者：（敬称略）

岩上直幹、大村善治、小原隆博、川幡穂高、高橋幸弘、田近英一、津田敏隆、中村正人、浜野洋三、原辰彦、宮本英昭、吉田真吾、

吉田武義, 武重朋子, 吉田文枝, 山口あけみ 計 16 名

配布資料:

1. 議事次第
2. 日本地球惑星科学連合規約
3. 要約
4. 2005 年合同大会資料
  - ・ 参加人数集計報告
  - ・ 2005 年大会セッション開催状況 (会場係アンケート)
  - ・ 年間スケジュール
  - ・ その他 (参考資料: プレス関連)
5. 日本地球惑星科学連合運営会議及び委員会名簿

議事:

#### 1. 日本地球惑星科学連合規約の変更

・ 第一回拡大評議会において、語句に関しては変更した方がよいことを含んだ上で連合規約は了承された。これを受けて以下の変更を行った

変更点①: 第 19 条「各委員会の委員長等として」の「等」は規約として認められない。  
「各委員会の委員長, 副委員長及び事務局長として」に変更する。

変更点②: 第 10 条 (1) 及び附則 3 の中の「加盟学会」は「加盟学協会」に変更する。

変更点③: 第 28 条「運営会議が議員の中から選任する」を「運営会議が選任する」に変更する。なお、第 19 条と第 28 条の矛盾が指摘されたが、発足時の委員選考については附則 2 に記載されているので問題ないことが確認された。

A/I: 総務委員長と総務副委員長は、連合規約について法律家に相談する。

#### 2. 連合の英語名称および略称

・ 案として、Japan Geoscience Union, Japan Geo-Science Union, Japanese Union of Earth and Planetary Science がある。  
・ 最も望ましいと思われる Japan Geoscience Union (JGU) については、略称が日本地形連合という学会と重複しているため、現時点での使用は不可能である。略称としては別のものを用いなければならない。  
・ Japanese Union of Earth and Planetary Science (JUEPS) は、記者発表 (5 月) を行った事を考慮し、当面の有力候補とする。

A/I: 案を運営会議議長、総務で相談した上で廣田評議会議長から評議会へ提議していただく。

#### 3. 各委員会の今後の活動など各委員会の役割と課題が討議された。

<財務委員会>

・ 今後の課題は、将来の活動のための収入増である。  
・ 合同大会終了直後の決算では未回収金が多い為、今年度から現在の前年 7 月 - 翌年 6 月から前年 10 月 - 翌年 9 月に決算期を変更する。次回評議会に報告し承認を得る。  
・ 収入については、これまでは大会参加費等であったが、これか

らは企業へ積極的に働きかけて援助いただくことを検討する  
<広報・アウトリーチ委員会>

・ 対外的な情報発信を担う。一般市民向けのアウトリーチ・講演会・出前授業・インターネット等。

・ 対内的な情報発信として、連絡会ニュース (議事録・大会案内) の他に惑星科学のコミュニティに対する広報誌を年 4~6 回発行したい。

<企画委員会>

・ 合同大会の展示数を増やし、後援組織を確立すると共に、研究者向けセッション・英語セッション、AOGS との共催等、諸活動の提案をする。

<大会運営委員会>

・ 合同大会の運営を旧運営機構から引継ぐ。

・ 大会の発展のため、参加者の満足度を上げる必要性が指摘された

・ 現在のポスター会場では、盛況なので狭くて見られないという不満の声が出ている。ポスター会場を展示場へ移すことも検討する。展示場の使用料は、半分のスペース 3000 m<sup>2</sup> 使用の場合で 1 日あたり 100 万円プラス冷暖房費である。

<総務委員会>

・ 連合の法人化については、将来の検討事項とする。

・ サーバーの名称変更をする。買い取る必要があるものがあり (約 1000 ドル) これを基に新しいメーリングリストを整備する。

・ 評議会の規約原案と合同大会の規約原案を作成する。

<連合事務局>

・ 現在の事務局の部屋は、8 月末までに出していかなければならない。

・ 東大内の部屋が有料で借りられる間はそれに対応したい

・ 長期的に賃貸契約を結んで部屋を別に借りることも考えておく。

<教育問題検討委員会立ち上げ>

・ 現状との継続性から教育問題検討委員会の下に地学教育小委員会、教育課程小委員会を作ることを検討する。

・ 教育課程小委員会は、カリキュラムの提言を 7 月中に文部科学省に提出する。

・ 6 月 18・19 日に教育課程の研究集会が東京大学内で行われる。

今回の研究集会の費用は S T E 研が負担する。

・ 連合では、今後、中等教育のみならず、大学・大学院教育、生涯教育を含めて検討していく。

・ 教育問題検討委員会は、最初の委員会で委員長を選出することとする。

<国際委員会の立ち上げ>

・ 吉田総務副委員長が世話役となり、加藤委員 (国際委員) と共に初回委員会の開催に努める。

・ 国際委員会は、最初の委員会で委員長を選出することとする。

<その他>

・ 加盟学協会への連絡は、月 1 回運営会議から行う。総務委員会から連絡委員にメールで行うが、その際必ず cc に学会事務局を入れること (着実な連絡の確保のため)。

・ 連合事務局は、メールアドレスを委員会毎に整備し、運営会議のメンバーに通知する。

・ 委員会開催時の旅費については、各委員会とも他に負担を求められない場合は極力連合が負担する。(教育検討委員会の小委員会などは別途考慮する)

#### 4. 新学術会議対応

・ 新学術会議は 10 月 1 日に会員 210 名でスタートし 10 月末連携会員を選考する。国際学術団体対応の委員は、現在の研連の委員が連携会員へ移るといった情報がある。常時連携すべき学術研究団

体は今の団体を全て移行する。

・学会議の雑誌「学術の動向」への論文投稿は、評議委員会議長が行う。

## 5. 2005年合同大会総括と2006年大会準備

### 総括

- ・参加数・投稿数共にここ数年増加しつつある。
- ・参加収入は増加したが、ほぼ全期間全会場を使用したので会場費等支出も増加した。従って、収支はバランスしている。
- ・昨年度に比べ学会会合会場費は5割値上げした。
- ・OHPの使用は1割程度だった。2006年大会からはリクエスト制とする。
- ・国際セッションに関しては教育効果は絶大であったので2006年以降も継続する。特集号を組んで記録を残したいという意見が出された。
- ・プレスの半数が「西方沖地震」が目的で来場していた。

### 来年度へ向けて

- ・「合同大会」の名称は変更しないで現行のまま使用する。「関連学会の合同大会」から「連合の合同大会」へ。
- ・会場数の限界もあるが、投稿数は今後も増やす方向で活動を進める。
- ・個人情報保護法が施行されたので個人情報のフォーマットを全面的に変更し、余計な情報は持たないようにする。(A/I 大会運営委員会情報局)
- ・幕張メッセ担当者の対応が大変良いので今後3~4年は幕張メッセで行う予定である。
- ・情報局とプログラム局は、早急に2007年合同大会の各局長を決める必要がある。但し、同じ学会の人が続く事の欠点も考慮する。
- ・プログラム委員選出依頼を各学会(連絡員、学会事務局)にだす。(共催学会のみ)
- ・今年は運営機構構築から5年目なので、当初の申し合わせにあわせて、プログラム局はセッションの見直しをする。日本人のセッションに英語表記し、名札も英語名を併記することが改善事項として出された。
- ・2006年大会で会場を広げる相談は、大会運営委員会と総務委員長、事務局で幕張メッセになるべく安い料金でできるように交渉する。セッションを増やしたい学会もあるので、ポスター数を増やすことが決定したら各学会にアナウンスし、セッション提案を積極的にしてもらおう。来年の合同大会の会場を増やすか日程を延ばすのかは、今後の検討事項である。
- ・合同大会での発表は、学会に所属していなくても可能であることをアナウンスしたほうが良いのではないかという意見が出された。連合としては、学会に所属していない人(特に院生)についても、今後とも、発表や参加の機会を与える方向が望ましいと思われる。

### その他

- ・連合としては、合同大会の収入だけではやっていけない。収入源は、参加費のほか寄付金、企業からの資金援助を検討する。なお、98年以降、各学会から分担金は徴収していない。
- ・広報・アウトリーチ委員会の中に情報担当を置く。
- ・剰余金は、基金として管理したほうが良いという意見が出された。連合設立の臨時費用がまだ未定なので、剰余金の運用は、10月からの検討事項とする(財務委員会)。

## 6. ニュースレター誌

広報・アウトリーチ委員会からの報告：

広報委員会としては、コミュニティ意識を高めるため連合のファンクションとして重要であるニュースレター誌を年4回発行したい。予算は年間600万円、A4版、全ページカラー12ページ、読み物中心、各分野の最新トピックスを掲載する予定。毎号3つ位の分野からトピックスを出し、別の分野の人に向けて発信する。

費用捻出の為に案として以下が挙げられる。

- ①企業の折込チラシを入れる。
- ②継続的に支援してもらえる合同大会のスポンサー企業を検討する。
- ③来年2号目の広報誌には広告を掲載し、広告料収入を得る。
- ④個人情報登録費を徴収する。
- ⑤個人情報登録をしている人には、しばらくは無料配布し、認知されれば有料化も検討する。
- ⑥将来的には会費を徴収する。

### 議論：

- ・ニュースレター発行のためだけに参加費の大幅な値上げは難しい(小幅な値上げは連合運営上必須)ので、上記の他にも次回運営会議までに情報を持ち寄ることとする。
- ・配布方法は、電子的・紙媒体の発行を併せて行う。紙媒体は個人宛に送付する他、大きな研究機関・大学・博物館等にはまとめて送ることにより郵送料の削減を図る。
- ・まず、ニュースレター誌「初号」を発行し、2号目からの発行については、発行回数・ページ数等を次回運営会議の懸案事項とする。初号の費用は、財務委員会が検討する。
- ・ニュースレター誌の他に以前から発行していた「連合ニュース」は、引き続き発行する。名称は、「日本地球惑星科学連合ニュース」とし、第1号は8月初旬に発行、連合規約等事務的な事柄は可能な限り掲載する。

## 7. その他

- ・2005年6月下旬のAOGSに展示ブースを出展する。ロゴは、略称が未定なので使用せず合同大会旗(JEPS)を持参する。
- ・運営会議は、年4回程度行う。

日本地球惑星科学連合ニュース 第2号  
2005年12月7日発行

発行：日本地球惑星科学連合  
運営会議議長 浜野洋三  
編集：広報・アウトリーチ委員会  
連合ニュース担当 佐藤智美